

継帝記異聞録

第二章：少年達

明日見（あすみ）が荷車に運び込まれてから、既にかかなりの時間が経つ。

もちろん椅子に拘束されたまま、一切の身動きを禁じられた明日見には、正確な時間を計る術はない。

ただ、明日見が生まれつき持ち合わせた直感によると、あの薄暗い倉庫から荷車に移されて、三刻～四刻（約三～四時間）程経った頃に荷車が動き出したと思う。

荷車が動き出してから、ほぼ同じくらいの時間が経つのだろうか。

もし明日見の直感が正しければ、いい加減昼時を向かえていてもおかしくはない刻限である。

しかし、様々な荷物とともに荷車に椅子ごと寝かされたまま、幾ら整備された石畳の街道とはいえ、荷車の振動は容赦なく明日見の全身を揺さぶっていた。

更には、荷物全体を覆う簾が被せられた上に、荷車そのものにも日除けの幌が据え付けられていたから、明日見には外の様子がまるで分からなかった。

常にガタガタと全身を揺さぶって、正常な聴覚を奪う荷車の振動に紛れて、時折ならず者らしい男の声も微かに聞こえるが、話の内容までは聞き取れなかった。

——結局昨夜から何も口にしていない。このままではお昼も食べられないのだろうか。

昨夜、ならず者達の首魁の灰人（かいと）から、『性の慰み者として引き渡される』という自分の運命を直接聞いたにも関わらず、明日見にはそれが余りにも非現実には思えた。

あるいは、その様な屈辱的な仕打ちを受けるかも知れないと言う、自分の運命の行く末を思い悩んでみても、返って気分が落ち込んで居たたまれなくなる為に、敢えて考えない様に努めている風でもあった。

いずれにしても、このまま椅子に拘束されている限りは身動きが取れないのだから、椅子の拘束から解かれる好機を伺ってじっと待ち続ける……それだけが、今の明日見には唯一出来る事だった。

とにかく、一刻も早くこの状況を脱しなければ、灰人と同類のならず者の手によって、筆舌に尽くし難い様々な陵辱の限りを尽くされて、身も心もボロボロに傷つけられてしまう。

そんな未来への不安が浮かんでは、慌ててその考えを打ち消そうと、全く関係のない対象に強引に意識を向ける。

そんな事を、もう何回繰り返しただろうか。

——今頃、慶太はどうしているのだろうか？

明日見にとってもう一つ気掛かりな事は、灰人の手によって奴隷商人に売り払われたと言われる、慶太の行方だった。

明日見の知る限りでは、人身売買は天下の重大犯罪であり、余程混乱した世の中でもなければ、徹底的に取り締まれる違法行為だった。

帝政末期や、帝が不在の混迷期には、一時的に奴隷商人が蔓延って社会問題となる時期もあるが、大抵は新たな帝が立って治安が安定すれば奴隷商人も消えるし、帝が人身売買を徹底的に取り締まるものだ。

少なくとも、明日見が歴代の帝記から得た知識によればそうになっている。

ましてや、昨日治安部隊で聞いた話によれば、この東晶（ひがししょう）共和国は中原諸国でも治安が良いのだと言っていた。

その東晶共和国の、しかも辺境とも言える片田舎にまで奴隷商人が出没するなんて、明日見の知りうる限りでは常識の範囲外の出来事だ。

もちろん、明日見を騙し討ちに捕らえた、あの灰人の言葉を素直に信用出来るものではないが、現時点で慶太の消息に関する情報は灰人の言葉くらいしかない。

それに、灰人ならば、薄ら笑いさえ浮かべながら、平気で慶太を奴隷商人に売り渡しかねない……明日見にはそう感じられた。

いずれにしても、この縛めを解かない限りはどうにも身動きが取れない。

明日見が改めて自分にそう言い聞かせ、つい悪い方へと傾きがちな気持ちを再度引き締めた矢先に、荷車の振動がはたと止んだ。

明日見が息を殺して耳を澄ますと、耳障りな雑音に紛れてヒタヒタとこちらへ近づく複数の物音がして、更に灰人とならず者の一人の会話が耳に入った。

「灰人さん、本降りになりそうですね」

本降りと言う事は、先程からの耳障りな雑音は雨音なのだろうか？

「そうだな。本来なら出来るだけ先を急ぎたい所だが、季節の変わり目の嵐と言う奴を、余り馬鹿にしない方が良さそうだ」

「ですね。何しろここにはでっかい荷物もありますしね」

「そういう事だ。ところで、荷物の具合はどうだ？」

「それなら俺が見ます」

今度は別の声が答えた。

この声には聞き覚えがある。

そのままヒタヒタと一対の足音が荷車の脇を通り、明日見の頭上付近で消えた。

——来る！

瞬間、明日見を頭から覆っていた筈が取り払われ、突如差し込む光に視界を奪われた明日見の目には、真っ黒い影の野卑な笑いしか映らなかった。

——曾頓（そとん）！

明日見は眉間に皺を寄せて影を睨みつけた。

思わず猿轡の奥で歯をギリギリと噛み締めてしまう。

その生理的嫌悪感を極限にまで高める表情は、現在の明日見が最も眼にしたくない対象だった。

「そんなに怖い顔で睨まないで、もうしばらく大人しくしてな」

影は特に何をするでもなく、再び筈を閉じた。

「灰人さん、異常なしです。相変わらず刺す様な目つきで睨みつけて来ますぜ」

「ふん。ますます曾頓クンの好みと言う訳か。それにしても、明日見クンは他の女と違って、なかなか落ちないな。まあ、その強情がどこまで続くのやら、こちらとしても見物ではあるが」

——灰人の奴、他人事の様に言ってくれる……。

明日見は、急速に沸き上がった怒りのやり場が見つからずに、ただ心の奥に激情を募らせながら、猿轡を噛み締めていた。

灰人達の様な連中になす術もなく拘束されていると言う事もあるが、そんな灰人らに呆気なく捕らえられて仕舞った自分自身への怒りもあった。

あの時はどうしようもなかったかも知れないけれども、もう少し慎重に事を運んでいれば、他に幾らでもやりようがあったのかも知れない。

単身『子猫と鼠亭』に忍び込まずに、治安部隊に駆け込めば良かったのかも知れない。

でも、私が乗り込んだ時には既に慶太の姿はなかったのだから、幾ら治安部隊でも、灰人たちがしらばっくれればどうにもならなかったかも知れない。

そうだとすると、私が呆気なく捕まってしまうなければ、もう少しやりようはあった筈。

明日見の回想は、再び荷車が動き出してからも続いていた。

その間は外部の雑音も一切耳に入らず、ただただ自分の拙速な行動と、それがもたらしたどうにもならない現状を嘆いていた。

荷車はいつしか街道の石畳を外れ、それから程なく再び停止した。

思わず冷静さを欠いてしまった自分を恥じた明日見は、周囲の僅かな音声をも聞き漏らすまいと、神経を耳に集中した。

相変わらず雨は降っているらしい……と言うより、ますます雨足を強めている様に思える。

ばたばたとひっきりなしに頭上の幌を打つ無数の雑音に紛れて、ならず者らしき何人かの声がする。

「こりゃ本格的になって来たな」

「それにしても、こんな町外れによく小屋があったもんだ」

「といっても、打ち捨てられてしばらく経つみたいだけだな」

「まあ、屋根があるだけマシだろ。さっさと小屋に入ろうぜ」

「灰人さん、例の荷物はどうします？」

「こんな町外れで、この雨の中に盗人が出る事も無かろう。どうせ金目のものなんて入っていないのだからな。小屋の窓からでも見張るくらい出来るだろう？」

「そりゃあできますが、あの女も放りっぱなしでいいんですか？」

「あれだけ頑丈に椅子に縛り付けているのだから、逃げられないだろう。わざわざ荷車から降ろす手間を考えてもみたまえ」

「そうですね。そうしたら、俺が窓から見張ってます」

そんな会話を残して、ならず者達の気配は消えた。

今の会話からすると、ならず者達は雨宿りの出来る小屋を見つけて、今は全員小屋の中にいる様だ。

多分、荷車は小屋のすぐ側に置かれているに違いない。

少し離れた所から複数の駝の鳴き声ができるのは、多分荷車を牽引して来たものや、ならず者達が乗って来た駝なのだろう。

これからの本格的な嵐の到来を予感しているのか、先程からやけに騒がしい。

しかし、そんな駝の鳴き声を容易にかき消してしまう程、雨足は強まっていた。

ならず者達が全員荷車から離れた今は、ある意味明日見にとっても好機ではあったのだが、両腕まで嚴重に固定されていては、逃げ出すきっかけを掴む事さえ不可能だった。

せめて、太腿に結わえ付ける様にして忍ばせている、母の形見の脇差しにさえ手が届けば、何とか全身の縛めを切断する事も出来るのだが。

明日見に取っては、たとえ捕らえられたとはいえ、灰人達が明日見に碌な所持品検査さえ行なわないまま拘束されている事が、ある意味では不幸中の幸いと言えた。

明日見の太腿には、いざと言う時に備えて脇差しが忍ばせてあったし、何よりも大切な革袋も、金貨の入った布袋も懐の隠しポケットに入ったままだったし、先日質屋で両替した百圓札も油紙に包んだまま無傷で所持していた。

それに、たとえ東晶共和国限定とはいえ、入手したばかりの携帯地図も手元にある。

お気に入りだった探険士仕様の衣服の上下は、老師の小屋に干したままにできてしまったし、せっかく老師に受けた講義の内容を記したノートを始め、老師の小屋に置き去りにしていた荷物はきっと跡形もなく焼けてしまっただろうが、これだけの所持品が手元にあると言う事は、まだ明日見にも運が残されている証明にも思えた。

とにかく、現在の状況さえ脱すれば、そのまま慶太を追跡する事さえ可能だろう。

——問題は、この縛めをどうやって解くか、か……。

まるで、そんな明日見の思惑を嗅ぎ付けた様に、あるいは、明日見の運が味方を呼び寄せたかの様に、明日見を覆っていた筈が不意に取り払われた。

「うっ！」

黒い影は一瞬くぐもった声を漏らしたが、椅子に頑丈に拘束され、猿轡まで噛まれた明日見の扱いに困っていると言う風だった。

ならず者ではない……瞬時にそう悟った明日見は、影の反応を慎重に見極めようと、目の前で見下ろす影に全神経を集中した。

「お前、奴隷商人に捕まったのか？ それとも悪い奴に攫われたのか？」

ちょうど声変わりの最中と言った頃の、少年の声だった。

明日見がその声に答えて、二度、三度と頷いてみせると、少年の手が猿轡に伸び、明日見は徐々に顎の自由を回復した。

「ありがとう」

明日見はそういうのが精一杯だった。

長時間の拘束の影響から顎の感覚がおかしくなっており、口が滑らかに動かないのだ。

「って事は、この荷車には金目の物は何も積んでないんだ」

少年は少々気落ちしたようだった。

「小屋からずっと見張っている筈だから、気をつけて。あと、縄を解いてくれるとありがたいのだけど」

明日見は顎の違和感を堪えながら、それだけを何とかいい終えた。

確かにならず者は『小屋の窓から見張っている』といったが、幸いにも荷車の後ろ側は小屋から隠れる様な位置取りだった為、明日見は何とか少年の目に留まったのだ。

これが小屋に対して逆向きだったら、少年は荷車に見向きもせず立ち去っていたかもしれない。

後は、この少年が縛めを解いてくれるかどうか……。

少年は無言のまま荷車に乗り込むと、そのまま椅子に拘束された縛めを手にした小刀で切断してくれる。

縄の跡がくっきりと食い込んで、皮膚の色も気味悪く変色していたが、とりあえず身体機能そのものは失われていない様だ。

「でも、どうしてこの荷車に？」

「ああ。俺、てっきり普通の旅人の荷車かと思って、金目の物を失敬しようと覗いてみたんだけど、そしたらあんたが縛られてたって訳」

「旅人目当ての盗人かなにか？」

「別に好きでやってる訳じゃないよ」

「そう、何か事情があるんだ……」

「いいだろ、そんな事別に。じゃあ、俺行くから。あんたもまた捕まんない様にうまく逃げろよ」

少年はそういい残して荷車から静かに降りた。

「待って。私にはここが何処だかわからないから、付いていったら駄目？ とりあえず奴らから逃げたいの」

明日見は思わず少年を呼び止めていた。

少年は自ら盗人だと名乗ったが、明日見の縛めを解いてくれた恩人でもあった。

それに、見た感じからはとても悪事を働く様な少年には見えなかったので、自分の直感を信じて、土地勘のあるらしい少年についていくべきだと決めたのだ。

最悪自分の判断が間違っていたとしても、あの灰人や曾頓らの顔だけはもう見たくないし、この少年の方がまだ扱いやすいと判断したからだ。

「わかった。じゃあ、俺に付いてこいよ」

ややあって、少年が明日見に答えた。

＊

少年の住まいは、灰人たちが雨宿りしていた小屋から更に半刻（約三十分）くらい歩い

たところにある、小さな丸太小屋だった。

大きさはそれこそ迷いの森に住む精三（せいそう）さんの丸太小屋と似たようなものだったが、その小屋は久しく人の手が入っていないように見えた。

全身雨に打たれてずぶ濡れの二人が小屋に入ると、子供ばかり四人が出迎えた。

「兄ちゃんおかえり。酷い雨で大変だったね」

「今日は食べ物もって来てくれた？」

「すごい濡れてるね」

「このお姉ちゃん誰？」

みんな、この少年より小さい。

父親とか母親のいる気配もないし、まさか、この子供たちだけで生活していると言うのだろうか？

「大きい方から、逢蘭（ほうらん）、三蔵（さんそう）、延尊（えんそん）、遥采（ようさい）だ。そして俺が基経（もとつね）だ。あんたは？」

「私は、明日見……」

「明日見か。とりあえず、この濡れた服を脱いで雨を拭った方がいい。逢蘭は俺と明日見に手ぬぐいと、俺の寝巻きと、明日見にも何か服だ。三蔵は、なんか温かい物を持ってきてくれるか？」

基経と名乗った少年は、それぞれの子供達に手短に指示を出すと、さっさとその場で上着を脱ぎ始めた。

滴る雨水が床を濡らす。

間を置かずに逢蘭が隣の部屋から二人分の手ぬぐいと、基経の寝巻きらしき服を持ってきた。

基経は逢蘭から手拭いを受け取ると、さっさとずぶ濡れの上着を脱ぎ捨てて、濡れた上半身を拭っている。

こういう事は珍しくないので手馴れている……といった感じだった。

明日見も逢蘭から手拭いを受け取ったが、さすがに、見るからに年が近そうな基経の前で肌を晒す気にはなれなかった。

「明日見も早く雨を拭った方が……そっか、明日見は子供じゃないんだから、俺達の目が気になるよな。そしたら、逢蘭は明日見と隣の部屋へ行って面倒見てやれ」

「わかった。明日見さん、こっちへ」

逢蘭の後について、明日見がピチャピチャと雨粒に塗れた足音を響かせながら、隣の部屋に入ってゆく。

その部屋は寝室のようだった。

明らかに手作りと思える、少々小さめの寝台四つが、所狭しと並べられている。

明日見はその隙間で周囲に水飛沫が飛ばない様に気を配りながら、上着のポケットから全ての所持品を出して床に置き、そのまま上着の上下を脱いで手拭いで雨粒を拭った。

軽く全身を拭っただけで、小さな手拭いでは絞れるくらいの水分をすぐに含んでしまう。

「兄ちゃん、明日見さんが着れる様な服が無いんだけど……」

「そうしたら、俺の寝床の上掛けでもあてがってやれ。どうせ服が乾くまでの間なんだから」

逢蘭の声にもすぐに基経の指示が飛んでくる。

幾らなんでも寝床の上掛けって……明日見が内心釈然としないものを感じた矢先に、逢蘭が明日見の気持ちを察したのか、言葉を添える。

「ごめんなさい。ちゃんとした服を用意出来なくて。私たちにはお金が無いから、そんなに何枚も服を持っていないし、明日見さんは兄ちゃんと同じくらい大きいから……」

「いいのよ。気にしなくても。元々私が無理を言っただけで来ただけだから。それよりも、濡れた服はどうしたらいいかしら？」

「私が、向こうに持って行って干しますから。あと、下着はいいんですか？」

「でも……」

「あとで私が洗って干しておきますから……。それから、兄ちゃんの上掛けはこれですか……」

ふうっ……明日見は軽く溜息を漏らすと、やはり上着同様雨水を吸った下着を脱いで逢蘭に手渡す。

そのまま裸のままの体に上掛けだけを巻きつけると、床ですっかり水気を吸った所持品の雨粒を手拭いで拭いた。

「あの、兄ちゃんはああいう性格だから、細かい気使いとか至らない所はありますが、わざとやっているんじゃないんです。あんな人だけど、本当はとってもいい人なんです」

「いいのよ。そんな事は、逢蘭ちゃん達が基経君を信頼してるのが見えるから、よく分かる。ごめんね、逢蘭ちゃんに余計な気を使わせて」

「いえ……」

大雑把でがさつな一方、面倒見もよく男気のある基経と比べて、逢蘭は女の子らしくよく気のつく、しかしどこか受身で線の細さを感じさせる少女だった。

それこそ今の逢蘭と同じ年の頃には、始めたばかりの武闘術の稽古をよくサボっては、木の上で昼寝をしていたり、遥か彼方の景色を眺めていた明日見とは、全く相容れない性格と言っても良かった。

逢蘭が明日見の濡れた衣服一式を持って隣の部屋へ行くと、入れ替わるように基経の声が明日見を呼ぶ。

「明日見。今温かいお茶入れたから、こっちで飲もうぜ」

「わかった。今行くから」

慌てて所持品一式を両腕に抱えて明日見が隣の部屋へ行くと、既に基経は寝巻きと称する、一枚布の中心に首と両手を通す穴を開けただけの様な衣を纏って、テーブルでお茶を飲みながら寛いでいた。

「濡れてしまった荷物も乾かしたいんだけど……」

「私が預かりますから……」

明日見の上着の水分を絞ってから干していた逢蘭が、慌てて明日見の元に駆け寄る。

一人で甲斐甲斐しく動き回る逢蘭に、少々気が咎める思いを残しながら、明日見は逢蘭に荷物を託して、基経と対面する席に腰掛けた。

「こうやって見ると、明日見って、結構いい女だな」

明日見は、基経の寝床の薄っぺらい夏用の上掛け一枚を体に巻き、胸の所で内側に織り込んで留めているだけの状態だったから、ある意味結構挑発的な格好と言えた。

とはいえ、やむを得ぬ事情があつてのこの格好だったので、明日見自身も何となくそわそわして落ち着かなかった。

「わあ、明日見のおっぱいでっかくて、おいらの母ちゃんみたいだ」

「バカ。延尊の母ちゃんは明日見みたいに可愛くないだろ？」

「そんな事無いよ。おいらの母ちゃんは綺麗だったからね」

「ねえ、明日見お姉ちゃん、抱っこして」

そんな感じで、三蔵と延尊、遥采の三人が待ってましたとばかりに明日見に絡んでくる。

ちょっと意外な歓迎に少々面食らった明日見だったが、一番年下の遥采を抱き上げると、遥采は顔を擦りつける様にして明日見にしがみ付いてくる。

「すまないな。こいつら、母親を懐かしがってるんだ。しばらくそのままにしててやってくれるか？」

「それは構わないけど……」

「所でさ、明日見を捕まえてた奴って、一体誰なんだ？ 奴隷商人にしちゃあ随分と集団で移動していた様だけど」

「あいつらは、ならず者集団なの。東辺町のね」

明日見は、自分達が灰人らに目を付けられた事、世話になった代峰老師の小屋が放火された事、慶太が奴隷商人に売り払われてしまったらしい事、明日見が灰人らに掴まってしまった経緯を、かいつまんで基経に説明した。

いわば命の恩人のような者なのだから、その程度の話を書かせるのは最低限の礼儀だと明日見は思った。

もちろん、話してはいけない事は当然省いた上ではあるが……。

「って事は、明日見はその灰人とか言う奴らに、奴隷商人みたいにしてどっかに売られる直前だった訳だ」

「そうね。そうなるかもね」

「で、その慶太って奴は、もしかしたらもう奴隷商人に売られたかも知れないんだ」

「灰人の言葉を信じるならば、ね」

「しかし、東辺町にまで奴隷商人が来てるとはね」

「という事は、この辺にも来る訳？」

「いや、見た事は無い」

「そう。ところで、基経君達は、この五人だけで暮らしているの？」

「まあな」

「立ち入る様で悪いんだけど、お父さんやお母さんを亡くされたとか？」

「まあ、今はいい事は確かなんだけど……俺達、元はみんな孤児なんだ」

「孤児？」

「だから、父親や母親が今どうしてるかなんて、分からない。大体ここにいる五人だって、元はあかの他人なんだ。以前はみんな、ここから半刻（約三十分）くらい歩いた辺りの、野平（のひら）町の町外れにある『瑞巖院（ずいげんいん）』って言う寺院で世話になっていたんだ」

明日見もかつて、中原地帯で天帝の訓えを護り広め、人々が誤った道を歩まないように導く『寺院』と言う施設が、中原地帯の各所にあると言う話を聞いた覚えがあった。

基経がいう様に、『寺院』が孤児院の様な役目を担っているのだとしたら、やはりそれは天帝の訓えに基づいた庶民救済の為の活動なのだろう。

「大抵は親と死に別れたり、家出したり、その他色々な理由で浮浪児になった奴らが流れ着いたり、後は『瑞巖院』の境内に捨てられていた様な子供もいた。一番多い時は、四十人くらいもいたかも知れない。みんな、初級学校を卒業して、働きに出られる十五歳になるまで『瑞巖院』の世話になるんだ。『瑞巖院』の住職はちょっと厳しいけど、でもいい人だった。みんな貧しかったけど、それでも飢える心配もなく、多くの仲間と一緒にいたから、それ程寂しくもないし、結構気に入ってました。でも、そんな住職が一年近く前に急病で死んで、その後に新しい住職がやってきた」

いつの間にか、明日見の腕の中で幼い末娘の遥采が静かに寝息を立てている。

基経は一旦言葉を区切り、目の前の茶碗に口をつけて、お茶で軽く喉を潤してから、再び言葉を継いだ。

「新しい住職は酷い奴で、『瑞巖院』から俺達孤児を殆ど追い出したんだ。追い出された俺達は、みんなで相談して、野平町の近辺に四～五人位ずつに別れて暮らす事にした。でも、働きに出られる年齢にもなっていなかった俺達には、まともな方法でお金を稼ぐ事が出来なかった。そこで、今は四つに分かれている各集団から一人ずつが代表となって、その代表者が旅人を狙った盗人をして、その金で生きてきたんだ。別に俺だってこんな事をしたいと思わないし、俺一人なら多分やってない。でも、俺の稼ぎがこいつら全員の生き死にに繋がるから、嫌でもやらない訳には行かない。明日見は、こういう考え方が気に入らないんだろ？」

基経の苦虫を噛み潰した様な渋い表情に、明日見は答える言葉を失っていた。

基経は多少大雑把かも知れないけど、進んで悪事を働く様には見えなかったから、何らかの事情があるとは思っていたが、確かに止むに止まれぬ事情と言えるかもしれない。

もちろん、だからといって盗人が許されるとは明日見も考えないが、それでも情状の余地がある事情に思われた。

「基経君が悪い人には見えなかったから、『なぜ盗人を？』って思っていたんだけど、何となく事情は理解できたと思う。でも、それなら、寺院にもっと訴えかけるとか、別の方法があったと思うんだけど……」

「そんな事は一番にやったさ。でも、今の住職は昔の住職と違って、多分根っからの悪い奴

なんだ。さっき、『瑞巖院』の孤児は殆ど追い出されたって言ったけど、全員追い出された訳じゃなくて、多分七～八人はまだ残されたままなんだ。だから、俺達がどういう理由で追い出されたのかも、本当の所は良く分からない。町役場にも何とかしてもらおうようお願いしたけど、住職は『財政が逼迫してこれ以上面倒を見切れない。町役場がそういうなら見合うだけの補助金を出してくれ』といったらしい。結局、俺達は寺院からも、町役場からも見放されたんだ。だから、仕方なく盗人もやって……。もちろん、町には俺達に良くしてくれる人もいる。でも、寺院を追い出された二十人からの孤児全員の面倒を見るなんて、普通の人にはとても無理だ。だから、そういう良くしてくれる町の人のお世話にもなりながら、『盗人をやるにしても、町にだけは迷惑をかけない様にしよう』って、みんなで決めたんだ」

決して意図して悪事を働く気は無いのに、そうしなくては生きてはいけない事情があるという、この世の中の不条理、どんなに悪を咎めて裁いても、一向にこの世から悪が消え去らない世の中の不自然な歪みの一端を、明日見は見た気がした。

でも、その反面、どれほどの深刻な生命の危機に見舞われたとしても、決して悪事にだけは手を染めないと言う強い信念が、きっと絶望的に見える前途にも微かな明かりを導いてくれると、頑なに信じたがってもしる明日見だった。

自らも身を護る為とはいえ、時には激しい殺意や憎悪の念も覚えるし、実際に灰人や曾頓、呆六だけは絶対に許さないとも思った。

だからこそ、強い自戒の念をも込めて、そう思わずにはいられないのだ。

幾ら生きる為とはいっても、このままではいけない。

「でも、このままでは決して良い筈ないし、私も協力するから、もう一度だけ、その住職や町役場に掛け合ってみようよ。本当はみんなだって、今までみたいにまた寺院で一緒に暮らしたいって思っているんでしょう？」

「もう一度って言ったって、何をどうすればいいんだ？ それ以前に、俺達にはそんな事に時間を使う余裕は無いんだ。いつ戻れるか分からない寺院と交渉する間、食べていくだけのお金も無い。それに、明日見は慶太って奴を探さないといけないんだろう？ 俺達の事に関わる暇なんて無い筈だ」

「慶太の事は、確かに心配だけど、今焦っても何の情報も無いから身動きが取れない。だから、野平町で奴隷商人に関係する情報を集めながら、寺院と交渉する事だって出来る。それに、お金の件も私に考えがあるから……」

明日見は腕の中ですっかり眠りこけている幼い遥采を抱え上げ、隣の寝室の寝床に寝かせてあげると、取って返して、先程まで一人で甲斐甲斐しく動いていて、ようやく一心地ついた逢蘭に声をかける。

「逢蘭ちゃん。さっき預けた荷物は？」

「土間に……」

逢蘭が指し示した先には、余り火力が強くない程度に火をくべられた竈の前に、程よい大きさの木箱が置かれ、その上に明日見の荷物一式が置かれていた。

明日見はそのうちの油紙に包まれた箱型の包みに手を掛け、再びテーブルに戻った。

「まさか、これがこんな形で役に立つとは思わなかったけど……」

明日見は油紙の包みを解くと、分厚い百圓札の束が出てきた。

基経を始めとした全員が、今までに見た事も無いような札束を目の前に、口を半開きにしたまま呆気に取られていた。

「百圓札が四十五枚あるから、これで基経君達五人と私が当分食べるには困らないでしょ？」

「でも、こんな大金、一体……」

「心配しないで、怪しいお金ではないから。これは、ある人が私に委ねてくれたお金なの。だから、本当は私の一存でこういう使い方をしてはいけないのかも知れない。でも、このお金を委ねてくれた人だって、今の基経君達を放って置けないと思うし、許してくれると思う。それに、基経君は私にとっては恩人になるのだから、こういう形で恩返しをしても良いでしょ？」

「でもさ……」

「だから、単純にこのお金を上げるとかという意味ではなくて、私の恩返しは、基経君達がこれまでと同じ様に寺院で暮らせるように、そのお手伝いをする事。その為にお金が必要なら、当然恩返しの中に含まれるけどね」

明日見がここまで説明して、やっと基経が納得行ったのか、心なしか表情を和らげた様な気がした。

その空気を敏感に感じ取ったのか、今度は三蔵と延尊が少々興奮気味に騒ぎ立てる。

「すげー。明日見すげー金持ちじゃん」

「百圓札が四十五枚もあったら、寺院から追い出されたみんなが一年以上食べ物に困らないよ」

「だから、三蔵も延尊も、明日見がこの金をくれるって言ってる訳じゃないんだからな」

「でもさ、明日見がずっと家にいれば、ずっと食べ物に困らなくていいんだろ？」

「そういう訳には行かないんだ。明日見、やっぱり、こいつらはまだガキだから、どうしてもこうやってはしゃいじゃうんだ。こいつらにとって決していい事じゃないし、明日見の気持ちは嬉しいけど、やっぱりそれは受けられない」

確かに基経の言う事には一理あった。

明日見の見せた予期せぬ大金に心を惑わされて、働かなくても簡単に金が手に入るという錯覚に陥ってしまえば、いずれ本人が苦しむだけだ。

でも、それを言うなら、今基経がやっているように、盗人で生計を立てる事も決して褒められたものではない。

「だったら、私も野平町で慶太や奴隷商人に繋がる情報を得たいし、町周辺の地理に詳しい人が必要だから、基経君を案内に雇うって事ではどう？ たまたま私が知った寺院を追い出された子供達に同情したから、私が彼らに元通りの生活を取り戻してあげたいと思った。だから、あなた達は私の依頼を受けて、寺院の住職や町役場に交渉する手伝いをするの。これだったら、立派に働いて、それに見合う正当な報酬を得る事になるでしょ？」

「そんな事言われたって、結局同じ様なものだ」

明日見とそんなに年齢は変わらない筈なのに、基経君はとてもしっかりしている。

例え未だに少年とはいえ、四人の子供達を抱えているのだから、大人顔負けの責任感をこの弟や妹達に対して感じているのだ。

しかし、そんなに一人で抱え込まなくても良いのに、もう少し肩の力を抜いてもいいのに……と明日見の心境は少々複雑だった。

「そんな事無い。それに、このお金を基経君達の為に使うのが嫌だと言っても、他人のお金や物を盗むのはもっといけない事だよ。決して咎めているのではなくて、最初はやむを得ず盗人をしてたかも知れないけど、いずれ盗人をしてても全く心に咎める様なものになってしまったら、それはとっても悲しい事だから。基経君達にはそうなって欲しくないの」

「でも……」

「その為には、基経君が、もうやりたくも無い盗人から足を洗う事が第一歩。それから、盗人なんて二度としなくてもいい様に、寺院に戻れる様にする事。そちらの方が何倍も大切だよ」

「でもさ、明日見はさっき出会ったばかりの他人なのに、どうしてそこまで俺達の為にしてくれようとするんだ？」

「確かに、私達は今日出会ったばかりの他人かも知れないけど、だったら、なぜ基経君は私を助けてくれたの？ 基経君は私達が他人だと言うけど、基経君達だって元は他人だったと、さっき言っていたでしょう？ でも、今の私からみれば、生まれつきの兄弟そのものに見えるよ。それから、私は、せめて自分が受けただけの恩は、どういう形であっても返したい。それだけ」

*

翌日、午後になってようやく雨が止んだので、明日見は基経を伴って、野平町と問題の寺院の偵察に出かける事にした。

せっかく衣服が乾いたばかりだし、まだ道の所々には水溜りがあったり、滑ったりして居る部分があったので、今日慌てて町に出る緊急性も無かったのだが、基経達の側に『どうしても今日中に町へ出たい事情』があった為、明日見も同行する事に決めたのだ。

昨晚、明日見も基経達の小屋で世話になっていて分かったのだが、基経達の食生活は余りにも質素だった。

もちろん、旅人相手の盗人家業では、いつでも安定した見入りがある訳ではない為、常に生活費を最低限に切り詰めて、いざという時の為の余力を残している事情もあった。

しかし、それにしても、育ち盛りの子供達にとっては可哀想だったし、基経だってあの食事では到底足りている筈が無い。

しかも、一般的には一日三食が常識なのに、基経達は朝夕の二食で済ませていた。

だから、一刻でも早く、もう少しマシな食べ物を食べさせてあげたいとは明日見も思った

し、基経達の小屋には当面の食料の在庫が尽きた為に、今日中に食料を調達しなくてはならない事情もあった。

また、基経らと同じ境遇で寺院を追い出された他の三つの集団に対しても、明日見の予期せぬ申し出を受け入れる代わりに、今後盗人を働かない事、再び寺院に戻れる様に明日見に協力する事など、基経達と明日見の間で合意された取り決めを説明して、彼らをも説き伏せておきたかった。

もちろん、生活の貧しさは他の集団も同じなので、明日見から預かった当面の生活費……一つの集団につき百圓札一枚を、早く渡してやりたいという思いもあった。

百圓あれば、五人が普通に一日三食食べても、二十日間も食い繋ぐ事が出来るのだから、これで当面食料の心配は無くなる……その分、安心して寺院や役所に対する働きかけに全力を投入出来るのだ。

基経の小屋から半刻（約三十分）ほど歩いた町の郊外に、問題の寺院はあった。

明日見は、基経から『瑞巖院』に関する簡単な説明を受けながら、少々緊張した面持ちで寺院の敷地に足を踏み入れた。

本来、寺院は半ば公共的な施設なのだから、誰もが自由に出入りを許される場所である。

本来の役割とされた『死者を安置する墓守の場』としてだけでなく、天界の神々の訓えを庶民に講釈したり、庶民の抱える悩み・相談事への対応、子供達への読み書きを始めとした知識の教授など、元々は様々な役割を地域の寺院が担っていた。

いわば、帝や各州侯、それに従う地方豪族らが、広大な中原を一つの国家に束ねる表の役割を果たしているとするれば、寺院は帝や州侯らの手の及ばない細かな雑務を担う事で、裏方として国を支えている重要な存在でもあった。

尤も、慧（けい）帝の一つ前の蔡（さい）帝の御世には『学制』が発布されて、それからは子供達の教育の任は寺院から国家に移されていたし、現在では庶民の相談事も各町役場に持ち込まれる事が多くなったから、全体として寺院の役割は縮小傾向にあった。

しかし、それでも尚、寺院の地域における役割は重要であり、住職も地域の住民から絶大な信頼を得ているのが常だった。

『瑞巖院』が孤児を引き取って育てる様になったのも、地域の中で低下傾向の寺院の役割に新たな方向性を見出そうとした事と、孤児の増加による治安悪化を未然に防止する為、また、何よりも重要なのは、孤児達自身が出自に関わらず立派に成長して真っ当な人生を歩める様に支援する為だったのだろう。

しかし、一年程前に訪れたという新しい住職は、こともあろうか基経達を寺院から放逐し、かといって未だ世話をし続けている孤児もいるという、なんとも不可解な行動を取っている。

「まるで誰もいないみたいに静まり返っているのだけど……」

明日見は辺りを見回したが、一見何の変哲も無い寺院のように見える……とはいえ、明日見自身が寺院を訪れるのは初めてだったが、それでもパッと見では『明らかに何かがおかしい』という風には見えなかった。

それでも、昨日の季節の変わり目の嵐が去って、一転空は青く澄み渡り、雲も殆ど風で吹き飛ばされて、まだまだ強い日差しが燦々と降り注いでいたのに、寺院の敷地の中には、どこも無く澁んだ冷たい空気が漂っている様な気がした。

それに、よく見ると全体が淡い霧に包まれたように、どことなくぼんやりとぼやけて見える気がする。

全くひと気が無いばかりか、小鳥の囀りや生命の息吹さえ微塵も感じられない。

幾ら寺院が死者を弔う場所とはいえ、ここまで生命の感覚に乏しい場所は初めてだ。

「誰もいない事は無いけど、『瑞巖院』は新しい住職が来てから、町の人々も殆ど近寄らなくなったからひっそりしているんだろ。俺も追い出されて以降も何回か来たけど、その時もこんな感じだった。でも、孤児達のうちの何人かはまだここにいる筈なんだ。何度か見かけたし……」

そういう基経にも確信は無い。

あの無慈悲な住職なら、結局孤児を全員追い出したかも知れないし、基経達が追い出された時の状況を考えれば、追い出されていなくても酷い仕打ちを日々受けている可能性だってありうる。

孤児達のうちに、そういう仕打ちに耐え切れなくなって亡くなる者がいたとしても、何の不思議も無い。

「ねえ、その問題の住職に会って見ようか？」

本堂らしき建物の前で明日見が基経に問いかけると、基経は即座に嫌な顔をして拒否した。

「どうせ、またあの住職は喚き立てて俺達を追い出すに決まってる。無駄な事は止めとけよ」

「でも、このまま指を咥えて傍観している訳にも行かないでしょ？ 私だって、今後の対策を練る為にも、一度その住職に会っておきたいし……」

「だったら、明日見には悪いけど、別の日に一人で出直してくれよ。俺はもう二度とあの住職の顔は見たくないんだ」

「そんな事を言っても、今の住職と和解して、また寺院に置いてもらえる様に交渉しなくてはならないのだから、基経君がその住職を嫌っているのではお話にならないでしょ？」

「そりゃそうだけど……いっそ、あの住職がどこかへ行くか、事故でも起こって死んでくれれば、全てが丸く収まるんだ」

「基経君……幾ら過去に嫌な記憶があっても、そんな、妄りに『死ねばいい』なんていってはいけないよ」

基経は無言だった。

このまま寺院でこのような事を言い合っても埒があかない……明日見は一旦寺院を離れ、後日改めて出直す事にした。

それから明日見と基経は、基経達と同様に寺院を追い出されて、やはり町の郊外に打ち捨てられた古い小屋や、廃材を不器用に繋ぎ合わせて作った、雨露を凌ぐだけという程度の急

ごしえの小屋に住む孤児達の元を回り、明日見が基経らにした提案を受け入れ、再び寺院で暮らす為に働きかける明日見の行動に協力する様呼びかけた。

孤児達は一様に、明日見から与えられた予期せぬ臨時収入に喜びの色を隠さなかったが、再び寺院で暮らす為に働きかけるという明日見の提案には難色を示した。

基経ばかりでなく、孤児達みんなが多かれ少なかれ、今の住職に対する怒りや恨みといった余り良くない感情を抱えているのだ。

誰もが『また寺院には戻りたいけど、あの住職と一緒になんて嫌だ』といった。

特に年嵩の子ほど拒否反応が強く、そういう子が各集団のまとめ役になっているのだから、交渉で問題を解決するのは益々難しくなりそうだ。

住職ばかりでなく、子供達も説得しなくてはならないのだから。

結局、この日はどの集団からも最終的な協力は取り付けられずに、明日もう一度各集団の代表者と明日見が基経の小屋で再協議する事だけを決めて、一旦話を打ち切った。

ただ、どの集団も明日見からの資金提供を受ける代わりに『もう盗人はしない』と確約してくれた事だけが、唯一の救いとなった。

最初から事が上手く運ぶ筈はないとは覚悟していたものの、孤児達から予想外の反発を受けた明日見は、少々落ち込んでしまった。

「明日見、そんなに落ち込むなよ。あいつらだって、本当は寺院に戻りたいし、その方がいいって事は分かってるんだ。でも、いきなりあんな突拍子も無い話をされても、みんな最初は戸惑うもんだ。実際に俺だって『なんで明日見はそこまでしてくれるんだ？』って、今でも疑問に思う。でも、明日見が本気だって言うのは分かるから、俺も明日見の話に乗る気になったんだ。きっと明日には、みんなもその事はわかってくれる」

基経は明日見を慰めたが、その基経自身も住職と和解する気など微塵も無いのだ。

明日見は無言のまま、この先どうやって住職と孤児達を和解に導くのか、その方法にあれこれと頭を抱えつつ、野平町の中心街に入った。

一見する限りでは、町並みは東辺町とよく似ている様に見える。

町の中央を十字に交差する通りがあって、一本が東辺町から晶都へ向かって続く街道である東方形路、それに交差するのが、北の過都に向かって伸びる旧過州街道である。

東方形路は、晶都を過ぎると更に帝の直轄領である極州にまで繋がっている。

どちらの街道も石畳で整備され、荷車の通行を容易にするよう配慮されていた。

やはり、街道の両側には犇めく様に様々な店舗が立ち並び、人出も多かった。

殆どの建物が平屋建ての木造家屋だったが、この町の治安部隊詰所も東辺町と同様に石積みの二階建ての建物で、一棟だけ趣きの異なる威容を誇っていて、とても目立った。

町全体としてみれば、野平町の方が東辺町よりも倍くらいの規模がありそうだった。

明日見は基経の買い物に付き添って荷物持ちをしながら、基経が町の主な地点を回りながらしてくれる説明に耳を傾けていた。

「この通りは色々な店が並んでいる。俺も東辺町には行った事ないけど、野平町の方が大きい筈だから、こっちの方が人が多いだろ？」

「そうだね。でも、基本的な町の作りは似ているみたい」

「ふーん。同じ過州の町だからかな？」

「ところで、この町で色々な情報を得るとしたら、どこへ行けばいい？」

「そうだなあ。町での生活に必要な情報なら町役場だけど、治安部隊に聞けば『どこで無法者達が暴れている』なんて情報を教えてくれる。後は、ちょっとヤバイ情報なんかは、歓楽街の酒場辺りに『情報屋』って言うのがいて、金で情報を売っているらしいな。以前小耳に挟んだ話だけど……」

「ふうん。『情報屋』って言う人がいるんだ……」

「うん。俺も良く知らないけど、色々詳しくらしい。でも、歓楽街は余り行かない方が良さと思うけどな」

「どうして？」

「あそこは無法者達がしょっちゅう出入りしているし、明日見みたいないい女が出入りしたら、すぐに無法者達の餌食になるだろ」

「無法者、ね……」

明日見の頭には、あの灰人達の顔が浮かぶ。

あの灰人達の事だから、もしかしたらまだ執拗に私を探しているのだろうか？

それとも、今頃はすんなりと諦めて、この町を去ってくれたのだろうか？

「そういえば、明日見もなんとかいうならず者に攫われて来たんだったな。歓楽街なんかに行ったら、もう一度そう言う目に合うかもしれないだろ？」

「あの時は……灰人の卑劣な手管に嵌められただけ。こう見えても武闘術を嗜むんだから、口先だけの無法者風情にやられる気はしないし」

「へえ。明日見って、武術なんかやってるんだ。その辺の女とはちょっと違うなって気はしてたけど。でも、その武術も灰人って奴らには効かなかったんだろ？」

「だから、あの時は武術を使う前に、灰人に騙されたの！」

思わずムキに反発する明日見を、基経が面白がって笑っている。

「そんなムキになるなって。ますます怪しいなあ」

「だから、あの時はほんとに……」

明日見は荒げた声を途中で飲み込み、ふと視界に入った基経の肩越しにチラッとすり抜けた、見覚えのある人影に気を取られた。

呆六だ……他にも見覚えのある顔が二つ……名前はわからない。

「基経君、奴らがいる。多分私を捜しているんだ……見つかると厄介だから、逃げよう？」

「だって、今、武術を使えば無法者なんか目じゃないって……」

「この食料をムダにしてもいいの？ それに町中で大立ち回りする訳にはいかないし、基経君だっているんだから、危険でしょ？」

「バカ言うなよ。俺だって、あんな連中にはそう簡単に捕まらないって」

「いいから、ここは逃げるの。さっさと抜け道を案内しなさい！」

「わかったよ……」

実は、武術の心得があると言う明日見の大立ち回りに密かに期待した基経が、不承不承明日見の言葉に従って脇道に逃れようとした時、呆六達にずっと注がれていた明日見の視線と、奴らの視線が噛み合った。

——見つかった。

基経の後を追って脇道に入った明日見は、小走りで前に行く基経に声をかける。

「基経君、奴らに気付かれたから、急いで」

「わかった」

基経は大きな紙袋を両手で抱えたまま、細く薄暗い裏通りをジグザグに走り抜けていく。

明日見の目には、どの脇道も同じ様な脇道に見えて、既にどこをどう走っているのかもよく分からなくなっていた。

「明日見、こっちだ」

基経の声に導かれて、明日見はとある薄汚い建物の、扉も付いていない入り口の影に潜った。

それから程なく、呆六を含めた三人の喚く声と、バタバタと地面をたたき付ける足音が響き、そのままいずこかへと通り過ぎていく。

そのまま三人の気配が完全に消えてしまうのを、闇の中で息を潜めていた明日見の肩を基経が叩く。

「明日見、こっちいくぞ」

「反対側に抜けられるの？」

「まあな。多分俺だけの専用通路だ」

基経に続いて、闇に覆われた狭い通路を抜けると、薄暗い店内に出る。

——ここは？

店内には所狭しと様々な雑貨類が陳列され、所々には箱が床から積み重ねられている。

「ここは、俺達がよく世話になっている質屋だ。旅人からくすねた物は、ここで売って金に換えて貰ってるのさ」

「よう。今日は女連れで来たのか？ このマセ餓鬼が、随分持ってきたな」

店内で商品棚の整理をしていた男が、明日見達の来訪に気づいて近寄ってきた。

明日見と基経が抱えていた紙袋を、売る為に持ち込んだ品物と勘違いしているようだ。

「マセ餓鬼って、そんなんじゃないよ。それに、これは俺達の食い物だ」

「だったら、今日は何持って来たんだ？ まさかその女なんて冗句は無しにしようぜ」

「だから違うって。ちょっと追われてたから、隠れさしてもらっただけだ」

「何だ。また治安部隊に追われてたのか？ いい加減、ここでやり過ごすのだけは勘弁しろよ。俺まで疑われて店やっていけなくなるだろ？」

「治安部隊じゃねーよ。人攫いの無法者に追われてたんだ。それに、追われてるのは俺じゃなくてこいつなんだから、あんまり人聞きの悪い事言うなよ」

「へえ。この綺麗なねーちゃんが追われてるのか。まあ、このねーちゃんなら、俺が攫ってっても良いくらいだけだな」

「そうか？ こいつは、武術の達人らしいから、本気でそんな事考えてるんなら、充分気をつけた方がいいぞ」

そのまま基経が店の入り口に出て、一旦周囲を見回して、先程の三人らしき人物や、人を探している風の人影が無いのを確認した上で、明日見を手招きする。

「じゃあな。これからは当分来ないだろうけど、そのうちまた暇潰しに来てやるよ」

「売りも買いもしないんだったら来るな。邪魔だから」

客商売にしては失礼な質屋の言葉に見送られて、明日見達は質屋を後にした。

それにしても、どうもどこの質屋も一癖も二癖もある様な店主で、どうも自分とは肌合いが合わないらしい……東辺町の質屋を思い出しながら、明日見はふと思った。

「基経君。質屋って、どこもあんな感じなのかな？」

「どこもかどうかは知らないけど、この町の質屋はあんな感じだな。まあ、口は悪いかも知れないけど、俺達が盗品を売ってるってのを知ってて、それでも俺達の立場を理解してちゃんと買い取ってくれるから、実は凄く助かってる。あの程度は挨拶みたいなものだしな」

「ふうん。そうなんだ」

やっぱり、この町の質屋も元探検士で、基本的に探検士とは合わないのかしら……そんな具にもつかない考えが、ふと明日見の頭をもたげる。

「明日見、一応念の為に、今日は裏道から帰るから、ちゃんとして来いよ」

「わかった」

基経は再び薄暗い脇道に紛れると、明日見も基経を見失わない様にと、周囲に気を配りつつ小走りで後を追った。

＊

その日の夕食は、明日見にとっても、基経達にとっても久しぶりに豪華で食べ甲斐のある食事となった。

明日見にとっては、東辺町の代峰老師の小屋で、あの事件が起こる前に食べた昼食以来だったし、基経達は寺院を追い出されて以降、満足に腹を膨らませた記憶など無かった。

豪華とはいっても、それは彼らの置かれた現状から見れば豪華という程度であって、一般的に見れば、その程度の食事量は普通だった。

基経達は基本的に日常生活における役割分担が浸透していて、誰か一人に過大な負担がかからない様に配慮されていた。

もちろん、幼い子がこなせる役割には限度があった為、どうしても年上の基経や逢蘭に負担がかかり気味の傾向はあるのだが。

それでも、夕食作りには全員が何らかの役割を与えられて携わり、もちろん明日見も久々に不似の山の『天元堂』仕込みの料理の腕を振るった。

尤も、明日見はどちらかといえば料理よりは武闘術を好む気質なのだが、それでも自分の作った料理が喜ばれるのは悪い気はしなかった。

食材を大量に仕入れてきた為もあったのだろうが、温め直せば明朝の食事にも足りそうなくらい残してしまい、それはそれで翌朝の食事の手間が減って喜ばしい事でもあった。

明日見達は食事の間も、そして食事が終わってから延々と他愛の無い会話を交わして時を過ごした。

ふとした話の流れから、明日見がこれまでに読んで来た帝記や異聞録にある、歴史上の英雄達の記録について話し始めると、基経や三蔵、延尊がかなり興味を覚えたらしく、一つ話し終わるとそれぞれが興奮気味に感想を述べ、もっともっとと迫るのだった。

一方、一番年下の遥采はすっかり明日見に懐いてしまい、何か自分の役割をあてがわれていない時は、常に明日見に付きまとうようになっていた。

明日見も遥采らの境遇を知っていたし、懐かれる事自体はそれなりに気分も良かったから、自分の手が空いている時には出来るだけ抱きかかえて上げていた。

だから、基経達に英雄の物語を話している時にも常に明日見の腕の中に入れて、いつの間にか眠っているといった感じだった。

その中であって、年上の逢蘭は、基本的には無口で大人しく、明日見達が騒がしく他愛も無い雑談の花を咲かせている間も、逢蘭は殆ど会話にも加わずに聞き役に徹していた。

明日見は雑談の主役に祭り上げられていたが、何となく孤立してしまった感のある逢蘭の様子が気に掛かった。

一見、深夜まで延々と続くかに思われた雑談も、相手が子供達という事もあって、また、日々の生活に忙しくて夜更かしする程の体力の持たない子供達は、三々五々眠気を訴えて、程なくささやかな雑談の宴は解散となった。

元々基経達五人に対して寝台は四つしかなく、大抵は幼い子二人と一緒に寝るか、逢蘭が遥采と寝るかしていたのだが、明日見が増えた事で更に窮屈になってしまった。

しかも、幼い延尊と遥采が明日見と一緒に寝たがったので、一日おきに交代で明日見と一緒に寝るという決め事まで作られてしまった。

そして、今日は延尊の順番だ。

「本当にこの子達のお母さんになったみたい……」

明日見にとっては複雑な心境のまま、でも懐かれること自体は気分も良かったから、できる限り彼らの希望に添える様に努めていた。

こう見えても、明日見自身が男女の別に敏感な思春期の真っ只中にあり、またこれまでにまともな恋愛の経験にも恵まれなかった為、例えば子供とはいえ、男の子との余りに親密な触れ合いには抵抗があった。

基経だと完全に男を意識させたし、三蔵でもかなり微妙だが、遥采とそれほど年も変わらない延尊だったら、まだしも子供として割り切れたのがせめてもの救いだった。

それにしても、遥采にしても延尊にしても、少々きついくらいに明日見にしがみ付いてくる。

基経は『母親を思い出している』といったが、こんなに小さな子供なのだから、余程母親が恋しいのだろう。

そして、年上でも精々お姉さんとししか見られない逢蘭に対してはぶつけられなかった、母親に対する様々な思いを、ようやくぶつけられる相手が現れたのだ。

もちろん、明日見も遥采らの母親役をこなすには若すぎる年齢ではあったが、それでも基経よりも年上であり、また、逢蘭と比べれば遥かに大人の女を意識させる体つきが、幼い子供たちにとっては母親の姿を重ね合わせる絶好の対象に見せていた。

明日見は寝台に横になって、きつくしがみ付いてくる延尊の背中に腕を回して、背中に優しく手を当ててやっていると、いつしか延尊が寝息を立てている。

延尊だけでなく、明日見以外の全員がそろそろ深い眠りに入ったかという頃、歓迎されざる訪問者の到来を明日見は感じ取って、強引に眠気を払いのけた。

「お前もいい加減、私に付きまとうのをやめたらどうだ？」

明日見が小さく、しかし鋭く言い放つと、ちょうど寝台に横になった明日見の視線の正面に、あの物の怪の見慣れた姿が浮かび上がった。

「そうつれない事を言うでない。お年寄り気遣うものと、おぬしは教わらなかったのか？」

「ふん。お前は、お年寄りではなくて物の怪ではないのか？ 幾ら年寄りの格好を真似ようが、物の怪である事に変わりはあるまい。それに、物の怪の縄張りである迷いの森からはとうに離れてしまったのだ。さっさと私に付きまとうのを止めて、自分の縄なりに戻ったらどうだ」

「本当におぬしはわしには冷たいのう。それに加えてまだまだ無知であるにも拘らず、勝手な思い込みで全てを判断するという愚かしさも備えておる。以前もわしは物の怪ではないというたであろうが……」

さて、果たして物の怪は以前その様な事を言っただろうか……明日見が記憶を辿るのを無視して、物の怪は言葉を継ぐ。

「それにしても、わしにはこんなにつれない癖に、この童どもに懐かれて気を良くして母親ゴッコに興じているのじゃから、おぬしの酔狂さも相当のものよのう」

「お前の粘着とこの子達を一緒にするな。この子達はこんなに幼いのに、孤児だから母親が恋しくて……」

「それが愚かだというのじゃよ。そうやっておぬしは童を懐かせて、ずっとここに留まって童の世話をしてくつもりのかのう。そうではあるまい。であれば、変に懐かせて別れを辛くさせるのは、童どもにとっても残酷な仕打ちとは思わぬか？」

「それは……」

「まあ、その様な事はわしにはどうしてもよいがの。それはさておき、おぬしはこの様な所で呑気に童の世話などにうつつを抜かしておるゆとりはないと思うのじゃが、あの慶太とか言う童の救出は諦めたのかのう」

「諦めるなんて、そんな事がある筈が無い。ただ、今は慶太の消息の手掛かりが奴隷商人しかなくて、奴隷商人の事情に関する情報も無いから動きが取れないだけだ」

「果たして本当にそうかのう。それならば、この童どもの為に、また寺院で暮らせる様に尽

力するというのはどうなのじゃ？」

「それは、こんな子供達が盗人で生計を立てるなんていけない事だし、せめてもう少しマシな暮らしが出来る様に協力したいだけだ。第一、私が灰人達の手を逃れたのだって、そこにいる基経君のお陰なんだから、恩返しをしてはいけないのか？」

「それで、まだあのならず者が徘徊する町に留まって、せっかく逃れたならず者の手に再びかかる愚を犯すというのでは、全く進歩が無いではないか。わしにとっても、おぬしがならず者の手にかかるよりは、早く首都に行ってもらいたいものだのう。ほれ、あの小屋を焼かれた爺も申していたではないか。『首都へ行け』と……」

物の怪の言葉に、明日見はふと東辺町に置き去りにしてきた、火事で小屋を焼かれて重症の代峰老師の容態が気にかかり、また、代峰老師の世話を委ねてきた精三さんにも思いを馳せていた。

老師はちゃんとお医者様の治療を受けているだろうか。

精三さんは老師の世話をちゃんとしてくれているだろうか。

明日見が意図せず東辺町を離れてから、まだたった二日しか経ってないのに、もう何十日も経った様な錯覚に襲われる。

全てが遠い過去の記憶になってしまったように……。

「確かに、老師は私に『慶太を連れて首都へ行け』といった。でも、慶太を探すのが先だし、首都へ行くよりは東辺町の老師の元に、慶太を無事に連れて帰る方が先だ。それから、老師がなぜ私と慶太に『首都へ行け』というのか、その理由を聞いてからでも遅くは無い。第一、お前が首都へ行きたかろうが、それは私には関係ないのだから、さっさと一人で行けばよいだろう」

「その様な冷たい事を言うでない。わしとおぬしの仲ではないか。今だって、子どもがいるにも拘らずこうして現れたのは、おぬしの顔を一日に一边は拝みたいからなのじゃかな」

「お前とその様な仲になった覚えは無い。勝手な言いがかりも対外にしたらどうだ」

「ほれほれ。そういうおぬしの様な女子の事を、世間では『ツンデレ』というそうじゃぞ？」

「そんな言葉、聞いた事も無い。その様な訳の分からぬ世迷言を並べ立てるくらいなら、さっさと姿を晦まして私を寝かせてくれたらどうだ。そうすれば、少しは私もお前に好感が持てるかも知れないぞ」

明日見も物の怪の下らない戯言にいい加減焦れてきて、そろそろ話を打ち切って眠りたくなってきた。

「そうか？ そういうならば、わしもそろそろ引き上げようかのう……」

「そのまま二度と私の前に姿を見せなくなったら、かなり好きになれるかも知れないな」

「それでは、わしの楽しみも半減してしまうではないか。おぬしはいつからその様に意地の悪い女子になったのじゃ？」

「お前のような胡散臭い物の怪風情に付きまといわれるのは、いい加減にして貰いたいという事だ」

「余りに酷い言い様だのう」

言葉だけはかなり深刻な衝撃を受けたように聞こえるが、話し方や表情はどこか嘲るような、にやけた様な雰囲気のまま、言葉には全く感情がこもっていない。

ここまで言葉と雰囲気が余りに食い違っていると、返ってバカにされた様な気分になるものだ。

「……まあよい。『ツンデレ』というものは、好きな相手の気を引きたいが為に、ワザと意地悪く振舞うらしいからの。わしもそう善意に解釈して、取っておきの情報をおぬしに教えてやろう」

「だから、私は『ツンデレ』などという如何わしい者ではない」

「まあ、わしがおぬしの事をどう思おうと勝手ではないか。ホルホル。での、おぬしがこの子どもを戻してやろうとしている寺院なのじゃが、そこの住職というのがまた、なかなかの曲者での」

もういい加減にして欲しい……そう思っていた明日見の頭を叩き起こしたその言葉に、明日見は今日物の怪が訪れてから始めて真剣な顔つきになった。

「お前は、『瑞巖院』の住職の事が何かわかるというの？」

「おお、そんなに真剣に見つめられると、わしもちと照れてしまうのう。それぞれ、その顔が見たかったのじゃよ。ホルホル」

明日見は、何を言おうが冗談めかしている、物の怪の下らない戯言は無視して、物の怪の言う『瑞巖院』の住職に関する情報に全神経を集中した。

「での、わしにも色々事情があるので、詳しくは言えぬが、住職の動向をしばらく注視しておれば、おぬしの考える『恩返し』とやらに繋がるネタが出てくるやも知れぬ。事が上手く運べば、その後に繋がる様々な事も分かってくるやも知れぬ。とにかく、住職を徹底的に監視し続ける事じゃ。もちろん、住職に気付かれぬように、最大限の配慮を忘れてはならぬ。住職に気付かれては、元も子もないのじゃからのう」

「それだけか？」

「これでは不足か？」

「当然だ。元々、私も寺院の動向は見張るつもりでいたのだから、それでは何の意味も無い」

「そこまで言われては心外だのう。せっかく、わしの出来る限りで最大限の情報を、他ならぬおぬしだからこそ教えてやったというに。それでは、わしも挫けて落ち込んでしまうのう」

「ふん。お前がそのような殊勝な神経の持ち主ならば、私だってもう少しお前の言に信用もするが、お前は生まれつきのペテン師ではないか」

「まあ、おぬしにすればこれでも不満なのじゃろうが、住職を見張っていれば、そのうちに良いネタが掴めるとい見通しが立ただけでも良いではないか」

「元々、お前の言葉に耳を傾ける気など無かったのだから、それが根も葉もない嘘であったとしても、衝撃も受けないし落胆もしない。ただ、もしお前のいう様に住職が何らかの秘密を抱えていて、相手に気取られない様に見張る事でその尻尾を掴む事が出来たら、その時はお前にも感謝の言葉くらいは言ってやっても良い。それが私の信条だからな」

「おお、そうかそうか。ホルホル。それでは、今からその時を愉しみに待つとするかの。そのまま早々にこの片田舎を離れて、首都にでも行ってもらいたいものじゃ」

「だから、今首都へ行く気はないと何度言えば……」

「まあよい。今宵はわしも心地よく眠れそうじゃ。ではな」

物の怪はそう言葉を残すと、再び寢室の闇に紛れるように、音も無く消え失せた。

「寝るって……夜間は物の怪の活動時間ではないのだろうか……」

明日見の脳裏にはそんな些細な疑問も沸いたが、物の怪が言うほどではないにしても、確かに『住職が何らかの秘密を抱えているらしい』という情報は、明日見にとっても今後の見通しの目安とはなった。

情報の確度の問題はあるのだが。

明日は、孤児達の集団の代表者にこの家に集まってもらって、もう一度説得しなければならないのだから、孤児達を説得させる材料としても使えるだろう……明日見はこれまで余り明確になっていなかった、『もう一度孤児達が寺院で暮らせるようにする』為の手段を、住職の動向監視によって、住職に隠された秘密を暴く方向で固め始めていた。

住職の弱みを握れば、交渉に持ち込むにしても有利な交渉材料として使えるのだから。

＊

その日は、朝から基経の小屋に、かつて寺院を追い出された孤児達の代表者が一同に会していた。

基経はこの会合の司会役を引き受け、逢蘭は代表者達にお茶を出したりと、何かと雑用をこなしていた。

三蔵と延尊の二人は、会合の間は外に出ている様に言いつけられていた。

そして、遥采は相変わらず明日見の腕の中にいた。

「一応昨日も会っているけど、明日見にもう一度各代表者を紹介しておく。俺の隣から、経巧（けいこう）と、天鵬（てんぽう）と、日向（ひなた）だ。で、お前達にももう一度紹介しておくが、こいつが、今回の提案を申し出てくれた明日見だ。大まかな話は昨日したけれども、もう少し細かい部分について、まず明日見から話してもらおう。その後で、意見や質問のある奴にはしてもらった上で、最終的な結論を出そう。まず、明日見。頼む」

「では、昨日も簡単に説明しましたが、今日は私が基経君と出会った経緯からお話します」

明日見は、先日基経にも話して聞かせた、明日見が野平町に来る事になった経緯から、基経の小屋に身を寄せる事になってからの体験について、大まかに思う所を語った。

代表者の三人は、既に大まかな話は予め聞いていた事もあって、終始無言で明日見の言葉に耳を傾けていた。

「……という訳で、基経君に助けてもらった恩を返したいという事と、あなた達が生活の為とはいえ盗人に身をやつすのは良くないという事です。そこで、あなた達が盗人をせずに安心して暮らせるようにするには、やはり以前のように寺院に戻るのが一番良いと思うからです」

「俺達もそれはわかるんだけど、やっぱり、あの住職と一緒に暮らすという選択肢はありえない。俺達が今までに受けてきた仕打ちを考えれば、どうやったって信頼関係を回復するのは無理だ」

「えっと、あなたは天鵬さんでしたね。それは昨日も聞きましたし、あなた達と話をした後、ずっとその部分を考えていました。私もあなた達の話聞いて、実際に寺院にも足を踏み入れて見ると、やはりその住職はちょっとおかしいと思います。それで、最初は住職と町役場にいきなり交渉を持ちかけようと思っていたのだけれど、ちょっと方針を変更して、しばらくの間は住職の様子を逐一監視する必要があると考えました」

「その監視というのは？」

「ええ、これはまだ基経君にも話してはいなかったのですが、毎日住職の様子を見張って、逐一記録をとっておく事が一つ。もう一つは、野平町の住民に対する徹底的な情報収集です。町の人々が住職と接した時にどのような事が起きたか、何を話したか……などです。それによって、住職の大まかな行動の型が見えてきますから、そうやって集めた情報から、住職にとって都合の悪い情報を抽出します」

「そうか！ 住職に都合の悪い情報が見つければ、交渉を進めるにしてもこちらが優位に立てるし、上手くいけば住職を寺院から追い出せるかも知れない。そうなれば、住職は変わらざるを得ないから、俺達も余程戻りやすくなるな」

「えっと、経巧さんでしたね。その通りです。ですから、そういう展開に持っていく為にも、出来る限り多くの住職に関する情報を集めなくてはなりません。それも住職に気付かれないうちにです。住職に気付かれれば、当然警戒するでしょうから、そういった住職に都合の悪い情報は出にくくなるでしょう。ですから、住職には気取られないように監視して、決定的瞬間を抑える必要があるのです。それに、余り時間をかけ過ぎても住職に気付かれる危険性は高まりますから、出来る限り迅速に進めなくてはなりません」

「あの、明日見さんは、この計画を進める具体的な手順を、もう考えているのですか？」

「日向さんですね。一応ある程度の腹案はあります。もちろん、実際に行なうのはあなた達になるのですから、同意していただければもう一度考え直すしかないのでありますが……」

「でも、明日見さんも協力していただけると、昨日話していましたよね？」

「それについては、基経君の意向を考慮して、若干変更しようと思います。もちろん、私も出来る限りの協力は惜しまないのですが、あなた達がより前面に出て、自分自身の力で成し遂げた方がよいと考えたからです。ですから、当面の情報収集活動は、あなた達が役割を分担して対応していただく方がよいのではないのでしょうか。あなた達は、文字は普通に書けますよね？」

「まあ、寺院にいた頃は初等学校にも通っていた訳だし……」

「それならば、問題はありません。住職の監視活動と、町の住民からの情報収集についても、全て紙に書いて記録して下さい。どのような細かい事でも、例えば『住職が一旦建物から出たけどすぐに戻った』といった様な事もです。本当は、基本的には寺院の監視を二人組で受け持ってもらって、住職が寺院から離れる時に追跡する人と、そのまま寺院を監視する人がい

てくれた方がいいのですが、その辺はあなた達に任せます」

「わかった、それは俺達が後で決めればいいんだな」

「そうです。細かい部分は全てお任せしますから、その辺は基経君お願い」

「ああ」

「それから、現在も寺院に残る孤児達との接触は慎重にお願いします。寺院の内部事情を知るには、寺院にいる人物に聞くのが一番という事は言うまでもありませんが、その人物が私達の行動を住職に話してしまう危険性がある事も考慮して下さい。例えばあなた達が『この人は信用できる』と思っても、住職だってその子を手懐ける為に、色々と策を巡らせているかも知れません。全員が追放されたのではなくて、『何らかの理由で、一部は尚寺院に留まっている』のです。その理由がわかるまでは、内部の人間との接触は控えて下さい」

「それは、もし住職が何か悪事に手を染めていたとしたら、その片棒を担いで協力しているかもしれないという事？」

「そうです、経巧さん。もしくは、協力はしていないにしても、残された孤児達は住職にとって必要だったのかも知れません。私は基経君から最初にこの話を聞いた時から、『なぜ一部の孤児だけが寺院に留まられているのか』が、とても気になっていました。町役場から補助金を受けているから……というだけの理由では説明し切れない裏があるように思います」

「もしかしたら、そこに住職の隠している秘密の鍵があるかもしれませんね」

「ええ、そうですね。日向さんがいう様に、この部分は住職の秘密を暴く重要な鍵になるかも知れません。ですから、くれぐれも内部の人間との接触は慎重にお願いします。それから、町の住民からの情報収集ですが、誰からでもただ聞いていけば良いというのではなくて、人を選んで聞くようにして下さい。もし、私達が住職に近い人間から不用意に住職の情報を聞き出して、その人物が住職に『私達が住職の身辺を探り始めた』と漏らしたら、住職は当然警戒を強めるでしょう。ですから、まずあなた達が信用出来る人物とか、住職に対して反感を持っていそうな人物から、聞き取りを開始しましょう。その時に、住職本人の情報だけではなくて、交友関係も分かる範囲で聞き出して下さい」

「交友関係を聞き出せば、俺達にとって敵か味方かわかるって事？」

「そうです、天鵬さん。敵味方という表現は正しくないかも知れませんが、住職に近い人物を選別して、その人物との接触は特に用心するという事です。もちろん、そういう人物だからこそ得られる貴重な情報もあるでしょうが、何よりもまず『住職に気付かれずに、住職に関する情報を集める』のが目的ですから、余り危険な冒険は避けて下さい。もし、どうしても危険な賭けが必要になった場合には、こうしてまたあなた達代表者に集まってもらって、扱いを協議しましょう」

明日見は、大体の話は終わったとばかりに基経に目配せし、その後を基経が引き継ぐ。

「明日見の話は大体終わりみたいだけど、なんか聞きたい事とか、言いたい事はあるか？……といっても、明日見が話してる最中にも聞いてたけどな」

「明日見は、その何とかって言うガキを捜さなくてはいけないんだろう？ だったら、い

つまでここにいられるんだ？」

「それについては、私も今のところはっきりした情報を掴んでいないので、身動きが取れないというのが正直なところですよ。ですから、私は私でそちらの情報収集に動く事になるでしょう。もちろん、その間にも私に出来る事には協力を惜しみませんし、それとなく住職についても探ってみますけど。いつまでいられるのかは、集めた情報次第となりますが、出来る限り留まれる様にはしたいと思います。これで回答になっていますか、天鵬さん？」

「と言う事は、住職にこちらの動きを知られないようにって言うだけでなく、明日見さんの都合もあるから、出来るだけ早く決着したいという事ね」

「俺も日向の言う通りだと思う。いずれにしても、元々は俺達の問題だ。明日見にばかり頼る訳にもいかないな。それに、基経のところもそうだけど、俺達のところのチビ達にも、早くもう少しまとめた暮らしをさせてやりたいからな」

「だな。俺も経巧の言う事に賛成だ。俺達自身もだけど、チビ達を何とかしてやらないとな。他には何かあるか？」

「今からこんな事言うのもどうかと思うけど、もし失敗したらどうする？ 余り考えたくは無いけど、そういう事も一応考えておかないとな」

「確かに、経巧の言う通りだな。失敗したからまた元に戻りますでは、俺達もちょっとやりきれない。まだ明日見がいるうちに、その辺まで考えておく必要はありそうだ。誰か、意見のある奴は？」

「……私は、そんな後の事よりも、まず目の前の問題解決に全力を尽くすべきだと思う。住職の情報収集をするのだって、結構手間もかかるし神経も使う作業でしょう？ それなのに、今のうちから失敗した後の事まで考えるなんて、ちょっと違うと思う」

「まあ、日向の言う事にも一理あるけどな。でも、明日見が当面の資金援助を申し出てくれたのだから、俺達が盗人で生計を立てるのは良くないと思ったからだ。もし仮に失敗して、明日見もそのまま去る事になったら、また盗人に戻りますでは、明日見が資金を援助してくれている意味も無になる。だから、失敗した時の事も考えて置く必要はあると思う」

「基経の言う事はあってるんだろうけどさ、俺は日向の言う方が納得出来るな。何をやるにしたって、失敗を恐れていたら何にも出来ないだろ？」

「失敗を恐れるって訳ではないけどな。まあいい。この件は俺と経巧が『失敗後のことも考えるべき』で、日向と天鵬が『そんな事は後回し』という意見だ。今すぐ決めなくてもとりあえず支障はないが、また近々時間を作って話し合うって事でいいか？」

基経の意見に一同が頷いた。

「他に意見が無ければ、そろそろ決を採りたいんだが、まだ何かいい足りない奴はいるか？」

基経はしばらく間を置いたが、特に誰も声を上げる気配は無い。

「わかった。では、これから決を採る。念の為に予め言うておくが、この決定がたとえ自分の意に添わなくても、決定には従ってもらうからな。それでは、明日見の申し出に賛同して、再び寺院に戻る為に全力を尽くすという意見に賛成する者は手をあげてくれ」

基経の声に、全員が少々戸惑いながらも賛成の意を示した。

やはり、住職に対して元々良いイメージを持っていなかった孤児達には、住職に都合の悪い情報が入手できれば、寺院から住職を追い出した上で再び寺院に戻れるかも知れないという明日見の指摘が大きかった。

孤児達の誰もが今の生活を良く思っている筈が無いし、もう一度寺院に戻れるものなら戻りたいのだ。

しかし、今の住職との確執が、孤児達を寺院から遠ざけていた。

また、日々を無事に生き延びるのが精一杯で、再び寺院に戻る活動をする時間も取れなかった。

だからこそ、明日見が突然目の前に現れて、基経にした予期せぬ申し出は、以前の生活を懐かしみつつも諦めていた孤児達にとっては、天界の神々の救いにも似た千載一遇の好機だった。

この好機さえ物にできれば、あの嫌な住職を追い出して、再び寺院でみんなと暮らせる…そんな未来への明るい希望が、孤児達の心の奥に微かな灯りを点したのだ。

明日見は、基経達が住職からどのような仕打ちを受けたのか、詳しい所までは聞いていない。しかし、孤児達の反応を見る限り、相当酷い目にあったのだろうと想像はつく。

そうであれば、現在も寺院に留まっている孤児達だって、酷い仕打ちを受けていないという保証は無い。

今の明日見にとっては、何よりも慶太の行方を掴む事と、その為の手掛かりとなる奴隷商人に関する情報収集が最優先だったが、寺院に取り残された孤児達の安否も気遣われた為、住職に関する情報収集もすべて基経達に任せては置けなかった。

そのまま会合は引き続いて、まず手始めに明日見は慶太と奴隷商人の情報収集を主に当たる為、基経達とは行動はともにせず、その時々事情によって支援する事の合意がされた。

孤児達は既にやる気を露わにしていたし、むしろ『明日見には他にもやるべき事があるのに、資金提供以上の事をしてもらっては申し訳ない』という空気が出来上がりつつあった。

さすがに、当面の生活費は明日見に支援してもらおう以外に当ては無かったが、それを除けば孤児達自身でも出来る事ばかりだったのだから。

「大枠については決まった事だし、私は席を外してもいい？」

明日見の申し出も快く受け入れられた。

明日見は、これまでずっと腕の中にいた遥采を一旦床に下ろし、改めて遥采の可愛い手を握ると、そのまま丸太小屋の外に出た。

丸太小屋の真ん前では、三蔵と延尊が無邪気な声を上げて遊んでいたが、明日見と遥采の姿を認めると慌てて駆け寄ってきた。

「ねえ、話し合いはどうなったの？」

「大丈夫だよ。みんな私の話に賛成してくれて、また寺院に戻る為に頑張るって言っているから」

「やった！ またみんなと一緒に暮らせるんだね」

「やったやった！」

「でも、まだそうと決まった訳ではないし、もうしばらくの間は我慢しないといけない事もあると思うけど、一緒に頑張ろう」

「うん。兄ちゃん達だって頑張ってくれるんだから、俺も頑張るよ。な、延尊？」

「うん。俺も頑張る。だから、明日見も遥采にしてるように、俺の事も抱っこしてくれよ」

「ダメ。明日見お姉ちゃんは遥采を抱っこしてくれるの」

「お前ばっかずるいだろ」

「ダメなの……」

「延尊、お前男なのに抱っこして欲しいなんて、みっともないよ」

「うるさい。幾ら三蔵兄ちゃんだって、俺の事みっともないなんていうな」

「いてて。叩かなくてもいいだろ」

「うるさーい」

そう言って再び走り出す三蔵と延尊の姿を見ながら、明日見は改めて。彼らを再び寺院に戻して上げられるように、出来る限りの事はしなくてはならないと密かに誓った。

この子達が現在のような生活を強いられているのは、決してこの子達自身の責任ではないのだから、絶対にこの子達にその責めを負わせてはならない。

無邪気に屈託の無い笑みを投げかける子供達を、再び悲しみの淵に投げ込む訳にはいかない。

*

「様子はどう？」

「今のところはなんとも……って、まだ監視し始めたばかりなんだから、そう簡単に何かが起こるって事もないだろう？」

明日見は、野平町の中心街に出る途上、『瑞巖院』の監視を始めたばかりの基経と三蔵の様子を見に来ていた。

昨日の会合で明日見が中座した後、基経と天鵬が住職の監視を、経巧と日向が町内の住民に対する情報収集を行うことに、それぞれ決められた。

住職の監視をする集団からは、更にもう一名が随伴し、住職が何らかの動きを見せた時にも対応出来るように配慮していた。

監視時間は日の出から日の入りまでとし、午前中は基経達が、午後からは天鵬達が交代で監視をすることに決められたのだ。

「三蔵君も頑張ってるんだね」

「もちろんだよ。兄ちゃんだけに苦労かけられないし、俺が出来る事はやって、早くまた寺院でみんなと一緒に暮らしたいんだ」

「大丈夫だよ。みんなの思いが強ければ、絶対にその思いは通じるし、もし住職が悪事を働

いていたとしたら、そんな状態がいつまでも許される筈がないのだからね」

「うん」

寺院の敷地は、規模は迷いの森とは比べるべくもないが、ささやかな林を切り開いた場所に築かれていた。

その為に、寺院の周辺には比較的多くの木々が林立している。

寺院の敷地の周囲を取り囲む様に、木の板の柵が並んでいたが、木に登れば寺院の内部が程よく見渡せるだけでなく、枝葉の陰に隠れる事で、寺院の側からは基経達の姿を見つけにくくする効果もあった。

ただし、丸々半日間樹上で変わり映えのしない風景を見続けて、決定的な瞬間に備えて神経を集中し続ける気力は並大抵のものではなかったし、ましてや子供の基経や三蔵にとっては酷に違いない。

「私も木登りは得意な方だけど、さすがに丸半日ここに居続けるのも辛そう。二人は大丈夫なの？」

「やっぱり明日見もそう思うだろう？ 俺もそう思ったから『交代で見張るから先に休んどけよ』って三蔵に言ったのに、聞かないんだ」

「だって、寺院に戻る為に俺にも出来ることがあるっていうのに、兄ちゃんが監視してるのをただ木の下でボーっと見てるだけっていうのも、なんか嫌なんだもん」

「……っと、まあ、こんな感じなんだ」

「なるほどね。だったら、基経君が先に休んでおけばいいのに……」

「そんな訳にはいかないだろ？ 仮にも俺は保護者としてこいつらの面倒をずっと見て来たんだから」

「だからさ、三蔵君はきっと嬉しいんだよ。今までは基経君に頼りっきりだったけど、やっと自分が役に立てる時が来たんだって」

「そりゃ、わからなくはないけど……」

「それに、今からそんなに一生懸命になって根詰めてても、それが長続きしなければ意味がないのだからね。住職はいつ動き出すかわからないのだし、このままずっと監視し続けていても、住職に怪しい所は別になかった……っていう事だってあり得るんだから」

もちろん、明日見は本音からそう思っている訳ではない。

基経達から話を聞く限りでは、住職の行動には明らかに背後の後ろ暗い物を感じさせたし、信憑性の問題があるとはいえ、物の怪の言葉もある。

しかし、基経や三蔵の様に、すぐにでも事態が進展すると意気込んでいるのは、かえって危険だと明日見には思えた。

もう少し冷静に事態を見極めて欲しいのだから……。

「……まあ、住職が怪しい事には違いないけど、明日見のいう事にも一理あるな。三蔵、俺は一旦下に降りて休んでるから、疲れたらすぐに言えよ」

「わかったよ！」

『信頼する基経にすべての仕事を任された』と、喜び勇んで返事を返す三蔵を残して、明日

見と基経は相次いで木の下に降りた。

「それにしても、今日は奴隷商人の件はやらなくていいのか？」

「これから町に出て情報収集しようと思っているんだけど、『情報屋』っていう人が酒場に
いると言っても、そういう店を一軒ずつ回るのも効率が悪いし、灰人達の事もあるから、酒
場の事をよく知っていそうな人がいたら、教えてもらおうと思ってね」

「そういう事か。そうだなあ……俺だってまだ子供なんだから、酒場なんか行った事ない
し、酒場をよく知っていて信用出来る人となるとなあ……」

「だったら、『情報屋』の話は、誰から聞いたの？」

「ああ、それは質屋の店主だよ。明日見も会っただろう？ でも、あの店主が酒飲みだって
話も聞いた事ないし、色々世話にはなってるけど、あんな親父だから、信用出来る人って感
じではないと思うな」

「ありがとう。でも、あの店主だったら面識もあるし、基経君とあの店主の関係もあるから、
何とかなると思う」

「何とかって？」

「まあね。ありがとう。そうしたら、余り張り切り過ぎない程度に頑張って」

「ああ、そうするよ」

基経と別れて寺院を離れた明日見は、先地基経に案内してもらった野平町の様子を思い
出しながら、まず衣料品店を探した。

東辺町で見つけたお気に入りの上下はそのまま置いて来てしまったし、やはり着替えが
ないと何かと不便だからだ。

しかし、もしこの町の衣料品店でもあのお気に入りと同じ物が見つかったとしても、今は
衣服に浪費する訳にはいかない。

孤児達が寺院に戻るまでの生活を支えなくてはならないのだし、今後、慶太の消息次第
ではどこへ行かなくてはならないか分からないのだ。

仮に慶太を無事に代峰老師の元に連れ帰ったとしても、その後の事もある。

幾ら当面資金が豊富にある様に見えても、出来る限り節約するに越した事はない。

明日見は、町の衣料品店で、今自分が着ている服とほぼ同様の、なんの彩りも飾り気もな
い、一番安い服と下着を一着ずつ購入した。

そのまま雑貨屋に入り、今度は作りが無骨で強度がありそうな背負い袋を一つ購入する。

明日見はこれまでの体験から、『自分の持ち物は出来る限り常に肌身離さず身に着けてお
くべきだ』と実感していた。

だから、荷物の量は最低限に絞り込んだ上で、常にこの背負い袋に入れて背負ったまま行
動する事に決めていた。

もし、また灰人に捕まるような失態を犯したら、当然荷物はすべて奪われるだろうが、既
に老師の小屋に残して置いた荷物もすべて焼けてしまったのだから、その時はその時
と諦めるしかない。

もちろん、いざという時の為に、本当になくしたら困る物は、衣服の隠しポケットにでも

忍ばせておくのが一番よいのだが。

今必要なすべての買い物を済ませると、合計で七十一圓五十銭もかかってしまった。

食べ物なら一圓もあれば多少豪華な食事でも三食は食べられるのに、それ以外の衣服やら雑貨類と言った物は意外と値が張るのだ。

先日孤児達に配布した当面の生活資金と合わせると、野平町に来た段階で既に五百圓近くも使った計算になる。

最悪手持ちのお金で足りなければ、また手持ちの李朝金貨を売れば済む話ではあったが、代峰老師から李朝金貨を巡る歴史的経緯を聞いて以降は、余り頻繁に李朝金貨の両替を行う事は危険だと感じていた。

——せめて、慶太を無事に連れ戻すまでは、手持ちのお金だけで何とか保たせたい。

密かにそんな思いを巡らせながら、明日見は質屋の入り口を潜る。

多少薄暗い店内ではあったが、商品はきちんと棚に並べられていて見やすいし、東辺町の倉庫さながらの質屋とは雲泥の違いだった。

これはひとえに店主の性格の違いによる所が大きいのだろうが、それでも質屋の店主という人々には、どうも苦手意識を抱いてしまう明日見だった。

「いらっしゃい。あんたは確か、基経の女だったな」

——だから、基経君とはそんな関係ではないって。

内心そう叫んでいたが、またそんな些細な事を言い立てて、無駄な時間を費やす気もなかったので、『そう思いたければ思っていればいい』と無視して話を続けた。

「あの、ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「聞きたい事？ 売り買いに来た訳じゃないのか？」

「ええ。あなた、基経君に『情報屋』と言う人の話をしたらしいけど、その事についてもう少し教えてもらえる？」

「んあ？ 『情報屋』……そういえばそんな事を言った覚えがあったな。いつだったか忘れたが……で、基経の女が『情報屋』に何の用だ？」

「別に何の用だっていいでしょ。『情報屋』の居所を教えて欲しいの」

「おいおい、ここは町役場じゃなくて質屋なんだからな。別に売りも買いもしないで、こちらの質問にも答えずに、ただ話を聞かせろって言うのは、ちょっとどうかねえ。そういうのはこちらとしても商売の迷惑なんでね」

やはり、質屋とはどうも反りが合わない様だ……明日見が諦めかけたその時、ふと思い出した事があった。

質屋で手に入るかもしれない物。

「だったら、中古で構わないんだけど、中原地帯全域の地図を探しているの。東辺町で探した時には、書店にも、質屋にもなかったから、もしここにあったら買いたいのだけど」

「中原地帯の地図？ こんな物騒な世の中に、わざわざ異国にでも行くのかい？ それとも勉強か何か？」

「……両方、かな」

「まあいいや。中原地帯の地図ね……かなり古くてもいいのか？」

「どのくらいなの」

「そうだなあ。慧（けい）帝時代初期の物だったらあるけどな」

「その地図でも旅行に使うのに不都合はない？」

「うーん。どうだかな。治安部隊の話によれば『東晶共和国は他国よりも治安がいい』らしいから、わざわざ危険を冒して異国に旅行しようなんて変わり者も少ないし、だから他国が現在どういう状況なのかも、断片的にしか伝わってこない。ましてや、極州や巽州がどうなっているかなんて殆ど分からないのだから、その頃の地図が当てになるかどうかなんて、実際にそこに住んでいる人にしか分からないだろうな」

「そう。実は、東晶共和国の地図なら買ったんだけど、水に濡れてゴワゴワになってしまったから、別の地図があればと思ったんだけど……」

明日見が背負い袋から、水を含んで膨張してゴワゴワになった携帯地図を取り出して、質屋に見せる。

「なるほど、確かに、それでは携帯地図って言うには嵩張り過ぎだな。で、どうするんだ？ 買うのか、買わないのか？」

「それはあなたの答え次第って事。『情報屋』の事を教えてくれるなら買うし、教えてくれないなら買わない。結局、地図が合っても役に立つかどうかは分からないみたいだし……」

「それにしても、あんたみたいな女と『情報屋』って言うのはどうもしっくり来ないんだが、ああいう手合いには余り関わらない方がいいと思うがね」

「やっぱり話す気がないんだ」

「そういう事じゃなくて、親切で言ってやってるんだ。『情報屋』が情報を金で売るって言う事は、その分どこかから金で情報を仕入れたり、色々とかヤバい橋を渡っているもんだ。そういう連中にかかわると、下手したら命まで失いかねないんだからな。その辺だけはよく肝に銘じておいた方がいい」

「……わかった。でも、私は今奴隷商人を追っているの。奴隷商人が横行しているなんて知らなかったし、もしかしたら『情報屋』なら何か知らないかと思って」

「奴隷商人ねえ。それはまた随分と厄介な者に関わったな。で、奴隷商人に捕まったのは、肉親か何か？」

「いや、肉親ではないけど、とてもお世話になった人の子供なの。しかも、私が厄介事を抱えてしまったばかりに、その犠牲になって……」

「なるほどね。それで、基経と二人してここに逃げて来た時も、その厄介事の相手に追いかけてたって訳か」

「まあ、そういう事」

「そういえば、あんた武術をやるとかいってたな。わかった、教えてやるよ。俺が知る限りでは、『情報屋』が出没するのは『居酒屋大将』って言う店だ。そこの店主に情報屋の事を聞けば教えてもらえるだろう。でも、これだけは言っておくが、奴隷商人なんていう連中は、人間の皮を被った獣か、ほら、神話にもある『天界を荒し回った罪で、天帝によって黄泉路の永久

牢獄に繋がれたと言う呉懦（ごだ）』の生まれ変わりみたいなものだ。幾ら世話になった人の子だといっても、出来れば関わらない方がいい……といっても、聞く気はないのだろうな」

「ありがとう。気遣ってくれた事には感謝するよ。でも、私は絶対にその子を取り返さなくては行けない。それから、一応断っておくけど、あなたが基経君達の持ち込んだ品物を盗品だと知っていて取引しているって事を、私は知っているのだからね。治安部隊に密告されなくなかったら、今の話はすべて忘れてもらいたいのだけど」

「口止めてて訳か……そんな事を誰かに喋っても無意味だから、心配するな。それに、そんな事をしたら基経達だって無事では済まないだろうから、あんたの男にも迷惑がかかるって事を、よく覚えておいた方がいいな」

「だから、基経君とはそういうのでは……」

「まあそんなに照れるなって。というより、そんなもの別にどうだろうと構わないのだが。そうしたら、約束通り地図を買ってもらうからな。まあ、価値の分かるやつが見れば、それなりに高くも見積もってくれるんだが、元々が、ある老人の遺品を一斉処分するとか言って、まとめて買い取らされた中に紛れ込んでいたものだから、おまけしておいてやろう。三十圓でどうだ？」

質屋の店主が差し出した地図は、一枚紙のものを何重にも折って保管してあったらしく、紙の折れ目が所々切れ掛かっているし、紙自体も日に焼けたり手垢がついたりしてかなり変色していた。

「これが三十圓もするの？ 今はゴワゴワになってしまった携帯地図だって、新品でもたったの八圓しかしなかったのに？ 私は『あなたが情報屋の事を教えてくれたらその地図を買う』とは言ったけど、言い値で買うとは言っていないのだからね」

「わかったよ。あんたにこの地図の骨董的価値を分かれって言っても無理だってね。なんてたって、あんたはこの地図を地図本来の目的で使おうというのだからな。十圓でいいよ」

一瞬、明日見は呆気に取られてしまった。

直前まで三十圓と言っていた品物が、一瞬にして三分の一の値段に下落するのだから。

質屋とは、それほどいい加減に品物の価格を決めているのだろうか？

——もう少し値下げ交渉してみようか。

明日見はふと思ったが、ゴワゴワになった携帯地図よりは多少割高とはいえ、ある程度妥当な値段だと思い直して、そのままの値段で買い取る事にした。

こんな所で時間を潰すよりも、一刻も早く『居酒屋大将』と言う店を探して、情報屋と接触しなくてはならない。

今こうしている間にも、もしかしたら慶太が酷い仕打ちを受けているかも知れないのだから。

*

明日見は、街中の食堂で少々遅めの昼食を済ませる事にした。

基経の小屋まで一旦戻っていると、町との往復だけで一刻（約一時間）以上はかかる為、少しでも奴隷商人の情報収集を進めたい明日見が、蓬蘭には『昼食は用意しなくていい』と断って出て来たのだった。

いずれにしても、問題の『情報屋』が出没するのは居酒屋なのだから、日の高いうちに訪れても無意味だという事は分かっていた。

しかし、夜になって人通りの多い歓楽街を歩き回るよりは、昼間のうちに目当ての居酒屋の場所だけでも下調べしておいた方が、夜間の余り素行の良くない連中が集まる時間に歓楽街に長居しなくて済むのだ。

それでも時間に余裕が出来る様なら、その間は基経達の方を手伝ってもよいのだから。

明日見は、街道沿いに店を構えるこじんまりした食堂で、川魚の料理を注文する。

この町は、蓬萊山の中腹を源流として中原地帯を横断する川が程近い所を流れていたから、川魚は比較的豊富に手に入るらしい。

今朝漁師が川で釣り上げた魚が昼食の皿に盛られ、昼間のうちに釣り上げた魚は夕食か、次の日の朝食として食べられる事になる。

とはいえ、元々新鮮な魚が豊富に手に入るこの町では、わざわざ前日に釣った魚を一晩寝かせて、次の日の朝になってから食べるという酔狂な人も余り居なかったのだが。

この町の食堂や旅館で料理を注文すると、大抵麦を中心に米や何種類かの雑穀を混ぜ合わせた『五穀御飯』と、店によって様々な特徴があるといわれる『自家製漬物の添え物』と、やはり何らかの形の汁物がついてくる。

さすがに全てがお米の御飯を食べようと思ったら、別途注文するしかない。

通貨制度が定められて、全ての品物を貨幣を通じて取引する様になってから、既に相当な時間が経つが、それ以前は米こそが全ての価値基準といっても良いくらいに、米は貴重かつ最高級の穀物として扱われていた。

その名残が現在でも残っていて、通常帝や州侯に納める税は貨幣で支払われるのだが、米だけは例外的に物納とされていた。

もっとも、これは明日見が帝記から学んだ知識であり、現在東晶共和国でも同様の事情なのかどうかは確認していない。

食堂は、店主夫婦が切り盛りしている小さい店だったが、ちょうど昼食時も過ぎて客足が一段落した所だったので、明日見は旅行者を装って、気さくな店主からこの町の話の色々と聞き出していた。

基経達の事を引き合いに出して、『少年達に襲われそうになったんだけど……』と始めて、そこから寺院や住職に関する情報を引き出そうとしたが、この店主は寺院とは殆ど関わりが無く、現在の住職とも面識が無い事が分かっただけだった。

明日見は川魚の料理に暫し舌鼓を打つと、今度は歓楽街へ移動する。

やはり、歓楽街は町の中心街からは比較的離れた所にあった。

街道沿いと違って、まだ全ての店が閉まったままだったが、さすがにこの時間ともなると、今夜の開店準備の為なのか、小汚く微妙にすえた臭いが鼻を突く通りを、小走りで通り過ぎ

る人も何人か見受けられる。

歓楽街といっても、街道に交差する一本の脇道に沿って、居酒屋やら賭博場やら売春宿やらが雑多に建ち並んでいるだけなのだが、それでも街道に近い辺りは居酒屋が比較的多かった。

賭博場や売春宿は、一応法的にも存在を認められていたが、予め役場に許可を得た上で営業しなくてはならず、様々な制限も設けられていた。

賭博場はイカサマ賭博や法外な掛け率の設定を認められていなかったし、定期的に役場の立ち入り検査を受ける必要があった。

売春宿の場合も、病気への適切な対応や法外な価格設定の禁止を求められていたし、奴隷商人を経由して女性が売られてくる可能性も常にあったから、やはり役場による定期的な立ち入り検査を受けなくてはならない。

しかし、世の中にはそういった法の網を掻い潜ろうとする人も少なくない。

だから、同じ歓楽街とはいっても、街道から離れれば離れる程新興の店舗で、違法の疑いの強い店舗の可能性が高かった。

それは幾ら違法とは知っていても、賭博場にしても売春宿にしても、既存の店舗よりそういった店の方が魅力的だったから、噂はすぐに口コミで広がり、そして摘発されていくというたちゴッコを繰り返していた。

明日見は、まず街道の右手側に続く歓楽街を歩いて回り、時々道端に居座る汚らしい身なりの男に、思わず背筋を凍らせる様な視線を投げかけられながら、とうとう道の外れまで来てしまった。

——見落としたのだろうか。

念の為に、もう一度道の左右に建ち並ぶ店の看板を見落とさない様に、細心の注意を払いながら街道に向かって戻っていく。

「可愛い顔して、こんな時間から男漁りかい？」

ああ、さっき人を値踏みする様な視線を投げかけてきた男だ。

「こんな時間に来たって、まだ人はいないから、もう少し経ってから来るんだな。それとも、俺が相手してやろうか」

喉の辺りに粘つく男の視線は、明日見の生理的嫌悪感を極限まで跳ね上げるのに十分な効果を発揮した。

あの、厭らしくも汚らしい、曾頓に通じる雰囲気のある男だ。

明日見は、もし背後から付け狙ってきたら、いつでも反応出来る様に心の準備だけはして、背中に意識を集中した。

幸いにも、男は単に明日見をからかっただけだった様だが、『やはり私には歓楽街は性に合わない』と改めて実感した。

灰人に始めて飲まれた葡萄酒の味は嫌いではなかったが、あの葡萄酒を飲んだ為に拘束されてしまったのだから、余り良い記憶ではないし、第一曾頓や先程の男の様な連中が歓楽街には犇めいているのだとしたら、明日見には精神的に耐えられなかった。

——あの、粘ついて絡め取られそうな視線にいつまでも晒される位なら、いっそ『情報屋』との接触など諦めて、別の方法を模索しようか……。

ふと頭をもたげたその考えを、明日見は慌てて打ち消した。

慶太の置かれた状況を考えれば、今明日見を襲っている生理的嫌悪感など、ほんの些細な事かもしれない。

慶太はもっと苦しく、辛い目に遭っているかも知れないのだ。

今は何よりも、慶太の消息を掴んで、一刻も早く救出する事を優先させなくてはならないのだから。

これも曾頓と事を構えてしまった自分に責任があるのだから、下らない私情で慶太の救出が滞ってはいけない。

一旦街道に戻ると、明日見は周囲に目立たぬ様に軽く深呼吸し、気分を落ち着けて気合を入れなおした。

そして、今度は街道の左側の道をいくと、街道からかなり奥に入った所に、目的の『居酒屋大将』があった。

木製の看板に大きく彫られた『大将』の文字が目立つ。

営業時間にはまだ少し早いらしいが、店内では店主らしき男が开店準備に急がしように動き回っている。

一瞬『邪魔をしてはいけないかしら』とも思ったが、先ほど散々質屋の店主に言われていた事もあったから、『情報屋』の事を聞き出すにはひと気が無い今の方が良いと考えた明日見は、意を決して店内に足を踏み入れる。

「すまんね。まだ开店前だから、後一刻（約一時間）もしたら出直してくれるかい？」

店主はこちらを見ようともせずに戻る。

こういう事例は珍しくないのだろう。

「あの、この店は『居酒屋大将』という名前なのですよね？」

明日見の声に反応して、始めて店主が明日見の方に振り向く。

「そうだが、この店はあんたみたいなお嬢ちゃんに来る所ではないな」

「あの、ちょっと聞きたい事があって来たのだけど、ここに『情報屋』が出入りしているって話を聞いたから、居所を教えて欲しいの」

「へえ。お嬢ちゃんが『情報屋』探しかい。今はまだ开店前だって、言っただろう？ 开店してから出直してもらいたいものだな。开店準備の邪魔をされたくないのね」

「分かりました。すぐに引き上げますから、『情報屋』の居所を教えてください」

「あんたは言葉が分からんのかね？ 出直して来いと……」

「だから、私も『情報屋』の居所を教えてください、すぐに引き上げると言っているでしょう」

暫し明日見は店主と睨み合いになり、ふと、店主が表情を緩めると、カウンターの奥に入った。

「あんたも強情だな。仕方が無いから、教えてやってもいいが、ここは居酒屋だ。居酒屋に

来て何も注文せずに帰られても商売にならないのでね。で、何を飲むんだ？ 麦酒に、米酒に、葡萄酒に、何でもあるから、一杯くらいは飲んでいくだろう？ 一杯二十銭だ」

『そういう事ね』と明日見は妙に納得し、先程雑貨屋で購入した小銭入れ用の布袋から十銭硬貨を二枚出した。

「葡萄酒を頂戴」

実は、これしか明日見は飲んだ事が無かったからなのだが、なかなか味が気に入ったという理由もあった。

前回飲んだ時は苦い記憶だけが残ったが、今回はもう少し味わって飲めるかも知れない。

「あんたにとって運がいいのか悪いのかは分からんが、今日は『情報屋』は来ない。そうさな、何か大きなネタがあったらしくてな、ここ三～四日は店に顔を出していないんだ。奴の話によれば、『一週間くらいで戻る』といていたから、三～四日経ってからくれば、奴にも会えるだろう」

「三～四日ね。ところで、『情報屋』の家は知ってるの？」

「いや。それに、例え知っていたとしても、家にいったって奴はいないし、『情報屋』ってのは自分の持っている情報の価値を良く知っているから、家捜ししたって何も出てこないだろうな。そんなヘマやる時点で『情報屋』としては失格だからな」

「他に『情報屋』はいないの？ 私はちょっと急いでいるのだけど……」

「そういわれてもなあ。競争相手の情報をわざわざ教えてやる義理も無いから……というのは冗談だが、こんな片田舎の町に、一人でも常駐の『情報屋』がいるってだけでも珍しい事だから。そんなに急いでいるなら、他の町を当たってみるんだな。尤も、この町の情報を得たいのなら、やはりうちの『情報屋』の帰りを待つ方が良いと思うがね」

「そう。ありがとう」

今度こそもう少し葡萄酒を味わいたいと思ったのだが、明日見の話に応じながらも甲斐甲斐しく開店準備に追われている店主の姿を見ると、あまり長居する訳にもいかないと思い、枡を小ぶりにして角を丸く削った様な入れ物に並々と注がれた葡萄酒を一気に飲み干した。

「お嬢ちゃんにしては飲みっぷりがいいねえ」

店主の声を背後に、明日見は『居酒屋大将』を後にした。

自分でも顔から首の辺りにかけては熱を帯び、体の芯から火照って来るのが良く分かる。

何となく頭の中に薄い幕を張られた様にぼんやりとして、全身の感覚も心持ち鈍くなった様な気がする。

何となく足取りが覚束ないながらも、先程と比べてかなり人通りが激しくなった歓楽街の通りを、人の流れを交わしながら街道へと進む。

明日見が人並みを掻き分けて街道に出た頃には、そろそろ日も大分西の空に落ちてきて、そろそろ歓楽街が今夜の活動を開始するという刻限となっていた。

始めてまともに酒類を飲んだ明日見は、全身の感覚が鈍ったまま回復しない事に戸惑いを見せていた。

普通に歩くくらいなら問題は無いのだが、もしここで灰人達にでも見つかってしまったら、果たして無事に逃げられるか、あるいは武術で撃退出来るか、少々自信が無かった。

そして、そんな時に限って奴らに見つかってしまうものだ。

「まさか、こんな所で見つかるとは思っていなかったぜ。散々手間かけさせやがって、このクソアマが！」

明日見は背後から腕を掴まれて振り向くと、そこには見覚えのある顔が、様々な複雑な感情を宿した視線を明日見に向けて落としていた。

「曾頓！」

「へっへえ。搜したぜ。でも、まさか歓楽街の入口に突っ立ってるったあな」

明日見は曾頓に口で答える代わりに、掴まれていない方の腕で拳を握って、曾頓の懷に叩き込む。

「うっ」

曾頓が思わず明日見の腕を手放すのを見逃さずに、曾頓と睨み合う形で間合いを取った。

徐々に人が集まりつつあった、開店直後の歓楽街の入口である。

しかも、見るからに無法者といった雰囲気のと、女性としては少々背も高めで、体つきもそれなりにガッチリしてはいたけれども、顔つきを見ただけではとても喧嘩をするとは思えない少女が、今すぐにも互いに殴りかかろうとしているのだ。

周囲にはすぐに人垣が出来、野次馬が集まってきた。

「なんだあ〜。こんな所で痴話喧嘩か〜」

「さっさとやれよ！」

「姉ちゃんカッコいい！」

周囲から口々に野次が飛び、囂し立てて二人を煽る。

——ああ、こんな所でこんなに注目を浴びてしまって、勘弁して欲しい。

——どうやったら曾頓を交わして逃げられるだろうか。

そんな二つの思いが明日見の中で交錯していた。

こんなに目立つ場所で騒ぎを大きくして治安部隊の世話にもなりたくないし、曾頓がここに来た以上、いつ灰人達が来るか分からないのだ。

一刻も早くここから逃げる。

明日見の目指す所は一つに定まった。

曾頓も予想外の大群衆に囲まれて、自分が注目の主役に祭り上げられている事に、かなり複雑な感情を抱いている様だ。

普段のままでさえ醜い曾頓の顔が、更に醜く歪んで見える。

「今日こそ絶対に逃がさねえから、覚悟しろよ」

「そう？ この前みたいに返り討ちに合わない様に気をつけなさい。今日は多くの聴衆が見ているのだからね」

思わず明日見の口をついて出た言葉が、曾頓の感情を酷く逆立てた。

「ケケッ、返り討ちだってよ」

野次馬の中から嘲笑が起こる。

この場にいる誰もが、そして当の曾頓と明日見自身も、その嘲笑が曾頓に向けられている事を認識していた。

「畜生が！ こっちが女だと思って手加減すりゃあ付け上がりやがって、もう絶対に許さねえ！」

曾頓が二度、三度と拳を繰り出すのを、明日見は紙一重の差で交わしながら、辺りの様子を窺う。

その度に、周囲からは低く『おお！』というどよめきが起こる。

見かけとは違って、実は明日見が喧嘩慣れしていると見たのだろう。

「バカにしゃがって、やるんならそんなちょろちょろ逃げてねえで、さっさとかかって来やがれ！」

「私に一度も拳を当てられないで、まともにやり合うつもり？ そういう大口は、一度でも私に拳を当ててからにする事ね」

明日見の挑発的な言葉に、曾頓は益々逆上して冷静な判断力を失っていく。

それこそが明日見の狙いだった。

曾頓がかつて体験した、一見普通の女の子にしか見えない明日見を相手に、なす術無く一方的に振り返りにあった屈辱の記憶、それがあるからこそ、明日見の挑発は曾頓に対して極めて有効に作用した。

「だったら、今度こそ本気で当ててやろうじゃねえか！」

曾頓が半ば拳を突き出し、『直撃だ！』と直感した瞬間、明日見の顔が視界から消えた。

明日見は曾頓の拳を寸前で交わし、そのまま体を脇に避けて、勢い余って前のめりになった曾頓の足を引っ掛ける。

曾頓が無様につんのめって頭から地面に激突した時、明日見は周囲の人垣を取り囲む聴衆の僅かな隙間をぬって、人込みの中に紛れていた。

「全く、こんな所で喧嘩なんて、勘弁して欲しい」

明日見は一人呟きながら、夕暮れの町を基経の小屋に向けて走り抜けた。

前回の曾頓とやりあった直後も、結局はあの様な事件に巻き込まれてしまったのだから、今回の出来事が加われば、更に曾頓の恨みを買ひ、今後もっと執拗に執着してくるに違いない。

明日見は当面の危機を回避したものの、今後自分自身や、もしかしたら基経達にも及ぶかもしれない身の危険を考えると、益々気が重くなるのだった。

慶太を奴隷商人に売り渡すくらいだから、きっと基経君の所に身を寄せていると知られたら、彼らにも危害を加えるに決まっている。

灰人達はそういう連中なのだから……。

*

翌日の午前中を、明日見は基経の丸太小屋で逢蘭とともに、家事やら子供達の子守に費やしていた。

とはいえ、明日見が家にいると、末娘の遥采が必ずといって良いほど足元に付きまわってきて、まともに家事をこなす状況ではなくなってしまう。

明日見を独占している遥采の姿を見れば、延尊も羨ましがって付きまわってくる。

それでは仕事にならないと、見るに見かねた逢蘭が『家事は私がやりますから、明日見さんはこの子達の相手をお願いします』と、結局何もかもを逢蘭に押し付けてしまう。

「そうしたら、これから散歩に出かけようか。この辺りに何かあるのか、案内してくれるかな？」

「うん。遥采が案内してあげる」

「俺も行く！」

という訳で、家事を途中で逢蘭に委ね、明日見達三人は散歩がてら丸太小屋の周囲を散策することにした。

結果的には、そこにいだけで邪魔になってしまう三人が屋内にいない方が、多少なりとも逢蘭の仕事が捗るだろうという、役に立っていない自分に心苦しい明日見が、逢蘭にしてあげられる唯一の心配りだった。

更に、幼い二人は明日見を大層気に入っていて、少しでも明日見と一緒にいられるのが嬉しいのだから、家事にかまけて自分達の相手をしてくれないよりは、一緒に散歩に行ける方が何倍も嬉しかった。

「さて、どこへ連れて行ってくれるのかな？」

明日見は右手に遥采、左手に延尊の小さな手を握り、小屋に残した逢蘭を少々気にかけつつも、つかの間の親子気分にする事にした。

明日見には、子供を持つところか男の人とのまともな恋愛経験も皆無だったが、こうやって実際に子供達と一緒にいると、『自分の子供を持つのも悪くない』と思ってしまう。

これまで明日見の人生の大半を費やした不似の山の『天元堂』では、武闘術の鍛錬と帝記を始めとした書物を通じた勉学の日々を送ってきたのだから、この様な幼い子供達と接する機会は無かった。

『天元堂』にも、子供達はいた。

でも、それはこの子達とは違って、たとえ子供ではあっても『天元堂』の規律に従って生活する事を求められていたし、また子供であるが故に、周囲の生活環境に適応する柔軟性を兼ね備えていたから、子供なりにも周囲にいる修行者なり仙なりに感化されていた。

だから、『天元堂』の子供達はほぼ例外なく、下界の子供達に比べると何歳も大人びて見えた。

幾ら大人びているとはいっても、子供にも個性があるのだから一様ではないが、全体としては大人びていた様に、明日見の記憶には残っている。

尤も、それ以前に『天元堂』での生活では、明日見がそういった子供達と接する機会もかなり制限されていたし、明日見自身が子供達に対する関心が薄い事もあった為、まともにこの

年齢の子供達と接するのは、今傍らにいる遥采と延尊が始めてといっても良い。

それだけに、実は意外と『子供達と接したり、子供達の世話に追われるのが嫌いではない自分』を発見して、少々戸惑っている明日見だった。

世の中には、明日見と同じくらいの年齢で子を産み、育て、母親となっている女性も珍しくはなかったから、明日見も世の女性の一人である以上、そういった感情に囚われるのは、ある意味健全な心の動きである。

幾ら武闘術に明け暮れ、他の女性とは到底似つかない人生を歩んでいても、明日見もただの女性に変わりないという証明でもあった。

母性本能……そんな感情は、一庶民とは余りに違い過ぎる自分自身には無用の存在と思っていたのに、子供達が愛着を持って接してくれるに連れて、自分自身もこの子達に対する愛情が湧きあがる。

そう遠くない未来には別れなくてはならない事が確定しているというのに、自ら子供達との情愛を深めようと求め、また子供達が懐いてくれることを嬉しいと感じている。

——物の怪のいう通りだ。

明日見は改めて実感した。

このまま子供達とより深く接すれば、必ず別れ難くなる。

別れは子供達にとっても悲しみとなって襲い掛かるだろうが、きっと明日見にとっての方が何倍も大きな心の衝撃となって押し寄せるだろう。

予めそれがわかっているにもかかわらず、また、その別れが避けがたいものであると認識しているにもかかわらず、明日見は『もっと子供達と身近に接したい』と感じる己の本能の様なものに逆らえずにいた。

「これが、もっくぞっくの木だよ」

不意に延尊が明日見の手を離れ、所々に雑草が生い茂る広場のほぼ真ん中に立つ一本の大木に駆け寄った。

「もっくぞっくの木？」

「俺たちがまだ寺院でみんなと一緒にいた時、逢蘭姉ちゃんが絵本を読んできたんだ。『もっくぞっくの木』には木の精っていう神様みたいな人が住んでいて、いい子の願いを叶えてくれるんだって。だから、この前もこの『もっくぞっくの木』にお願いして、そうしたら基経兄ちゃんが明日見を連れてきたんだ。だから、きっと、俺たちがいい子だって、『もっくぞっくの木』がごほうびをくれたんだ」

「そうなんだ……」

明日見は『もっくぞっくの木』という話を聞いたことはなかったから、なぜいきなり延尊がそんな話をはじめたのかがよくわからなかった。

「遥采も『もっくぞっくの木』にお願いしたよ。お母ちゃんに会いたって。そしたら、お母ちゃんには会えなかったけど、明日見お姉ちゃんに会えたから、遥采の願いを叶えてくれたんだよ。だって、明日見お姉ちゃんはお母ちゃんみたいなんだもん」

「だから、今度は『またみんなと一緒にいたい』って、お願いするんだ。それから、食べるも

のも一杯食べたいって。きっとまた、いい子にしていれば、『もっくぞっくの木』の精が叶えてくれる」

「そうなんだ。そうしたら、またみんなで寺院に戻って楽しく暮らせます様に……って、もっくぞっくの木にお願いしようか？」

「うん」

——早く寺院に戻って、またみんなで仲良く暮らせますように。

『ぞっくもっくの木』に向かって手を合わせる延尊と遥采は、きっとそう祈っているのだろう。

——でも、私はいったい何を祈ればいいのか？

延尊や遥采が寺院に戻って、日々の食べ物にも事欠く現在の状況を抜け出す事は喜ばしいのだが、それは同時に明日見がこの子達と別れなければならない瞬間でもある。

まだ出会ったばかりなのに、ずっと一緒に生活していたと錯覚させるくらいに、二人は明日見に懐いていた。

きっと、今までの様に寺院に戻った後の事なんて、延尊も遥采も全く思い至らないに違いない。

しかし、明日見は物の怪の予期せぬ指摘でその事に気づき、それでも既に懐いてしまった二人を強引に引き離す訳にもいかず、また自分自身もこの子達とともにいたいと望んでいるのだ。

もちろん、慶太の事を忘れた訳ではない。

慶太は明日見にとっても弟のように感じさせる、とても好感の持てる少年だった。

ましてや、慶太が奴隷商人に売り渡される原因となったのは、明日見が曾頓や呆六とのトラブルを抱えた事が原因なのだ。

その為に小屋を焼かれ、自らも傷ついた代峰老師の為に、慶太だけはどうしても救出しなくてはならない。

——たとえ今は別れ難いとしても、慶太の身の上には変えられない。

その時になればきっと辛くなるのだろうが、慶太を救出すればまた会いに来る事も出来るのだ。

この子達を始め、基経達ならば、慶太とだってよい友達になれるかも知れない。

『ぞっくもっくの木』に、明日見は、基経達が無事に寺院へ戻れる事、明日見のこれからの旅を無事に終えられる事、そして、慶太を一刻も早く救出出来る様に祈った。

この木にそんな効力があるとは思えなかったが、そう念じる思いが慶太に届いてくれて、自分が辿りつくまでの間は慶太を守ってもらいたい……そう頑なに信じたかった。

「さあ、戻ろうか」

「うん」

明日見は再び両方の手に延尊と遥采の小さな手をしっかりと握り締めて、かつて逢蘭が読んでくれたという『ぞっくもっくの木』の絵本の話や、その他の他愛もない事を話しながら、一人逢蘭の待つ丸太小屋へと向かった。

逢蘭は既に屋内の家事をあらかた片付け、洗濯物を干している最中だった。

「お帰りなさい」

「ごめんなさい、すべて逢蘭ちゃんに押し付けちゃったみたいで……」

「いえ、明日見さんが二人の相手をしてくれたので、その間に仕事も捗りましたから」

「そういえば、逢蘭ちゃん達は、お風呂とかはどうしているの？ 私も昨日着替えを買って来たし、どうせ服を着替えるならお風呂にも入りたいと思うのだけど……」

「あ、気づかないでごめんなさい。いつもは、近くに良くしてくれる農家があるので、そこで二～三日に一度お風呂を借りるんです。後で貸してもらえる様に一緒にお願いに行きましようか？」

「そうね。だったら、後で一緒にお風呂に入ろうか？」

「え、明日見さんとですか？」

「逢蘭ちゃんとは余り話が出来る機会もなかったし、同じ女同士なんだからいいでしょう？」

「え、ええ……」

「ねえ、遥采も明日見お姉ちゃんとお風呂行きたい」

「俺も！」

明日見に手を繋がれて、二人の話を聞いていた遥采と延尊が案の定絡んでくる。

「ちょっと待って。今日は逢蘭お姉ちゃんと二人だけで入っちゃ駄目かな。延尊君や遥采ちゃんとは一杯お話もしたし、毎晩交代で一緒に寝ているけど、逢蘭お姉ちゃんとはあんまりお話ししていないから、一度二人っきりでお話してみたいんだけど」

「えー」

「でも……」

「ほら、もう少しすれば基経君達も帰ってくるから、一緒にお留守番していてくれないかな？」

「……わかった」

二人は意外とあっさり了解した。

逢蘭は余り乗り気ではない様だったが、明日見は何となく逢蘭が自分に対してわだかまりを持っている様な気がしたので、この際逢蘭の真意を聞き出しておきたかったのだ。

程なく基経と三蔵が午前中の偵察から帰ってきたが、少し遅めの昼食が終わると、快く子供達のお守りを引き受けて、明日見と逢蘭を送り出してくれた。

少々意地悪な含み笑いを浮かべた基経と、そんな基経の表情に怪訝な顔つきの三蔵、そしてどこまでも無邪気な二人の子供達に見送られて、明日見と逢蘭は風呂を貸してくれるという農家の屋敷へ向かった。

ちょっと年季の入った、しかし長年この地に家を構えていると誇っている様な味わいのある門を潜り、逢蘭達が世話になっているという農家にまみえた。

まだ日の高い午後のひと時という事もあって、農家には奥さんしかいなかったが、親切で気さくな奥さんの話し振りに、明日見も呆気なく警戒を解いてしまっていた。

この家には、町でも五本の指に入ると言われるほどの長寿で有名なお婆さんがおり、風呂の準備をしてもらっている間に、そのお婆さんの昔話や、逢蘭達を孫のように可愛がっている……という話を聞いた。

この家にも一人息子がいるのだそうだが、現在は首都に留学しているらしい。

そうこうしている内に風呂の準備が整い、明日見は久々に温かな湯船に体を沈めた。

「ああ、体の芯から温まって、体内の毒物がみんな吐き出される様な感じ……逢蘭ちゃんも早くいらっしゃい、とても気持ちが良いから」

「はい……」

少し遅れて、恥ずかしげに俯いた逢蘭が、ちょうど明日見に向かい合う位置で、こじんまりと身を縮こまらせて湯船に浸かる。

「これで、やっと女同士の話が出来そうね。ほら、逢蘭ちゃんって、立場上他の子達の面倒を色々見ないといけないでしょ？ 私よりも年下なのにしっかりしてるし、よく気がつくし、文句一つ言わずにみんなのお世話をしているでしょう？ 逢蘭ちゃんって、とっても偉いなって思うんだ」

「そんな……」

明日見に直視されて、逢蘭は耳たぶを赤く染めて益々下を向いて、身を硬く縮ませている。

「でも、みんなのお世話や、色々と仕事が忙しいみたいだし、他の子がいるとなかなかじっくりお話できないから、いつか機会を作って、逢蘭ちゃんとお話してみたいと思っていたの。逢蘭ちゃんだったら年も近いし、基経君達や、遥采ちゃんとも違う話が出来ると思ったんだけど……」

「あ、あの……」

「何？」

「私、話をするのは苦手で、聞いていた方が楽なんです。それに、私なんかと話しても、きっと面白くないと思います」

「そうね、逢蘭ちゃんは内気な子っていう感じだものね。でも、自分の話が面白くないなんて、自分で勝手に決め付けるのはどうかな？ 少なくとも、私は逢蘭ちゃんがどう思い、何を考えているのか、ちょっと興味があるんだけど……」

「だって、私は明日見さんみたいに難しい本も読めないし、兄ちゃん達が喜ぶ様な話だってぜんぜん出来ないし、ただ、兄ちゃん達の迷惑にならない様に、みんなのお世話をしているだけなんです。もう、ただそれだけで……」

「でも、遥采ちゃん達に『ぞっくもっくの木』の本を読んであげたんでしょ？ 実はね、さっき、遥采ちゃんや延尊君と一緒に、あの子達が『ぞっくもっくの木』と呼んでいる木の所まで行って、『はやくみんながまた寺院で暮らせますように』って、お祈りをしてきたの。あの子達、逢蘭ちゃんが聞かせてくれた話を信じていて、『いい子にしていって、ぞっくもっくの木にお祈りすればきっと願いが叶う』って、言っていたよ」

「でも、それは、絵本のお話を読んであげただけで……」

「そうかな？ きっと、それは逢蘭ちゃんが読んであげたから……だと思うけど」

「えっ、でも……」

「ううん。きっとそうだよ。逢蘭ちゃんが恥ずかしがり屋で内気な子だって言うのはわかるけど、そんなに卑屈になる事はないと思うよ。それに、私は確かにお世話になっていた所で帝記を勉強させられたから、そういう話は多少知っているかもしれないけれど、それは逢蘭ちゃんでも勉強する機会さえあれば学べるのだし、普段の生活には余り必要ではないからね。むしろ、あの子達を守ろうと必死な基経君や逢蘭ちゃんは偉いな、凄いなって思うよ」

「兄ちゃんは凄いなと思いますけど、私はそんな事無いです」

「ううん。私は、そんな控えめな逢蘭ちゃんがとても気になるから、色々なお話をしてみたいと思うのだけど、何となく逢蘭ちゃんに避けられている様な気がして、ちょっと寂しかったの。でも、こうやって話をしてみて、何となく分かった様な気がする」

「……避けているなんて」

「もし、思い違いだったらごめんね。でも、もしかしたら、逢蘭ちゃんは基経君を好きなのかと思ったから、もし私が妙な誤解を与えているのだとしたら、その誤解は解いておきたいの」

「誤解なんて……私は兄ちゃんの事を凄いなと思うし、とても感謝している……それだけなんです。きっと兄ちゃんは私の事なんてなんとも思っていないから、気にしないで下さい」

いつの間にか明日見に真っ直ぐ向かい合っていた逢蘭の瞳は、滅多に見せぬ感情の高まりと共に湧きあがった涙で覆われ、今にも大粒の滴が零れ落ちそうだった。

「いいのよ。言いたい事があれば、何でも言って」

明日見が反射的に逢蘭に向かって両手を差し出すと、逢蘭は明日見の腕の中に転がり込むようにして明日見の小脇に滑り込み、明日見の胸元に顔を押し付けてすすり泣いた。

「明日見さんはとてもいい人だって、わかってます。でも、兄ちゃんも、三蔵も、延尊も、遥采もみんな明日見さんの事ばかりで、私悔しかったんです。明日見さんが悪いんじゃないくて、私がそんな事ばかり考えるからいけないんです」

「ううん。私ももう少しそういう事に気付いてあげればよかったの」

「いいえ。私ではどうやったって、延尊や遥采のお母さんの代わりにはなれないし、延尊も遥采もあんなに嬉しそうで、感謝しているんです。でも、そうしたら、『私が今まであの子達にして来た事はなんだったの?』『私なんかいなくてもいいんだ』と思ってしまって、とても悔しかったんです」

「そんな……」

「それに、兄ちゃんだって、私みたいな子供より、明日見さんみたいに綺麗な人が好きに決まっています」

逢蘭は言うなり、明日見の胸元に顔を埋めたまま、小さな嗚咽を漏らしていた。

明日見は無言のまま、年齢の割には少々小柄で痩せっぽちの逢蘭の体を小脇に抱え込む様にして抱きしめていた。

——ただ、逗留している間はいいい関係でいたい、基経君に助けられた恩は何らかの形で返したいという思いが、こんな形で逢蘭ちゃんを傷つけていたなんて。

明日見の心には、例え意図せずとは言え、こんなに可憐で健気な少女の繊細な心を傷つけていた事に対する後悔の念が渦巻いていた。

そして、もうすぐ訪れるであろう別れの時が、きっと幼い遥采や延尊の心をも傷つけるであろう事を、既に物の怪に指摘されていたから、明日見にとっては更に重く積み重なる衝撃となった。

——私は、一刻も早くこの子達の元を離れた方がいいのだろうか。

＊

夜の歓楽街は、酒と金と女の欲に飢えた男達に埋め尽くされていた。

路地を隙間なく囲うように立ち並ぶ店舗群は、それぞれが趣向を凝らせた独特の演出で客の目を惹きつけ、少しでも多くの顧客を獲得しようと躍起になっていた。

それぞれに目立つ明かりや様々な装飾品で店頭を飾りつけ、そういった店の細かな努力の積み重ねの結果、つかの間の欲求を果たさんと群がる男達は、つい思い余って財布の紐を緩めてしまう。

どの町の歓楽街でも、夜毎繰り返されるありふれた光景が、やはりこの町でもそこここで見受けられた。

しかし、夜の歓楽街は、必ずしもつかの間の欲求を満たそうとする者達だけが訪れる場所ではない。

日々の様々な辛い経験、嫌な思い出をほんのつかの間だけでも忘れる為に、酒の魔力に溺れてしまう者も少なくはない。

街道から少し離れたところにある、こじんまりしたこの居酒屋にも、ほんのひと時だけでも酒に溺れて、すべての嫌な記憶を消し去ってしまいたいと願う男が一人、壁際の客席で何事か呟きながら、ひたすら酒を煽っていた。

曾頓である。

「クソ！　なんで俺様があんな女に負けなくちゃならねえんだ。しかも、夕方の歓楽街の入り口で、あんなに大群衆の前で俺に恥かかせやがって……」

一体、もう何杯の酒を飲んだのだろうか。

こんなに屈辱的な記憶は今だけでも忘れてしまいたいのに、幾ら飲んでも酔いが回るどころか、ますますあの時の屈辱的な記憶が、更には東辺町で受けた屈辱的な記憶までもが頭の中で繰り返し再生される。

「親父、もう一杯だ」

曾頓は厨房から顔を出した店主に向かって荒々しく言い放つが、店主は少々呆れたといった表情のまま、その場を動かこうとしない。

「お客さん、さっきから相当飲んでる様だけど、大丈夫かい？」

「っるせえ！　俺は客なんだからな。金だって持ってんだから、文句言わずにさっさと酒出せ！」

「まあ、金さえ払ってくれば、お客様だから酒は出すけど、ここで潰れないでくれよ」

「ふん、誰がこんな水みたいな酒で潰れるか……」

店主が不承不承曾頓の茶碗に注いだ唐黍（とうきび）酒を、曾頓は勢いで一気に喉の奥に流し込む。

そんな曾頓の耳元に、背中越しの食卓に座る二人組の話し声が飛び込んでくる。

「そういえばさ、そこで一人で飲んでる奴、どこかで見た気がするなあ……と思ってただけど、やっぱ昨日の情けねえ奴だ」

「誰さ？」

「あの、見るからに胡散臭そうな奴」

「ふーん、町の奴じゃねーな。で、そいつがどうかしたのか？」

「いや、それがさあ、昨日の夕方に、歓楽街の入り口の所で、いきなり可愛い女の子と痴話喧嘩始めちゃったんだけど、女の方が強いなのって。あいつの拳なんて掠りもしないうちに女の子に足引っ掛けられて、頭から倒れこんでんの。しかも、前にも返り討ちにあったなんて話してて、ありゃあ、ちと恥ずかしくて、俺だったら二度と町歩けねえな」

「そんな事があったのかよ」

「ああ、すぐに片がついたけど、なかなかの見ものだったぜ。お前も俺達と一緒に飲みに来てれば見れたのにな」

曾頓は一度も背後を振り返らずに、じっと我慢して聞き耳を立てていたが、どう考えても背後の二人は昨日の曾頓の醜態話を酒の肴にしていたに違いない。

その忌まわしき記憶を消し去る為に酒を飲んでいるというのに、わざわざ人の神経を逆撫でする様な事言いやがって……。

「お前ら！ 人が聞いてないと思って散々馬鹿にしゃがると……」

急激に心の内に跳ね上がった怒りに任せて、曾頓は背後を振り返って、二人組に向かって怒鳴りながら立ち上がる。

と思った矢先、膝の力が抜けて腰から床に崩折れてしまった。

「だから言わんこっちゃない。ほら、しっかりしてくれよ」

店主は、すっかり全身に酔いが回って足腰が立たない曾頓のさまを見て、少々呆れた表情を浮かべながら曾頓の肩を抱えて助け起こすと、再び曾頓が腰掛けていた椅子に座らせる。

背後の二人組はその様子を見て更にクスクスと嘲笑を漏らしていたが、店主が無言のまま目配せをすると、そのまま曾頓を構うのをやめてしまった。

「ったく、余計な事しねーで、酒もう一杯出せ」

一方、曾頓はと言えば、既に背後の二人組などどうでも良くなっていた。

ただ、明日見に二度も味わわれた忌まわしき屈辱の記憶を拭い去りたい、一刻も早く忘れてしまいたいと言う思いのみが曾頓の頭をグルグルと駆け巡り、一縷の望みを託して酒を煽る度に、明日見になす術無く子供扱いされた記憶が益々鮮明に蘇ってくる。

『酒に浸れば全てが忘れられる筈なのに……』という曾頓の経験則は見事に裏切られ、かといって他になす術も見つからずに、もう一杯と更に酒を煽る。

「お客さん、いい加減もうやめておいた方が良いと思うがね。もう足腰だって立たないんだから……」

「っるっせえ！ この店は客の言う事が聞けねえっていうのか！」

「あんた、店の側にだってお客さんを選べる事を知らないのかい？ 余り騒ぐと他のお客さんの迷惑になるから、いい加減にして貰いたいんだけどね」

「だったら、さっさと酒出しやがれ！ 俺は酒を飲みに来てるだけなんだからな」

「はあ、わかったから、もう一杯だけ飲んだら、そろそろ帰った方が良いと思うがね。そうしてくれないと、こちらも治安部隊を呼ばなくてはならないからね」

ふと溜息を漏らして、再び厨房に戻る店主と入れ違いに、やはりこの町では見かけない男が近づいて、曾頓の肩を叩いて声をかける。

「曾頓、こんな所で何やってるんだ？ 灰人さんのお呼びがかかってるんだから、さっさと行くぞ」

「なんだ、お前か。俺が酒を飲んでいるのが見えないのか？」

「またお前の悪い癖か……だから、酒は程々にしとけて、灰人さんからも言われてるだろう？」

「ふん、そんな事知るか。灰人だろうが誰だろうが、俺の酒の邪魔は許さねえ」

「ちょっとすまないが、あんたこの人の知り合いかい？」

二人のやり取りを聞いていた店主が、唐黍酒の瓶を片手に会話に割り込んでくる。

「ああ。こいつ、酒癖が悪いものだから、迷惑かけたみたいだな」

「いや、こちらもしっかりとお金を払ってくれるお客さんには酒も出すけどね、ちょっとこのお客さんは足腰も立たないくらいに酔っ払って、心配していた所なのさ。で、もう一杯だけ飲んだらお帰りいただくと思っていた所なので、ちょうど良かった」

「そうか、すまないな。こいつは俺が連れて帰るから、最後の一杯は取り消してくれ」

「ふざけんな！ 俺の酒の邪魔するなら、相手がお前でも許さねえ！」

まだ酔いが回っていないのに、今帰されては堪らないとばかりに、曾頓がすかさず声を上げる。

「お前、まだそんな事いってるのか？ 灰人さんが待ってるんだから、さっさと帰るぞ」

「けっ、灰人がどうしたってんだ！ どいつもこいつも俺の邪魔ばっかしやがって」

「曾頓、幾ら酔ってるからって、灰人さんの事をそんな風に言うもんじゃない。それとも、お前が灰人さんの悪口を言ってるって、俺が直接灰人さんに言ってやろうか？」

「くっ……」

さすがにそこまで言われると、曾頓は押し黙ってしまうしかなかった。

幾ら曾頓が酔って意識が混濁していると言っても、まともに灰人と対決するだけの度胸は湧かなかった。

それだけ、曾頓にとって灰人の存在は絶対だったのだ。

「親父、騒がせて済まなかったな。こいつはもう帰るから。で、支払いは幾らだ？」

「えっと、米酒八杯で二圓四十銭と、唐黍酒六杯が一圓二十銭で、合計三圓六十銭だ」

「酒だけで三圓六十銭か……随分とまた飲んだな。釣りは迷惑料で取っといてくれ」

男は懐から一圓玉四枚を出して店主に渡すと、客席のテーブルに両肘をついて俯き、ぶつぶつと何事かを呟いている曾頓を抱え上げる。

「親父、ついでですまないが、桶に水汲んできてくれるか？」

男は店主にそういい残すと、曾頓の体を支えたまま、狭い店内に満員の客の波を掻き分けて入り口へと向かう。

その言葉に何となく男の意図を察した店主が、慌てて厨房から水を満タンにした桶を手を持ち、曾頓と男の後を追いかける。

「っざけんな！ 俺に酒飲ませねえつもりだろうが、そうは行くか！」

口先だけは勇ましい曾頓だが、強引に屋外へと連れ出す男になす術がなく、ただ意味もなく酔っ払いの戯言を延々と並べ立てている。

「すまないが、ちょっとどいてくれ」

男は曾頓を店頭連れ出すと、路地を行きかう人々に声をかけて注意を促してから、肩に抱えていた曾頓をいきなり突き放す。

不意に突き放されてよろよろとよろけて地面に座り込んでしまった曾頓の頭上に、容赦なく桶に満タンの水がぶちまけられた。

「クソッ、何しやがる！」

「少しは目が覚めたか？ 灰人さんのお呼びがかかっているんだから、さっさといくぞ」

「ふざけんな。俺に水なんかぶっ掛けやがって……」

「わざわざ出迎えに来てやったのにその言い草は何だ？ この店での事を残らず灰人さんに報告してもいいんだぞ」

「クッ……」

幾ら酔いが回って意識が混濁しているといっても、曾頓には灰人と本格的に反目するだけの度胸はなかった。

曾頓にとって、いや、東辺町から灰人に付き従ってきたならず者たちにとって、灰人はそれほどまでに絶対的な存在なのだ。

頭から水を浴びて、全身濡れ鼠となった曾頓は、軽く頭を振って雫を吹き飛ばすと、よろよろとよろめきながらも立ち上がった。

まだ酷く酔いが回って足元が覚束なかったが、周囲を遠巻きに囲う通行人の視線も気にせず、ただよろよろと男の後についていく。

それでも曾頓は歓楽街の人並みに揉まれて、時にはよろけたりこけたりしていたが、何とか歓楽街を抜け出して、大小様々な旅館が立ち並ぶ宿屋横丁へ向かった。

野平町には街道から幾つかの大きな路地が伸びていて、歓楽街は路地に沿って居酒屋や賭博場や売春宿が立ち並び、宿屋横丁は旅館が、そして食堂街には様々な種類の食堂がそれぞれ路地に沿って軒を連ねていた。

宿屋横丁の中でも、街道に近い旅館は比較的規模も大きくて宿代も高い高級旅館、そして街道から離れるに従って粗末な安宿という形の棲み分けがされていた。

曾頓達は人数の都合から三つの宿に分かれて逗留していたが、灰人の泊まっている宿は比較的街道から近い、高級といわれる部類に属していた。

曾頓が男に連れられて始めて入る宿は、見かけの作りといい、建物の大きさといい、曾頓の定宿とは格が違ったが、未だ酔いの抜けていない曾頓の目には、そういった周囲の光景は全く目に入らない。

男は宿の番頭の出迎えを尻目に、『宴の間』という看板のかかった部屋の前に立つ。

「曾頓。灰人さんを始め、みんなを散々待たせているんだから、さっさと来い」

酔いに任せた先程までの勢いとは打って変わって、すっかり大人しくなってしまった曾頓が時々よろけながらも辿り着くのを待って、男は部屋の扉を開けた。

二人を除いたならず者達は既に全員が集合し、早くも何事か話し合いを始めている様だった。

突然扉が開いた為、一旦全員の視線が二人に集中する。

「灰人さん、遅くなりまして。曾頓の奴、かなり酔いが回っていらしくて、少し手間取ってしまいました」

「ああ、そのようだな。しかし曾頓クン、幾ら昨日明日見クンにいい様にあしらわれたからといって、自棄酒はよくないな。今の我々には酒に溺れる様な資金の浪費は出来ないと、言っていたと思ったが」

「灰人さん……」

曾頓は灰人の嘲る様な、蔑む様な冷たく鋭い視線を浴びると、背筋に何か冷たいものが走って、一気に酔いが醒めていくように感じた。

灰人に対しては釈明の一言も通用しない事が予めわかっているので、何を言われようと黙って耐えるしかなかった。

「まあいい。本題に戻ろう。繰り返しになるが、全員が集まった所でもう一度説明しよう。不覚にも我々は明日見クンを取り逃がしてしまったが、それについてはボクにも責任の一端はあるのだから、この件についてはこれ以上蒸し返しても仕方あるまい。とはいえ、明日見クンが未だ野平町内に潜伏している可能性がある以上、どうしてももう一度明日見クンを手中にしたい。今、それぞれに調べさせていた内容の報告があった所だが、野平町内のどの旅館にも明日見クンが宿泊している形跡はない。しかし、先日呆六クンらは、明日見クンが見知らぬガキといるところを目撃し、昨日は曾頓クンが明日見クンにまたしても返り討ちにあった」

灰人の言葉に全員がにやりと意地悪な笑みを零し、下を向いて顔を歪めた曾頓に視線が注がれる。

しかし、灰人は単に事実を列挙しただけであり、また先程まで一人酔い潰れてみんなを待たせていた事もあって、曾頓は何も言い返す事が出来ずに、醜く歪んだ複雑な感情を押し留めるしかなかった。

「そこから考えると、明日見クンは多分、旅館以外のどこかに逗留しているのだろう。おそらく、呆六クンが目撃したという、明日見クンに同行していたガキの所で世話になってるの

だろうな。しかし、そうすると、野平町には土地勘のないボクたちが明日見クンの消息を掴むのは難しい。ましてや、曾頓クンの様に簡単に手を出して呆気なく返り討ちにあっては元も子もない」

灰人の言葉に、曾頓は奥歯を食いしばって唇をかみ締める。

なぜか今日の灰人は曾頓を悪し様に蔑むような言動が目立つ。

実際に曾頓が一人酒に溺れていた事は事実なのだから、今日ばかりは何を言われても甘んじて受けるしかない曾頓だったが、それでも今日の灰人は少し意地が悪いと感じていた。

「そこでだ。明日見クンを今度発見したら、気づかれぬ様に後をつけるのだ。そして、まずは明日見クンが紛れ込んでいる巣穴を炙り出す。呆六クンの話にある様に、明日見クンがガキと一緒にいるのだとすれば、直接明日見クンに手を出さなくとも、そのガキにひと仕事して貰ってもよいのだからな」

「つまり、そのガキを使って明日見を誘き出すという事ですか？」

「まあ、そういう事だ。もっとも、明日見クンの所在が明らかになれば、色々と手の打ちようもあると思うのだがな。状況によっては面白い事になるかも知れない」

「灰人さん、でも、今度はそう簡単に事が運ぶでしょうか？ 明日見もこちらの動きを警戒するでしょうから、一筋縄ではいかない気もするのですが……」

「だからこそ、ガキを使うのだよ。キミたちは明日見クンがなぜ『猫と鼠亭』に侵入したかを覚えているかね？ 何とか言うガキを、しかも少し世話になったからというだけの理由で、単身取り返しに来たのだよ。だからこそ、今明日見クンが世話になっているガキならば、幾らでも使い道があると思うのだよ」

「なるほど、明日見はそのガキを無視できないから、後はこちらの意のままと言うことですね？」

「そういう事だ。我々だって、いつまでもこの町に留まる訳には行かないのだから、事は早急に運ばなくてはならない。そうだな、後三日……三日して明日見クンの消息が掴めなければ、残念ながら明日見クンを諦めて先を急ぐしかないだろう。何としても後三日のうちに、明日見クンの消息を掴むのだ。わかったかね？ 曾頓クン」

＊

翌日、すっかり日も落ちてから、基経の丸太小屋には再び孤児の代表者達が一堂に会していた。

たとえ代表者とはいっても、彼らは未だ年端も行かぬ少年少女達に代わりはなかった為、本来ならば日のあるうちに会合を行っておくべきなのだが、『瑞巖院の住職の監視』や『住職に関する情報収集』に昼間の時間は出来るだけ割きたいという当人らの意向により、自由になる時間は日暮れ以降にしか取れなかったのだ。

ここは中原地帯の中では比較的治安の良い東晶共和国であるとはいっても、夜間の子供の一人歩きが無事に済むほど安定した世の中ではなかったから、かなり危険性の高い行動

ではあった。

しかし、明日見が敢えて各代表者に集合するよう要請したのは、それなりの理由もあった。

基経達は早めの夕食を終えると、三々五々訪れる代表者達を出迎え、案の定、逢蘭と子供達二人は隣室に移されて、全員が緊張した面持ちの中会合が始まった。

「今日は突然に、しかもこんな時間に呼び出してすまない。だが、明日見からみんなに伝える事があるのと、そろそろこれまでの調査結果を一度報告して、今後の方針について話し合った方がいいという判断で集まってもらった。みんな、これまでに集めた情報をメモした紙は持って来ているよな？」

まず基経が会合の主導権を握って一同に確認すると、それぞれが無言のまま頷く。

「今日は突然に呼び立ててしまって、ごめんなさい。私がみんなに集まってもらったのは、明日、町の情報屋という人に会いに行く事になっているのだけど、慶太の件と合わせて、寺院の住職についても何か訊きたい事があれば訊き出したいと思ったの。それで、こちらでは今どの程度の情報が集まっているのかを確認した上で、情報屋に会いたいと思ったのだけど、よいかしら？」

明日見の挨拶に続いて基経が後を引き継ぐ。

「……という事だ。で、まず俺から先に言うけど、今のところ住職に目立った動きは見られない。これは俺達が監視している午前中だけなのかも知れないが、朝食が終わる頃になるとほぼ毎日、住職はあの広い庭を一人で掃き掃除をしている。それだけだ。残念ながら、これ以上報告することはない……とはいっても、まだ調べ始めたばかりだから、そう簡単に動きがあるとは思えないのだけどな。天鵬の方はどうだ？」

「ああ、俺の方だけど、基本的には基経と似たようなものだ。普段は住職以外に人っ子一人いる気配がしねえ。ただし、そうだなあ……夕刻というにはまだ早いけど、日が傾きかける時分になると、毎日ではないみたいだけど、入れ替わり立ち代り町の店の連中が出入りしているようだ。俺が確認した限りでは、魚屋、穀物屋、野菜屋、雑貨屋もいたな。でも、食料を扱う店の連中ばかりが来ていた。みんな荷車で荷物を納めていたから、住職以外にもかなりの人が居る事は間違いないと思うぞ。あんなにたくさんの食料を一人で食える訳ないだろうし」

「と言う事は、天鵬さんの見かけた店の店主に聞き込みをかければ、寺院の内情についてもう少し詳しい事がわかりそうね。……とはいっても、安易に聞き込みをかけてよいものかどうか迷うところだけど」

「確かに明日見のいう通りだな。で、それ以外に人の出入りはなかったのか？」

「ああ、残念ながら、それ以外は基経と同じだ。まだ監視を始めたばかりってのもあるから、そのうち何か動きがあるかも知れないけどな」

「……そううまくいってくれればいいが。ところで、経巧達の方はどうなってるんだ？」

とりあえず寺院監視組の報告が終わると、基経はそのまま町内の聞き込み調査組に関心を向ける。

「そうしたら、まずこちらから報告するけど、とにかく住職は町の人とは殆ど接触した形跡がない。以前、住職に相談を持ち掛けた事があるという人の話を聞いたけど、何となくお座なりな対応で、その人も相談の途中で『これは駄目だ……』と諦めて帰ってきたそう。今の所は目立った交友関係もないみたいだ」

「あの住職が来てから一年近く経つのにか？ まあ、俺達から見ても付き合い難い人間なのは確かだが、町の連中も思いは皆同じという訳か」

「……という事みたいだな。もっとも、まだ聞き込みを始めたばかりだから、さっき天鵬が話していた、寺院に品物を納めている店の店主からは話を聞いてみる必要がありそうだけども」

「そうだな。そうしたら、日向の方はどうなっている？」

「こちらも、基本的には経巧と同じね。ただ、時々町役場の方が寺院を訪れているみたい。定期的なのかはわからないけど、これまでに何回か訪れた事があるそうよ。これは以前からだけど、寺院は町役場から補助金を受け取っているという話があるでしょう？ 本来なら町役場が行わなくてはならない筈の、孤児を預かって育てる業務を寺院に委託しているから、町役場がその為の委託料を払っているという話。私達が寺院を追い出された時だって、町役場に訴えても結局何にもしてくれなかったけど、もし町役場と寺院が何らかの目的で結託して私達を寺院から追い出したのだとしたら……って思うとね、町役場まで敵に回すのはちょっと荷が重い気がするのだけど」

「確かに俺達が寺院を追い出された当初から、町役場の対応はどこか妙だったからな。仮に住職が何らかの悪事を働いていて、町役場もそれに加担しているか、もしくは見逃しているとしたら……」

「……国そのものが住職の共犯で、私達だけで国を相手にしなくてはならない、かもね。そうでない事を願いたいけど」

基経の言葉を明日見が継ぐ。

「ええ。もちろんそう決まった訳ではないのだけど、いずれにしても、町役場はもしかしたら寺院の内情を一番良く知っている組織なのかも知れないって事なの。だから、本当は町役場の……寺院関係の担当者に直接接触出来れば良いのだけど、担当者の名前はわからないし、もしその担当者が住職と繋がりがあるとしたらと考えると、なかなか調査が進まなくて……」

「そうしたら、日向さんの言う寺院と町役場の関係については、私からも情報屋に探りを入れて見ましょう。それ以外に情報屋に聞いておいた方が良い事はある？」

明日見の言葉に全員が全員を見回すが、特に表立った反応は見られなかった。

やはり、まだ寺院の監視を始めてから間がないだけあって、寺院に関する有力な情報は殆ど集まっていないのだから、ある意味仕方がなかった。

それでも、町役場と住職の関係に焦点を合わせられただけでも大きな収穫だといえよう。

「とりあえずは、その程度か。情報屋にどの程度の情報が集まるのかはわからないけど、出来れば住職の過去とか、経歴についても知っておきたいな」

「そうね。そこから掴める物があるかもね」

明日見の言葉に基経が頷いて、今日話すべきことは話し終えたとばかりに一同を見回して会合を締める。

「とりあえず、今の時点で話すべき事はこの程度だ。みんなはこのまま引き続いて割り当てられた役目をこなしてくれ。明日見も情報屋の件はよろしく頼む。明日見の話し次第で新たな展開があったら、こちらからみんなに報告するから」

そうして孤児達はそれぞれの家路につき、残された基経達もそろそろ就寝の時刻に差し掛かっていた。

このところ、食後の僅かな余暇の時間は明日見が歴代の帝記から学んだ知識を元に、様々な時代の英雄達の話の聞かせてあげるのが半ば日課の様になっていたが、さすがに今日ばかりはそのような時間もとれないうちに眠気が襲ってきていた。

実際はまだそれ程遅い時刻でもなかったのだが、基経と三蔵が寺院の監視を行なうようになって以降、彼らの生活のリズムが基経と三蔵に合わせて早寝早起きになっていたから、特に二人の子供達は目尻に涙を浮かべながらあくびを漏らして、明日見が寝床につくのを待っている状況だった。

「明日見お姉ちゃん、遥采もう眠くなっちゃったから、早く一緒に寝ようよ」

遥采の催促に明日見は基経と逢蘭に目配せすると、一足先に遥采を抱えて寝床に入る。

相変わらず遥采はしがみつく様にして、寝床に横たわる明日見の懷に収まり、ようやく安心して眠れる場所に収まったとばかりに、程なく可愛らしい寝息を立て始めた。

明日見も自分の胸の中に蹲っている遥采を見つめながら、明日の情報屋との接触に思いを馳せていると、次第にその他の面々も相次いで寝床に引き上げてくる。

「明日見、なんか子供の世話を押し付けてるみたいで申し訳ない」

囁くように声をかけてきたのは基経だった。

「ううん。私だってこの子達が懐いてくれるのを結構楽しんでいるのだし、ここに居る間だけでも私が役立てることがあるのなら、それはそれでよいのだけど」

「でも、もし情報屋が奴隷商人についての有力情報を持っていたとしたら、明日見にはここに居る理由がなくなるんだな」

「そうね、でも、たとえ情報屋が有力情報を持っていたとしても、明日明後日にすぐ動かなくてはならないという状況にはならないと思うし、基経君達の件も気になるから、出来る限りは協力したいのだけど」

「いや、そんなに無理しなくたっていいよ。明日見が俺達に『今までの盗人を繰り返す生活では駄目だ』って、考え直すきっかけを与えてくれただけで感謝しているんだから。経巧達だって今までより生き生きしてやる気が漲っているって感じだし」

「それはさ、やっぱりみんなも寺院に戻って、今までの様な生活に戻りたがっているからだよ」

「まあな」

「さ、基経君は明日も朝が早いんだから、早く寝た方がいいよ」

「そうだな」

それから全員が床につき、闇夜の静寂に包まれた寝室に幾つかの寝息が時折耳元に漂ってくる中、明日見は評判の余り良くない情報屋との対面に思いを馳せ、また慶太の身の上を案じながらとうとうと眠気が押し寄せてきた矢先に、またしても心穏やかならざるあの気配を感じた。

「またお前か……いい加減に付きまとうのはやめて欲しいのだから」

明日見が声を潜めて、しかし鋭い語気で言い放つと、明日見の目の前に物の怪の見慣れた顔だけがぼんやりと浮かびあがった。

「おぬしの意地悪な性分もすっかり板についてしまって、わしは悲しいぞ」

「お前が私の寝入り端にばかり現れるからいけないのだろう。誰だって、うとうと眠気に襲われたところを、強引にお前のような物の怪に目覚めさせられれば、多少苛立つくらいは当たり前前の反応だとは思わないのか？」

「しかたがあるまいて。おぬしの顔を拝むには今くらいの時間しか取れないのだから。それとも、おぬしはわしが昼間に現れてこの子どもを驚かす方がよいというのか？」

「別にそんなことはいいないだろう。お前が永遠に私の目の前から姿を消してくればよいのではないか」

「また、そんな意地悪な事を……全く、年寄りはいたわるものとおぬしも教わったであろうが……」

「ふん。私を陥れようと粘着しているくせに、無害な年寄りを装ってもそう簡単に騙されるものか」

「まあ、世の中の道理がわからぬおぬしに嘆いてみたところで無意味じゃからな。それはそうと、とうとう情報屋とやらにまみえるようじゃの」

「それがどうした？」

「いや、きっとその情報屋からは色々な情報が手に入るであろうと、わざわざ教えてやる為に現れたのじゃよ」

「情報屋なのだから、色々な情報を持っても当たり前だろう？ その様な当たり前の事実はお前にわざわざ言われるまでもない」

「ほれほれ、そう邪険にしなくても良いではないか」

「そもそも、お前がこの様な時間に現れたのがいけないのだろう？」

「わしだって、おぬしに遠慮して、昨日だって大人しくしていたのじゃから、少しくらい相手をしてくれても良いではないか」

「お前の相手をする暇などない」

「本当におぬしは冷たいのう。まあよい。それこそ『ツンデレ』の本性なのじゃからの。わしはおぬしのツンデレは意外と好きじゃからの」

「お前はまたそうやって訳のわからない世迷言を並べ立てて、私を苛立たせるつもりか？」

「まあ、良いではないか。わしの趣味なのじゃから、おぬしにとやかく言われる筋合いではない。ところで、例のならず者達がまた良からぬ策謀を巡らせているようじゃから、せいぜ

い気をつけるのじゃな」

「ならず者って、灰人達のこと？」

「そういう名じゃったのう……ホルホル」

「策謀って、一体どんな？」

「それをいってしまっても、わしの愉しみも薄れてしまうからの。とはいえ、わしは他ならぬおぬしじゃからこそ、ここまで教えて警告するのじゃよ」

「ふん。そうやって人をからかって愉しんでいるだけの癖に……」

「それは心外じゃの。おぬしを気遣っているという気持ちに嘘はないのじゃからな。とはいえ、このままおぬしに見つめられては、うっかり喋ってしまいそうじゃから、そろそろ引き上げるとするか」

「ちょっと待って……」

明日見が引き止める声も聞かずに、物の怪は現れた時と同様に、室内の闇に紛れるようにして静かに去っていった。

情報屋についてはともかくとしても、明日見には『灰人達がまた良からぬ策謀を巡らせている』という物の怪の言葉が気にかかっていた。

慶太を奴隷商人に売り渡し、代峰老師の小屋を焼き払い、拳句には明日見をも怪しげな者どもに売り渡そうとした灰人のことだから、きっとどのような残酷な仕打ちも眉一つ動かさずに整然と実行に移すに違いない。

明日見の心のうちに密かな不安が芽生え、先ほどまでの眠気も呆気なくどこかに吹き飛ばされていた。

＊

明くる日の夕刻、明日見は再び歓楽街を訪れ、居酒屋や賭博場が所狭しと軒を連ねる路地の中程に居た。

かつて一度訪れた時にはまだ開店前だったからなのかも知れないが、大きな『大将』の文字を刻んだ看板が目立つ『居酒屋大将』は、かなりの人で込み合って熱気に包まれていた。

明日見が扉を開けると、酒の勢いに任せてバカ騒ぎする男達の発するざわめきや、様々な種類の酒や料理、それから一日の仕事でかいた汗の臭いなどが交ぜになって、明日見の五感を刺激する。

一瞬顔を背けて、眉根に皺を寄せたが、再び意を決すると、つかの間の宴に興ずる男達の間を縫って、奥の客席に立ち止まって客の相手をする店主の元へ向かう。

「けけっ、随分と可愛い姉ちゃんじゃねえか。俺と一緒に飲むか？」

「こんなところで男漁りか？」

明日見が、個々のテーブルについて酒盛りに明け暮れている男達の間をすり抜けているさなかにも、目ざとく明日見の姿を捉えた数人の男達からえげつない声がかかる。

この店は、明日見のような人間が訪れるに相応しい場所ではないと、前回訪れた時点で店

主から言われていたのだが、たとえ妙な妄想を浮かべる下種な男達の視線に晒されたとしても、情報屋に接触するという目的を成し遂げる為には我慢するしかない。

明日見は卑猥な掛け声をかける男どもに、無言のまま鋭い一瞥を投げると、そのまま店主の元に向かう。

店主は明日見の姿を認めるなり、壁際の一つだけ空いていた客席へと誘う。

「おお、あんた、また来たのか」

「ええ。ところで、情報屋は来てるの？」

「まあ、来てるっちゃあ来てるが、うちは居酒屋なんだから、もちろん飲みに来たんだろう？」

店主の言葉に、前回『居酒屋大将』を訪れた時の光景が脳裏に浮かんだ明日見は、迷わず断言する。

「葡萄酒をちょうだい」

「へい、お待ち」

既に予想していたとばかりに、店主は茶碗に葡萄酒を並々と注いで明日見の前に差し出す。

本当は、明日見にも葡萄酒を味わって飲みたいという気持ちもあったのだが、この店は明日見が長時間腰を落ち着けるには少々居心地が悪かった。

店主や店構えの問題ではなく、あくまでもこの店に出入りするなじみの客と明日見の反りが合いそうになかったからなのだが。

明日見は一刻も早く済ませるべき要件を終わらせて店を出たいと、その場に立ったまま葡萄酒を一気に飲み干すと、懐から十銭硬貨二枚を出してテーブルに置く。

「相変わらず飲みっぷりがいいねえ。ほら、あの壁際の男が情報屋だ」

店主の指し示す壁際のテーブルで一人酒を煽っていたのは、少々小柄だが、先日質屋に散々脅されたような『やんごとなき連中』には到底見えない、人の良ささえ表情に感じさせる男だった。

「ねえ、あなた、情報屋なんだって？」

明日見が男の向かい側の空いていた席に腰掛けるが、男は全く気にする気配がない。

頬や耳朶も赤らんで、既に相当酔っているといった風だった。

「んだと？ 人が気持ちよく酔っ払ってるってのに、邪魔すんなや」

まだそれ程遅い時間ではないのだが、やはり情報屋は相当酔っているようだ。

目が血走って眠たげにしているし、まともに呂律も回っていない。

「店主から聞いていると思うんだけど、知りたい情報があるの」

「けっ、見てわかんねえのか？ 俺様はお酒飲んで良い気分になっちゃってんの。今日は店仕舞いだから、明日出直してこいや」

せっかく今日まで情報屋が戻るのを待っていたというのに、このまま明日出直すのではまた一日を無駄に費やすことになってしまう。

奴隷商人の手の内にある慶太が、今頃どれ程の酷い仕打ちを受けているかと思うと、たと

えあと一日であっても無駄にする訳には行かなかった。

たった一日の差で救出が叶わなくなる可能性だってありうるのだ。

「ふざけないで！ 私は店主にだってちゃんと説明して、三日も待たされたんだから、出直して来いって言われて素直に引き下がる訳がないでしょう」

「そんなの知るか。とにかく今日は仕事なんかやってる気分じゃないんだから、そんなに情報が欲しいりゃまた明日こいや」

「あーあ、ったく、今日辺りはあんたが来るかも知れないから、あんまり飲むなよって、念を押しておいたんだけどな。まあ、見ての通りこの店は俺一人で切り盛りしている訳じゃないから、他の店員に酒を注文されれば勝手に飲んでしまえるし、俺もそいつのお守りばかりしてる訳にも行かないからな」

いつの間にか、明日見の傍らに店主が歩み寄ってきて、かなり酔いの回った情報屋を見下ろして呟いた。

「あんた、どうするね。こいつだったら大抵開店直後から店に居るから、明日もう一度出直すかい？」

「でも、こちらだって急いでいるし、三日も待ったんだから……」

「そうだろうな。だったら、また後で俺がこいつに文句言われるかも知れないが、あの手を使うか」

「あの手って？」

「ああ、この店の裏手に井戸があるから、水でも頭から被ってすっきりすれば、ちょっとはマシな状態になると思うんだがね」

「井戸水で目覚まして……」

「大丈夫だって。こいつは何度も食らってるから、少々ごねるかも知れないが、急ぐならそれが一番だろう。尤も、それでも使い物にならなかつたら、諦めて明日もう一度出直してもらうしかないがな」

明日見は一瞬迷った末、店主の勧めに応じて情報屋を店の裏手の井戸端に連れ出すことにした。

酒に溺れて既に眠気が襲っている情報屋を、明日見と店主が左右から肩を支えるようにして立ち上がらせ、そのまま店の厨房脇の通用口を抜けて屋外に出る。

そのまま井戸に背中を沿わせるようにして情報屋を座らせると、店主はそのまま再び店内へ戻っていった。

ふう……勘弁して欲しいと、明日見がひとつ大きなため息をつき、既に寢息を立て始めている情報屋を見下ろすと、意を決して井戸水を男の頭からぶっ掛けた。

「つつ、冷てえ。何しやがるんだ一体！」

男は顔中を流れる水飛沫を掌で拭って、明日見に向かって咎め立てる。

しかし、もしかしたら殴りかかれるかも知……と半ば覚悟を決めていただけに、予想外に大人し過ぎる情報屋の反応に少々拍子抜けした明日見だった。

「あなたの目を覚まさせるにはこれが一番良いって、ここの店主に教えてもらったんだか

ら、文句は店主に言うことね。どう、もう仕事できそう？ それとも、もう一度水を被ってみる？」

「……ったく、わかったよ。仕事すりゃぁいいんだろ。で、何を訊きたいってんだ？」

情報屋は井戸端で全身濡れ鼠のまま、半ば自棄になって両腕を組んでいた。

どうやら、明日見が一般的な女とは少々肌合いが違うと、情報屋ならではの独特の嗅覚で本能的に気づいたのだろうか。

「奴隷商人について、あなたが知っている事をどんなことでも良いから教えてくれない？」

「奴隷商人だって？ あんた、可愛い顔してそんな物騒な事聞いてどうするつもりだ？」

「いいから、知っている事を全部教えてちょうだい。情報屋はお客さんが必要とする情報を提供するのだから、客の事情をあれこれと詮索する必要はないでしょ」

「まぁ、そりゃそうだが、これでもあんたを心配してアドバイスしているつもりなんだがね。まぁいい。奴隷商人となると、こちらにも色々事情があるから、少々値が張ってもいいか？」

「幾らなの？」

「そうだな……野郎なら百圓くらい吹っかけたいところだが、あんたの可愛い顔に免じて五十圓でどうだ？」

百圓が五十圓になるなんて……明日見の頭に浮かんだのは、余りにも値付けの根拠が正しい加減な質屋の顔だった。

つまり、質屋が何となくその時の気分で商品の値段をつけているのと同じ様に、きっと情報屋も自分の情報に適正価格をつけている筈もなく、その時の気分や懐事情で呆気なく値段が変わってしまうのだろう。

だとすれば、相手の手の内を逆手にとって、少しでも値切った方が良いに決まっている。

そうでなくとも、五十圓といえは一般的に見ても結構な大金なのだから、そう簡単に支払える筈がない。

「そういつてもらえるのはありがたいけど、こちらは三日も待たされた上に、肝心のあなたが酔っ払っていたおかげで更に手間をかけさせられたのだから、その分を上乗せでオマケしてもらわないとね。今日の分はともかくとしても、三日も待たされたんだから、一日十圓として三十圓引きの二十圓ってところかしら」

「ち、ちょっと待てよ、それじゃあ余りにも……」

「そう。まだ酔っ払っているみたいだから、もう一度井戸水を被ってみる？」

「……わかったよ。でも、二十圓は安過ぎるから、せめて三十圓に……」

「二十五圓！」

明日見は、情報屋の機先を制して、大声ではなかったが鋭く言い放った。

予想外の明日見の押しの強さに面食らったのか、それとも当初の計画通り五十圓を荒稼ぎできなかった落胆からなのか、情報屋は不承不承といった表情は見せたものの、意外と簡単に明日見の要求を受け入れた。

「しょうがねえな。二十五圓で良いよ……ったく」

「儲かってよかったわね」

「参ったなあ。で、奴隷商人の何を知りたいんだ？」

「まず、この町や近辺に、最近奴隷商人が出入りしているという情報があるかどうか。それから、奴隷商人の組織について。あと、奴隷商人のアジトもね」

「ちょっと待った、奴隷商人のアジトって、まさかあんたが乗り込む気か？」

「それが必要なら、そうするかもね」

「ひょっとして、家族が奴隷商人に捕まったとか？」

「家族ではないけれど、似たようなものね。それよりも、教えてくれるの、くれないの？」

「わかったから、今から言うって。まず、奴隷商人がこの町に出入りしているという話は聞いた事がない。ただ、周辺の町には『奴隷商人を見かけた』という話もあるから、もしかしたら俺に情報が入っていないだけで、既にこの町にも出入りしている可能性はある。もし奴隷商人が出入りしているとしても、今のところは表立った動きを見せていないという事かもしれないな。幾らなんだって、この町で奴隷商人が奴隷狩りをやろうものなら、俺に情報が入らない訳がないだろう」

「そう。だったら、奴隷商人のアジトは？」

「俺も又聞きだから、はっきりした事は良くわからないが、首都近郊に奴隷商人のアジトがあるらしいって話は聞いたことがある。首都近郊なんてこの辺よりも余程治安対策がしっかりしているだろうから、何となく眉唾な予感もするけどな」

「あと、奴隷商人の組織については？」

「それが、奴隷商人なんて、いつの時代でも混乱期に自然発生するものだから、組織だった動きをするなんて通常ではちょっと考え辛いんだが、最近周囲の町に出没する奴隷商人はそういった従来のタイプとは違うらしい」

奴隷商人が組織だった動きをする事はない……そうだったかしら？

明日見はかつて学んだ帝記の記述を思い出しながら、奴隷商人について書かれた記録を思い出そうとしていた。

「異なるタイプって、どういう風に？」

「俺も詳しくは知らないが、どうも背後に大きな組織がついていて、そいつらが奴隷商人を組織しているらしいという噂がある。もともと奴隷商人なんてあくどい連中が手っ取り早く儲ける為に始めた裏家業だから、後ろ暗い過去を持つ素行の良くない連中が関わっているのは当然なんだが、そういう奴らともちょっと質が違うというか、格の違う大きな組織が関わっているんじゃないかって事だ。首都近郊に奴隷商人のアジトがあるって噂だって、背後に大きな組織があるからこそ首都近郊にあっても無事に居られるという話もある。つまり、奴隷商人って連中は、あんたみたいな普通の女の子が一人で関わって無事に居られる相手じゃないって事だ。悪い事は言わないから、奴隷商人にさらわれた奴のことは運が悪かったと思ってすっぱり諦めるんだな」

「なるほどね……心配してくれるのはありがたいけど、奴隷商人に関する情報ってそれだけなの？」

「ああ、そうけど？」

「そう？ 私も最初は色々と話してくれたような気がしたけど、どの情報も又聞きとか、はっきり知らないとか、そんな話ばかりで二十五圓も情報料をとるつもり？ それでは十圓の値打ちもある情報とは思えないけど」

「だから、ただでさえ奴隷商人なんて胡散臭い連中なのに、更に大きな力を持つ背後の組織があるかもしれないなら、それなりの情報を手に入れるには命を賭けなきゃならない。それ程難しいって事だ」

「それであなたは、私が騙しやすい普通の女だと高をくくって、命を賭けなくても得られる程度の曖昧な情報を、私に高額で売りつけようとした訳？」

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。確かに気持ちよく酔っていたところをいきなり水かけられてムッとしたけど、そんなつもりじゃ……」

「だったら、きっちり二十五圓分の情報を教えてくれるか、あなたが胡散臭いペテン師のレッテルを張られて情報屋家業を廃業するか、もしくは詐欺罪の現行犯でこのまま私と一緒に治安部隊に出頭するか、どれか一つを選びなさい」

明日見の、決して怒っているようではなかったが、静かな中にもはっきりと語気を強めて言い放った言葉に、情報屋は少々戸惑っているような、それでいてどこかしら脅えている様でもあった。

「わ、わかったよ。でも、奴隷商人について俺が知っているのはそれだけだ。……といってもあんたは納得しないだろうから、代わりに『こいつなら絶対に奴隷商人に関する詳しい情報を知ってる』って奴を紹介するから、それで勘弁してくれよ。俺だって変な噂立てられて情報屋としてやってられなくなったら困るし、ましてや治安部隊なんて冗談じゃない」

「そう。でも、その『奴隷商人に詳しい人』の情報が嘘だったらどうする？」

「そんなことするか！ こう見えても俺は情報屋だぞ」

「今、確信の持てない曖昧な情報を高値で売りつけようとした情報屋の言葉を、そのまま信じろといわれてもね……」

「そいつは俺にとって奴隷商人関連の情報源なんだから、情報屋が自分の情報源を明かすなんて並大抵じゃないって理解してもらえない」

「そういわれてもね……私が『情報屋』といわれる人と接触したのはこれが初めてなのだから、情報屋の事情なんて知らないし」

「まあ、とにかく聞いてくれよ。州境の杵柄（きねづか）町にある『居酒屋ほろ酔いの里』に居る情報屋を訪ねるといい。多分居酒屋の店主に尋ねれば教えてくれる筈だ。……そうだ、今紙を持っているか？」

情報屋の求めに応じて、明日見は背中に背負った布袋からメモ紙と鉛筆を取り出して渡すと、情報屋は一見訳のわからない絵のような、何かの記号のようなものを紙に書いて明日見に返した。

「この紙を杵柄町の情報屋に見せれば、あんたが俺からの紹介だって事が分かるようになってるから、少々ヤバイ事でも教えてくれると思う。……頼むから、これで勘弁してくれよ」

「そうね。私は奴隷商人に関する確実な情報が手に入ればそれで構わないのだけど、もし、

これがまたペテンだったら、もう一度戻ってくるからね。それから、私を騙そうとしたのだから、もう一つ聞かせてちょうだい」

「……ん、ああ。何を？」

「町外れに寺院があるでしょう？ あそこの住職について聞きたいの。余り良くない噂を聞くけど、実際はどうなのか」

「ああ、今度は住職か。あの住職はな、以前は首都近郊の寺院にいたらしいんだが、何かの悪事に手を染めて、この町に左遷されてきたらしいな。一年近く前になるけど、前の住職が病気で急逝した事もあって、形としてはその後任という扱いになっている」

「その、悪事というのは？」

「俺が知る限りでは、金に絡む不祥事だったらしいけど、詳しい所までは分からない。まあ、いずれにしても住職をやるには問題の多い人物なのだろうな」

「そう。住職と町役場の親密な関係も噂されているらしいけど」

「誰がそんな噂話を流したんだ？ 町役場だって寺院の扱いには苦労しているらしいぞ。でも、もし住職と町役場の間に何らかの癒着があるとすれば、寺院の担当職員レベルならなはいとはいえないけどな」

「そう。住職と親密な関係がありそうな、町役場の職員の名前はわからない？」

「いや、わからないけど、寺院担当の職員だったら、町役場で簡単に照会出来る筈だから、その中の誰かって事だろうな」

「そう、ありがとう」

明日見は、あらかた情報屋から聞きだすべき情報は聞きだしたと、懷から十圓札二枚と一圓硬貨五枚を出して無言のまま情報屋に手渡すと、店の通用口へ向かう。

ちょうど通用口に足をかけたとき、背後でよろよろと立ち上がった情報屋が、不意に明日見に声をかけた。

「そういえば、毎月って訳ではないらしいけど、月初に見慣れない荷車が寺院に出入りしているらしい。ちょうど明日から月が変わるだろう？ あんたが住職の何を探っているのかは知らないが、あの住職にも色々と裏があるらしいから、こんな情報でも何かの足しになるかもしれないな」

＊

翌日、明日見は基経と三蔵に同行して、寺院の監視に付き添っていた。

昨日の情報屋との接触の際の言葉が気になった為、今日、あるいはここ二～三日のうちに寺院の状況に何らかの変化が現れるかもしれないと思ったからだ。

尤も、当の情報屋自体にどこことなく信用の置けない部分はあったのだが、それでも今日か、遅くとも二～三日の間に正否の結果が出るのだとすれば、たとえ無駄足になったとしても、取り立てて大きな痛手を負う訳ではない。

それに、幾ら信憑性に問題があるとは言っても、一応玄人の情報屋がもたらした情報なの

だから、念の為に確認してみる値打ちがあると明日見は感じていた。

もし、情報屋の情報通りに寺院の側に何らかの動きがあれば、すぐにでも明日見がその場で対応できるのだから。

当面の寺院の監視は、基本的にはこれまで通り基経と三蔵にゆだねて、明日見は突発時に供えて寺院の壁際に潜んで待機していた。

まずは三蔵が先にいつもの木によじ登って寺院の監視役につき、約一刻（約一時間）毎に交代するという、基経と三蔵の間での暗黙のルールが既に出来上がっていた。

三蔵に見張り役を任せている間、基経は明日見と雑談を交わしながら、交代までの半刻をやり過ごす。

「しかし、情報屋が言っていた見慣れない荷車って、一体なんだろうな？ 俺達、荷車は荷車だって、今まで余り気にしてこなかったけど」

「でも、基経君達が盗人をしていた時には、旅人というよりはむしろ荷車を襲っていたのでしょう？」

「そりゃ、そうだけど、動いている荷車を狙っても逃げられたら終わりだし、駝でも使わないと動いている荷車を襲うのは難しいから、もっぱら駅に止まった荷車に潜り込んで荷物を失敬していたんだ。だから、その見慣れない荷車が駅に止まらないで直接町の外と寺院を往復していたら、俺達は絶対に気づかないだろうな」

大抵どの町にも、街道に隣接する町の入り口付近に『駅』と呼ばれる施設が作られていた。

町に住む者で荷車を所有する者は、それぞれが自宅に併設するか別途荷車を保管する土地を保有していたが、遠方からの荷物を運ぶ配送業者とか、荷車を仕立てて旅をする旅行者は、宿に泊まる時には荷車を駅に預ける必要がある。

町の旅館街には、宿泊客の荷車を停めて置ける場所がないのが通例だったし、町内の路地や街道沿いに野放図に荷車を停止されて、交通に障害が出ないようにと定められた、中原各州共通の決め事でもあった。

荷車の不法駐車には結構な額の罰金が科せられたから、今では荷物の運搬やその他、特に治安部隊の許可を得たという理由でもない限り、荷車を違法駐車する者は殆ど居なかった。

旅人は旅館に宿泊し、荷車は駅に預け、荷車を牽引する駝や牛は駅に隣接する牧場に世話を任せるのが常だった。

だからこそ、基経達は旅行者や配送業者の荷車が集積する駅で盗人を働く機会が多かったのだろう。

「駅に停めた荷車を狙っていたんだったら、私が灰人達に捕まった時に乗せられていた荷車を狙ったのは、偶然だったと言うの？」

「そうだな。普段はあんなところに行かないし、あんなところに荷車が止まっていることも滅多にないから、すごい偶然だな」

「そっか。でも、それだったら、これまでも見慣れない荷車が度々寺院を訪れていた可能性は否定できないし、今日その荷車が寺院に来る可能性もあるんだ」

「そうだよな。でも、もしその荷車が来たら、どうする？」

「そうね。荷車に乗っている相手が誰かという事もあるし、荷車が寺院に来る目的によっても対応を変えなくてはならないから、今からどうするとは決められないけど、まず荷車の後を追う事にはなるでしょうね」

「後を追うといっても、その荷車がそのまま町の外に出ていったら、それでもずっと追いかけて行く訳にもいかないだろう？」

「だったら、町外れのどこかででも荷車を襲撃してみる？」

悪戯っぽく笑いかける明日見の表情に、基経はしばし呆気にとられた。

「襲撃するって言ったって……」

「ふふっ。冗談よ。私一人なら問題ないけど、仮に襲撃するにしても、予め相手の素性を知ってからでないとね。もし住職が全く悪事に関わっていなかったとしたら、もしくは、荷車は住職の悪事とは全く関わりがなかったら、逆にこちらが治安部隊に捕らえられてしまいかねないのだからね」

「なんだ、冗談か。明日見がそんな事言うとは思わなかったぞ。それにしても、だったら益々荷車の後をつけて素性を暴く必要がありそうだな」

「もしくは、寺院の側に、荷車の持ち主の素性や、荷車が来る目的を知る手がかりがあるとかね」

「それって、つまり寺院に潜入するって事？」

「そう。それも私一人なら余程うまくやってのける自信はあるのだけど、荷車を追うのと寺院に潜入するのを、両方同時にはこなせないからね。それに、寺院に潜入するにしても、万が一住職に見つかってしまった場合を考えると、容易に潜入する訳にもいかないでしょ？」

「だな」

その様なことを延々と喋りながら、明日見と基経は、孤児達がこれまでに得た住職に関する情報と、明日見が情報屋から得た情報から想定されるあらゆる可能性について考え、それぞれの場合についてどうすべきかという対応策を一つ一つ検討していった。

しかし、いずれにしてもまず見慣れない荷車の正体と目的を突き止めない限りは、どうにも身動きが取れないという結論に至った。

そうこうしているうちに一刻（約一時間）が経過し、基経と三蔵が見張り役を交代していた。

今から思えば、明日見は三蔵と二人きりでまともに会話を交わすのは、これが初めてだった。

「三蔵君、本当に頑張ってるよね。こういったら怒られちゃうかも知れないけど、実はすぐに根をあげるんじゃないかって、少し心配していたんだけど」

「そんな、酷いよ！ そりゃあ、俺だって一人だったら嫌になっちゃうかも知れないけど、兄ちゃんが頑張ってるんだから、俺だって頑張らないと」

「そっか。そうだよね」

「ところでさ、明日見が言ってた見慣れない荷車って、本当に来るのかなぁ？」

「そうねえ……さっきも基経君と話していたんだけど、来る可能性はかなり高いような気

がするの。ただ、その荷車の正体とか、寺院に来る目的が分からないと、私たちもどうして良いかわからないでしょ？」

「そうか！ 幾ら荷車が来たって、それが別に住職が悪いことをしている証拠にならないと意味がないんだ」

「そういう事ね。確かに住職には如何わしい点が一杯ある様に見えるけど、はっきりした悪事の証拠を掴まないと、どうしようもないからね。でも、その点は私が昨日情報屋から聞きだした住職の経歴に照らして見ても、かなり期待は持てそうだと思うよ。なんといっても、他の寺院で悪い事をしたために、罰として田舎のこの町の寺院に飛ばされたみたいだからね」

「でも、そのおかげで俺達が寺院を追い出されちゃったんだから、運が悪いって言うか、『なんで俺達がそんな目にあわなきゃいけないの？』って気はする」

「そうね。でも、こんな言い方がいいのかどうかは判らないけど、そのおかげで私は基経君に助けられたし、三蔵君達に会えたのだから、全く悪い事ばかりではないと思う。それに、悪い事の後にはきっと良い事が待っているよ」

「そうだといいいけど……。ねえ、俺達、本当に寺院に戻れるのかなあ？」

「大丈夫、きっと戻れるよ。その為に三蔵君だって、基経君だって、他のみんなだって頑張っているのだから。それにね、この前にも延尊君や遥采ちゃんと一緒に『もっくぞっくの木』にお祈りしてきたんだよ。みんなで『また寺院に戻れますように』ってお祈りしてきたんだから、きっと叶うと思うよ」

「『もっくぞっくの木』って、あの、寺院にあった絵本の？ 俺も昔逢蘭姉ちゃんに読んでもらったよ。あの時は俺も信じてたけど、今は『あんなの気休めだ』としか思えないんだけど、明日見はそういうの信じてるの？」

「『もっくぞっくの木』については良くわからないけれど、何かを強く信じる思いは大切だよ。ただ、信じるだけではなくて、強く信じることと、努力することだよ。もちろん、それでも叶わない事もたまにはあるけど、ちゃんと信じる思いが正しくて、しっかりそれに伴う努力もしていれば、きっと願いは叶う。どうしても願いが叶わない時は、きっとどこかが間違っているんだよ。願いの方向性が違っているのか、努力の方法が間違っているのだと思う。私だって『寺院に戻りたい』という三蔵君の思いは正しいと思うし、こうし今も努力しているのだから、きっと願いは叶うよ」

「うーん、そういわれてみると、そんな気もするね。そうだよ。俺だけじゃなくて、みんなが願っているんだもんね」

「そうだよ。みんなの思いを代表して三蔵君達が頑張っているのだから、その思いはとても強い筈だよ」

「でも、もし寺院に戻れる事になったら、明日見はどうするの？」

「そうね、これはまだ誰にも話していない……というより、話す暇がなかったから、三蔵君に話すのが初めてになるのだけど、実は、昨日情報屋から奴隷商人に関する情報を手に入れて、州境の杵柄町に行かなくてはならなくなったの。だから、三蔵君達が寺院に戻る時には、

私も旅立たなくてはならないの」

「そうか。明日見が突然やってきて、せっかく延尊や遥采が喜んでいたのに、ちょっと残念だね。でも、明日見が探している人は、明日見にとってとても大切な人なんだよね？」

「とてもお世話になった人の子だし、その子もとってもいい子だから、三蔵君達ともきっといい友達になれると思う。彼を救出したら、今度は寺院でみんなと再会できるよ」

「そっか。明日見が居なくなっちゃうのは少し寂しい気もするけど、その子を早く救出すれば、またすぐ明日見も会いに来てくれるんだよね。だったら、きっと早く旅に出てもらった方がいいよね」

「そうね。でも、その為にはまず三蔵君達が寺院に戻らないと、気になって旅に出るわけにも行かないでしょ？」

その様な話を、明日見と三蔵は延々と続けている間に、再び一刻（約一時間）の時間が過ぎ、再度基経と三蔵が見張り番を交代する。

一刻の間木の上でじっと寺院の様子を監視しているだけでも、かなりの疲労がたまるものだ。

基経は、まだ自分の当番を一度こなしたただけだというのに、少々疲れてウンザリした表情を浮かべている。

「へえ、どうでもいいけど、ここまで全く動きがないってのも、監視する方にとっては退屈でしょうがねえな」

「ふふっ。もしかしたら今日中にも何か動きがあるかも知れないんだから、そんな事を言っているのも今のうちだけだったりしてね」

「俺って、元々部屋でお勉強するよりも外で遊んでた方が性に合ってる口だから、どうも退屈なのはな……」

そう基経が零した矢先に、最初の変化があった事を三蔵が発見した。

「兄ちゃん、寺院に荷車が入ってきたよ」

「まじかよ！」

三蔵の声に慌てた基経に続いて、明日見も木に登って荷車を確認する。

それが、情報屋の言っていた見慣れない荷車と同じものなのかは良くわからないが、一般的な荷車と違って、四方の壁から屋根までも全面板張りで、中の様子がまるで分からなかった。

普通、荷車といえば大抵屋根がついていないか、たとえ屋根がついていたとしても布製の幌をつけているのが大半だったから、荷車の全体を木の板で覆っているのは非常に珍しかったのだ。

また、荷車の御者は普通の配送業者の人間に見えたが、荷車の屋根から御者の頭上に伸びるひさしに遮られて、その位置から御者の顔を確認する事は出来ない。

「どうやら、本堂の裏側に回るみたいだな」

「基経君、寺院の裏側に回ってみましょう」

明日見はそういうと一足先に木から降りて、寺院の壁に沿って移動を開始していた。

「ちょっと……。っじゃあ、俺達は寺院の背後に回るから、三蔵はこのままここで監視を続けてくれ。荷車の様子を確認したらすぐに戻ってくるからな」

言うなり基経が慌てて木から滑り降りると、明日見の後を追って寺院の壁伝いに走った。

＊

明日見より一步遅れて基経が木の枝に取り付いて、寺院の敷地とを隔てる塀の向こう側を覗き込むと、その位置からだちょうど本殿の裏に荷車が回ってきた所が一望できた。

荷車はそのまま、本殿の手前脇の建物に沿う様に停止し、御者が荷車から降りると、時宜良く寺院内から出迎えた男と何事かを話している。

「あの男が住職だ」

明日見と住職との間にはかなりの距離が開いていたので、住職の細かな表情の変化まで捉えることはできなかったが、一見して『いかにも小ざかしそうな男だ』と感じた。

これまでの基経達からの話や、様々な噂などを総合して思い描いていたイメージからは少々かけ離れていて、住職の顔つきからはいかにも悪事を働きそうな印象は受けなかった。

しかし、一般的に住職足るべき人物には必須である筈の『人間らしさ』や『慈愛』といった資質とも程遠く感じる。

パッと見善人面の涼しい顔をしていながら、その実裏ではどのような悪事に手を染めていてもおかしくはない……といった酷薄さも兼ね備えているように見えた。

「ちょっと離れているから良くはわからないけれど、確かに悪事を働いていてもおかしくはない……という感じね。根っからの悪人とはちょっと違うみたいだけど、とても冷酷に見える」

「だろ？ 俺、一目見た時からあの住職は気に食わなかったんだ。きっと、話してみればもっと嫌な奴だって事がすぐ分かると思うぞ」

「そう？ まあ、そういう人の印象というものは、人それぞれに感じ方が違うし、私が実際に話してみなければそこまでの判断はできないけれど……」

「そりゃ、そうだけどさ。それにしても、あの二人はさっきから何話しているんだろうな？」

「基経君は、あの御者には見覚えがないんだ……」

「うん、始めて見るな。しかし、それにしても二人とも結構親しげに話しているって感じだし、少なくとも初対面ではないんだろうな」

「そうね。さすがにこれだけ距離が離れていると、二人の会話の内容が聞こえないから、ちょっと残念な気もするけど」

明日見と基経の視線の先では、二人は相変わらず何事かを話しているようだったが、ふと御者が荷車の後方へ回り、観音開きになっている荷車の扉を開け放っていた。

一方、住職は荷車の傍らに建つ、蔵のような造りの大きく頑丈な建物の扉の前で何事かをしているようだった。

「きっと、住職は鍵を開けているんだろうけど、あんな所に何の用があるんだろうな？」

「あの建物は、一体何なの？」

「俺も入ったことはないから良くわからないんだけど、前の住職は物置小屋代わりに使っていたみたいだな」

「物置小屋……ね」

明日見と基経の視線が注がれる中、住職と御者の二人は、扉を開け放った荷車を放置したまま、物置小屋らしき蔵の奥に消えていった。

「明日見、あいつらあんな所に何しに入ったんだろう？」

「そうね……今はまだ荷車には何も入っていない様だから、多分あの物置小屋だか蔵だかから何かを運び出すのでしょうかね」

「運び出すって、何を？」

「さあ。それは基経君の方が余程見当がつくのではないかと思うけど、いずれにしても、もうしばらくこのまま監視していれば分かるでしょ？」

「でもさ、さっきも言ったけど、俺はあの建物の中に入った事はないし、前の住職が不要になったガラクタとか、壊れた物とかを時々仕舞い込んでいたから、何となく『ただの物置小屋なんだろうな』って思っていただけなんだ。それでも、怪しい荷車からわざわざ運び出すような物があの中に入っているとは思えないけど……」

「幾ら前の住職が物置小屋代わりに使っていたとしても、基経君が実際に中へ入った訳ではないのなら、あの蔵の中に何が入っているのかは分からないのだし、もしかしたら今の住職は別の目的であの蔵を利用しているのかもしれないでしょ？ まあ、いずれにしてももうすぐ住職か御者が何かを抱えて出てくるのだから、もうしばらく見ていましょう」

明日見と基経はそのまま木の上で息を潜めて、蔵の中に消えた二人の動向をあれこれと思い巡らせながら、黙々と待ち続けた。

しかし、そのまま時間がしばらく経過しても、二人は一向に蔵から姿を表す気配を見せない。

そのまま、荷車が寺院に入ってから半刻（約三十分）が経過した頃、基経は遂にいたたまれずに、明日見にこう切り出した。

「明日見、ちょっと様子を見に行こうか？ 幾らなんだってちょっと時間がかかり過ぎると……」

「待って。今下手に寺院に潜入して、仮に住職や御者にでも見つかってしまったら、私達が盗人扱いされて治安部隊に突き出されても文句の言えない状況になるし、住職だってそれ以降身辺を警戒するようになるだろうから、私達の今までの労力が全て無駄になってしまうのだからね。それに、もう少し待っていれば住職も御者も蔵から出てくるのだから、そう焦らないで」

「でも、こんなに長い間蔵から出てこないなんてどう考えても変だし、もしかしたら、今蔵の中で住職の悪事を決定付ける何かが起こっているのかもしれないんだから、この好機をモノにしないと、次はいつ……」

「だから、落ち着いて。そうやって焦って、住職にこちらの監視活動が発覚してしまったら、

それこそ永久に住職の弱点を見つけるなんて不可能になるかもしれない。そうなれば基経君達だって、このまま二度と寺院に戻ることは叶わなくなるのかもしれないのだからね。今は落ち着いて、慎重の上にも慎重を心がけないと……」

「そんな事言たって……」

「基経君の気持ちは分からなくはないけれど、だからこそ慎重にするべきなの。もしどうしても我慢ができないというのなら、基経君には今すぐ三蔵君と交代して、表側の監視に代わってもらおうか？」

「……わかったよ。もう少し様子を見よう」

「うん、それでいいの。もう少し待っていれば、必ず向こう側から動きがある筈だから」明日見はそう言葉を切って、再び蔵の入り口に注意を促すと、程なく御者の姿が現れた。しかし、御者は手ぶらのままで、荷車の扉の脇に立ったまま蔵の入口の方に注意を向けている。

「どう？ 御者は何も持っていないようだけど、住職はきっと何かを持って現れるのではないかしら」

更に引き続いて、蔵の戸口には新たな変化がもたらされたが、明日見の当初の予想からは少々かけ離れた、意外なモノが出現した。

「あれは……子供が三人出てきたみたいだけど、基経君には見覚えがある？」

「いや、俺の知らない顔だな……ちょっと待った、あの、三番目に出てきた奴は、俺達が寺院にいる頃からずっと一緒だった奴だけど……一体何があったんだ？」

蔵の戸口には、相次いで現れた三人の子供の後について、すぐに住職の顔も現れた。

基経が知っているという男の子が一人と、二人の女の子の合計三人が、予めそうする事が当然だといった風に、傍らの御者が見守る中肅々と荷車の中に乗り込んでいく。

しかし、子供達の表情はどこかしら虚ろで、半ば夢見心地といった風に見える。

一方、住職の方はと言えば、蔵の施錠を『これでもか』という程何度も念入りに確認していた。

「あいつら、自分から荷車に乗り込んでいるように見えるけど、一体どこへ行く気なんだろう？」

「……まさかとは思うのだけど、あの子達、もしかしたら薬を盛られているのではないかしら」

「薬って？」

「ほら、子供達の表情が何となく朦朧としていて、半分夢見心地って感じだし、動作がもっさりとしていて、いかにも『心ここにあらず』って感じでしょう？ 薬草の中には、あの子達のように人の意識を朦朧とさせて、自分の意のままに操る効能を持つ物があるの。私は専門ではないから、詳しい調合方法までは知らないけれども、かつてお医者様の数が少なかった頃には、寺院が簡単な怪我や病気の治療も行っていたのだから、住職がそういった薬品の調合法に詳しくても不思議ではないでしょう？」

「そんな薬があるんだ……。でも、住職達はそんな怪しい薬を使ってあの子達をどこへ連

れて行くんだろう？」

「ごめん、今、ふと思い立ったんだけど、もしあの御者が奴隷商人だったら？」

「奴隷商人って……」

「つまり、住職が寺院にいる孤児達を奴隷商人に売り渡していたとしたらどう？ 元々あの住職には金にまつわる黒い噂が付きまわっていたようだから、金の為に奴隷商人に孤児達を売り飛ばしていたのかもしれないし、可能性って敢えて断って言えば、元から住職は奴隷商人の組織の一味だったという事も考えられなくはない。とにかく、住職は奴隷商人に売れそうな子供を選んで寺院に隔離しておいて、それ以外と判断された基経君達は邪魔者として全員放逐されたのだと考えたら、住職にまつわる全ての疑惑の辻褄が合うとは思わない？」

「明日見、それ、すげーよ！ そうなると、俺達が寺院を追いだされた時、そのまま寺院に残されていた連中がいた理由もはっきりするし、それ以外に見覚えのない子供達がいたのは、俺達が追い出された後に住職が奴隷として売り渡す目的でどこかからかき集めた子供達……ってどこか」

「ええ。もし、寺院の住職が孤児達を奴隷商人に売り渡していたなんて事が表沙汰になれば、住職は間違いなく失職するでしょうし、犯罪者として然るべき罪を償うことになるでしょうね」

「そうなれば、俺達もあの住職の顔を二度と見なくて済むし、大手を振って寺院に戻れる」

「でも、まだ喜ぶのは早いかもね。あの御者が奴隷商人だと決まった訳ではないのだから、もっと確実な証拠を掴まなくては、住職にだって御者にだってうまく言い逃れされるかもしれない。少なくとも住職が犯罪を犯すなんて滅多にない事なのだから、誰もが納得するような明確な証拠が必要なの」

明日見と基経は、互いに住職の秘密に関する様々な想像を巡らせているうちに、荷車の扉はいつの間にか閉じられ、そのまま御者と住職は二言、三言言葉を交わして、何か小箱のような物をやり取りすると、御者がそのまま荷車に乗り込んだ。

「基経君、一度三蔵君のところへ戻るよ」

「ああ」

さすがに幼少期からの長年に渡る不似の山の『天元堂』での修練の成果故なのか、明日見は基経の返事を聞くまでもなく、一足先に木をスルスルと音もなく降りて、既に三蔵の元へ向けて走り出していた。

基経は明日見の余りの手際よさ、素早さに一瞬呆気にとられてしまったが、慌てて小走りで明日見の後を追いかけた。

基経が再び明日見の姿を確認した時には、既に三蔵の待つ木によじ登っているところだった。

——ったく、明日見は武術やってるとか言っていたけど、なんて素早いんだ。

遅れて基経が明日見達の待つ木の上によじ登ると、四頭の駝に牽引された荷車はヨロヨロと寺院の参門に差し掛かるところだった。

「……いい？ そうしたら、基経君は御者に見つからないように、あの荷車を追ってくれる？ もし荷車がそのまま街中に入るようだったら、治安部隊をうまく利用して足止めしてもらいたいの」

「でも、俺だって治安部隊には目をつけられてるし、足止めって言ったってどうやって？」

「そりゃ、基経君が治安部隊に追われている事は分かっているけど、あの荷車が奴隷商人かもという話になれば、治安部隊だって荷車を放っては置かないだろうし、しかも荷車の中に三人の子供が入っているのだから、治安部隊がそれを見つければ『ますます怪しい』という話になるでしょう？」

「そ、そりゃあ、そうだよな」

「基経君達が盗人をしていたのは事実なんだから、いずれにしてもいつかはその罪を償わなくてはならないのだけど、私も住職と奴隷商人の繋がりを証明する物を手に入れたらすぐに後を追うから。そうすれば治安部隊だって情状を考えてくれるかもしれないし、それが基経君達の犯した罪を軽減する方法でもあるの。とにかく、私が後を追うまでの間だけ、治安部隊をうまく使って荷車を足止めしてくれれば、後は私が何とかするから、信じてくれる？」

「……わかった。でも、もし荷車が街中を通らなかったらどうする？」

「その時は、残念だけど危険だから引き上げてきてくれる？」

「でも、滅多にない好機かもしれないのに……」

「相手は奴隷商人かもしれないんだって事を忘れないで。もし見つかってしまったら、基経君も奴隷商人に連れて行かれてしまうかもしれないし、殺されてしまうかもしれないんだから、奴隷商人はそれだけ危険な相手だって事だけは忘れないで」

「わかったよ。じゃあ、明日見はいよいよ寺院に潜入するんだな」

「ええ。今のままでも状況証拠はかなりクロっぽいんだけど、幾ら怪しいといっても相手は寺院の住職なんだから、出来る限り確信の持てる証拠を手に入れないと、治安部隊や町役場に信用させるには不足かもしれないから。それから、もし出来れば、その後住職を拘束するかも」

「一人でか？」

「当然でしょ？ 私一人の方が余程動きやすいのだから。さあ、そうしたら荷車の方は任せるから、急いで」

明日見の声に無言で頷いた基経は、そのまま木から滑り降りると荷車を追って木々の間に姿を消した。

続いて、明日見は傍らの三蔵に向き直る。

三蔵にもやってもらわなくてはならない事があるのだ。

「さて、三蔵君には、今から天鵬君や経巧君、日向さんにこの事態を連絡して欲しいの」

「うん、わかった」

「それから、こちらと、基経君の方にも一人応援が回るように手配して欲しいのだけど…」

「わかったよ。その間に明日見は寺院に忍び込むんだね。だったら、天鵬兄ちゃん達を連れてきたら、その後はどうしたらいい？」

「そうね。私も実際に寺院の中に忍び込んで見なくては、その後どうすればよいかは判断がつかないし、三蔵君達が安易に寺院に入るのは危険が伴うかもしれないから、とりあえずはこの木の根元辺りに隠れていてくれるかな？ それから、基経君の応援に向かう人には、治安部隊への対応をくれぐれも気をつけるように伝えてくれる？」

「そうだね、分かったよ」

そう答えて木から滑り降り、微かな木の葉の囁きを残しながら木立の影に消える三蔵を見送ると、明日見は再び目前に整然と立ち並ぶ木製の塀の向こうを仰ぎ見る。

「さあ、二人を送り出したことだし、私も自分のやるべきことをやらなければ……」

そのまま音もなく飛び上がって寺院の塀に取り付くと、明日見は住職の動向に注意を払いつつ塀の向こう側に消えた。

＊

「さて、まずは何から手をつけるか、なのだけど……」

基経と三蔵にそれぞれの役割を伝え、相次いで送り出した明日見は、寺院の社殿脇の植え込みの陰に身を沈めたまま、今後の行動の方針を練っていた。

明日見がこれから行うべきことは、大まかには以下の三点が挙げられる。

1. 先程の荷車が奴隷商人であり、住職と奴隷商人の間にただならぬ関係があるという確固たる証拠を手に入れる事。
2. 住職と奴隷商人の関係を示す証拠が発見されたら、住職を拘束して治安部隊に引き渡す事。
3. 先程荷車に乗せられた三人以外にも子供達が拘束されているかどうかを確認し、救出する事。

現時点で考えられるのはこの程度だろうか。

しかし、その三点のうち、どれを優先させるのかといえ、やはり最初の、住職が奴隷商人と怪しげな取引をしているという確かな証拠を掴む事だろう。

なぜならば、確たる証拠もなしにいきなり住職を拘束しても、住職が自らの罪を簡単に認めるとは限らないし、そうなればこちらが逆に寺院への不法侵入、及び、住職に対する暴行の罪を問われて、犯罪者として咎められてしまう。

また、寺院に留め置かれている子供達は、住職に何らかの方法で手懐けられている可能性があったし、人の精神に作用する薬草で意識を操作されているかもしれないから、明日見が安易に乗り込むのは逆に危険だった。

だからこそ、第一に住職が奴隷商人とただならぬ関係にあるという証拠を手に入れて、住職を拘束する為の正当性を先に確保しておきたかったのだ。

「証拠といえば……そうね、もし住職が奴隷商人に孤児達を売り払っているのだとしたら、

必ず金銭の授受が発生する筈だから、後の揉め事を防止する為に何らかの書類を残すという事も考えられるし、それ以外に手紙のやり取りがあってもおかしくはない。そういう文書が保管されていそうな場所といえば……例えば、住職の執務室のような場所か……」

明日見が寺院を訪れるのは初めてだったし、ましてや本来なら庶民に親しまれる憩いの場でもあるべき寺院への初の訪問が、まさかこのような形で忍び込まざるを得ない状況になるとは、明日見の思いとしても少々複雑なものがあつた。

明日見にとっては故郷ともいえる、不似の山の中腹に居を構える仙と修行者の館『天元堂』と、中原地帯の各所に点在して庶民を天帝の訓えの元に導こうとする寺院とは、多少存在する目的に違いがあつたとしても、基本的には同じ天界の神々の徒であつたから、いわば双方とも兄弟ともいえる間柄の存在である。

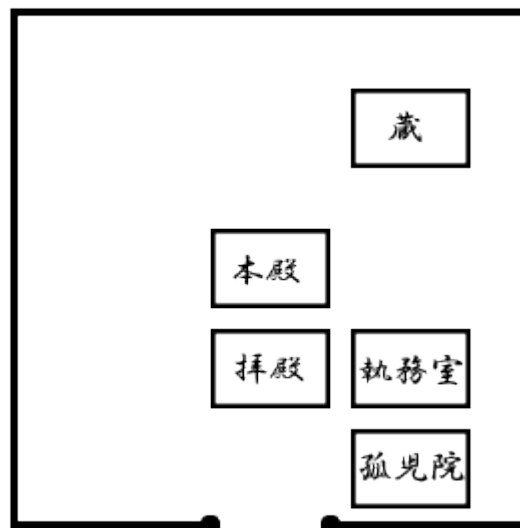
しかし、地上界で庶民を導く寺院と、『天元堂』のように蓬莱山に在って半ば人を超えた仙や修行者が住む館とでは、実質的な接点は皆無といっても良かった。

とはいえ、どちらも共に天界の神々の徒である為、その建物の構造は基本的に天帝の宮殿を模したとされる一定の様式に沿って作られていた。

もちろん、個々の建物によって構造には無数の微妙な違いがあるのだが、それでも基本的な部分はほぼ共通しているといつてよい。

それだけに、明日見には、寺院の外部から建物を見ただけで、内部構造の凡その見当がついていたのだ。

「……だとすると、住職の執務室は拝殿に隣接した、ここから見ると奥側の建物と言う事になるけれど……」



寺院の造りは、基本的には敷地の中心に天界を模した本殿を配置し、本殿には天帝を始めとした天界の神々の像が祀られている。

本殿はまさしく天界の縮図として配置されているから、寺院でも住職などの特別に許可

された人物以外の立ち入りを厳しく制限されていた。

これは、人が人のままでは天界への立ち入りを許されないという、ごく当たり前の事実に符合する。

しかし、一方の例外として、半ば人でありながら天界への出入りを許された者も、少数ながら存在する。

そういった数少ない者が『天元堂』の仙であり、仙の中でも特に優れた者として仙の指導を天界より委ねられる導師と呼ばれる特異能力者であった。

導師の中には神とも見紛う能力を使いこなし、神の座に列せられる者も存在するのだから、そういった半ば人を超えてしまった者の象徴として、本殿への立ち入りを認められているのが、寺院の中では住職などのごく限られた者であった。

天界を模した本殿より手前半分は生者の土地とされ、奥側半分は死者の土地とされていた為、寺院の建物の多くは正門から本殿の間に立ち並び、本殿の奥側は墓地で占められているというのが通例であった。

寺院によっては、本殿の奥側にも常世の国を模した建物が配置されている場合もあったが、数としてはそれ程多くはない。

そういう意味では、先程三人の子供が出てきた蔵のような建物は常世の国を模した建物と考えられるので、『瑞巖院』は寺院の中では少々珍しい構造を持つことになるだろうか。

寺院の正門と本殿の間には、拝殿と呼ばれる建物が併設されている。

ここは住職をはじめとした寺院の職員、ならびに寺院に許可を得た一般の庶民にも出入りを許された場所であり、寺院で通常祈りの行が行われるのは拝殿においてであった。

拝殿はいわば、天界と地上界を繋ぐとされる蓬莱山を模した場所である。

蓬莱山は過酷な天然の障害によって閉ざされている為、通常の人を訪れるのは至難の業だが、全ての人が蓬莱山への道を閉ざされている訳ではない。

現在『天元堂』に生活する仙や修行者も、元は様々な経緯から不似の山に辿り着いた人だということと同じである。

しかし、蓬莱山へ辿り着く事を望んだ者が全て辿り着ける訳ではなく、様々な理由から蓬莱山を目指した者の多くが志し半ばに命を失っている。

それ故に、古の帝記にはある賢人の言葉として『蓬莱の山に辿り着いた者は、天の神々に選ばれた幸運に感謝しなくてはならない。なぜならば、蓬莱の山を閉ざす天然の要害は、神がそれに相応しいと認めない者を退ける為に存在するのだから。神の座に近づく事を許された者だけが、蓬莱の山への立ち入りを許されるのだ』とも残されているように、蓬莱山へは限られた人の立ち入りしか認められないのだ。

だからこそ、蓬莱山を模した拝殿は、寺院の職員を始めとした一部の庶民の立ち入りだけが許された場所であった。

そして、寺院の正門から拝殿に到る参道は地上界そのものであり、天界の神々から人の生存を許された中原地帯の象徴といっても良かった。

平らな石畳を敷き詰めた参道は、人の往来に適した状態に整備された街道を現し、また中

原地帯が人手によって人に都合よく整備する事を許された場所である事を象徴する意味合いもあった。

通常、庶民が寺院で天界の神々に願い事をする場合は、普段は閉ざされている拝殿の戸口に立って、本殿に鎮座する神々の像に向かって祈りを奉げる場合が多かった。

より重要な願い事については、住職の許可を得て拝殿に昇り、正式な祈りの行の手続きに乗っ取って祈りの儀式を執り行うこともある。

しかし、そういう場合は寺院でも特別なお布施を申し受けるのが通例とされていたから、一般の庶民が拝殿に昇る機会は生涯に何度も訪れるものではなかった。

そして、拝殿の隣には、大抵住職を始めとした寺院の職員の住居や執務室を備えた建物が併設されているのが通例だった。

なお、この寺院の場合は、更に手前側にもう一棟の建物が建てられていたが、これまでに基経達から聞き及んでいる話を総合すれば、その建物が孤児達を住ませる『孤児院』として利用されていた建物だろうか。

明日見が一見して感じたのは、どの建物にも生活感が感じられない……余りにも静寂としたひと気のなさである。

通常、寺院には住職を始めとした数名の僧侶が常駐し、寺院における日々の行や町の庶民に対する教育・啓蒙、及び社会奉仕活動に明け暮れるのだが、この寺院には住職以外に人のいる気配が感じられない。

基経の話によれば、未だに何人かの孤児が留まっている筈だったが、かつては孤児院として使用されていただろう建物にも、住職の執務室があるだろう建物にも、人のいる気配は微塵も感じられない。

この寺院の中で、他に人のいる可能性のある場所といえば、先程三人の子供が出てきた蔵くらいしかなかったのだが、『まず住職と奴隷商人の繋がりを示す証拠を見つける方が先』と決めていた明日見は、周囲の気配の変化に注意を払いながら、拝殿を壁伝いに通り過ぎて、その奥の建物に忍び込んだ。

薄暗い木製の廊下に沿って、引き戸式の扉が整然と繋がっている。

明日見は、息を潜めて扉の向こうの気配を窺ってから、そろそろと使い込まれた木製の引き戸を慎重に開け、最初の部屋の中に潜り込んだ。

室内はこじんまりしていて、出入り口以外の三面の壁が、それ程高くもない天井まで書棚で覆われ、それぞれの棚には様々な種類の書籍やら、綴じ紐で束ねられた書類で埋め尽くされていた。

部屋の真ん中には一脚の椅子と机が据えられ、机の端にはランプが何気なく置かれている。

一見して執務室として使用されている部屋だと分かったが、現在住職が使用している部屋なのかどうか……という部分については、部屋を一見しただけでは判断がつかなかった。

いずれにしても、この建物にある部屋は一通り確認する必要があるのだろうが、この部屋の書棚にある書類の量を一望した限りでも、全ての書類に目を通すには相当の時間がかか

りそうだ。

「はぁ、この書類の山の中から問題の書類を見つけ出すのは、かなり骨が折れそうだけど……」

明日見はとりあえず、部屋の中央に仰々しく鎮座する机から物色することにした。

机の引き出しには鍵もかかっておらず、罌の様な何らかの仕掛けが施されていた訳でもなかったが、明日見は一段一段慎重に引き出しの中を探ってゆく。

一方、住職が今どこで何をしているのかが分からず、いつこの部屋を訪れるのかも予想がつかないだけに、余り悠長にこの部屋を調べている余裕はなかった。

それもあって、大まかにざっと調べる程度しか出来なかったが、それでも机の上や引き出しには疑わしき書類が隠されていない事は一目瞭然だった。

明日見は、そのまま部屋の壁一面を覆いつくすように聳え立つ書棚の物色に取り掛かる。

しかし、全ての書棚に納められている書類を詳細に確認しては、限られた時間でこの建屋内の全ての部屋を調べて回することは不可能だったし、そもそもパッと目に付くような場所に疑わしい書類を保管しているとは考え辛かった。

かといって、敢えてそういう目立つところに保管して、今の明日見のように、住職の秘密を暴こうと忍び込んだ者の心理的な盲点を突いた仕掛けがあるとも考えられる為、時間が許される限り全ての書類を確認した方が良いに決まっている。

「まだ一つ目の部屋なのに、こんなに書類が多いとはね……。一旦外に出て住職の動向を探った方がよいのか、それとも、他の建物から先に探してみる手もあるけど」

仮にこの部屋の書類を全て調べていたら、途中で住職がこの部屋を訪れる可能性は高いだろう。

しかし、この部屋には明日見が身を隠す場所もなく、かといって引き戸の扉以外に外部へ脱出する方法もない。

部屋の上の方には明かり取りの小さな窓がついているが、人の出入りは到底無理だろう。

「そういえば……」

ふと、明日見は書棚の自分の肩と同じ高さの段から書類を全て抜き出して、そのまま書棚の奥の板を探ってみる。

明日見の頭の中には、自分が不似の山の『天天堂』から旅立った日の記憶が思い起こされた。

あの時、導師は執務室の棚の奥を探って、棚に施されていた仕掛けを作動させると棚が横に移動して、棚に隠されていた秘密の通路が現れたのだ。

明日見はその日、様々な事情から、それまで世話になった『天天堂』の仲間に別れの言葉の一言も交わせぬまま、半ば追い出される様にして旅立ったのだ。

寺院も『天天堂』も同じ天帝の館を模して作られたのなら、寺院の棚に何らかの仕掛けが施されていて、例えば秘密の部屋なり隠匿する空間が書棚の奥に作られているかもしれない。

しかも、それだったら全ての書類を調べるよりもかなり時間が節約できるし、疑わしさの

色濃く漂う住職ならばやりそうな行動に思えた。

明日見は、住職がこの部屋を訪れる前に書棚の仕掛けを見つけ出そうと、書類の束には殆ど目もくれずに抜き出して、棚の奥に手を這わせて一段一段慎重に仕掛けを探した。

「やはり、幾ら建物の構造が似通っているからといって、書棚の仕掛けまで似せている訳がないか……」

二つ目の書棚の全ての棚奥を調べ終えた時点で、それまで仄かに高まりつつあった明日見の密かな期待の炎は、冷や水を浴びせかけられたように急速に萎んでいった。

が、ここまで時間をかけた以上、何がなんでも全ての棚を調べないと気がすまない明日見は、ふと短い吐息を漏らしてから気を引き締めなおすと、三つ目の書棚に手をかける。

「あっ！」

その書棚に納められている書類は、他の棚に納められている書類や書物よりも一回り幅が狭いように感じた。

念のために、一段下の棚にある書類と比べてみるが、やはり若干幅が狭い。

「この棚の書類だけ幅が狭いという事は……」

明日見が問題の棚から全ての書類を撤去すると、棚の奥には薄い板があてがわれている。

その板は奥に固定されている訳でもなく、明日見が軽く指を当てると『パタン』と音を立ててその場に倒れた。

それは余り大きな音ではなかったが、明日見一人きりの静寂に包まれた小部屋では、思わず息を停めてしまう程大きな音に聞こえた。

明日見はハッと息を吞んで体を硬直させ、それから引き戸に耳を当てて外の様子を窺ったが、扉の向こうに人のいる気配は感じられない。

気を取り直して、明日見は今倒れた板を慎重に背後の机の上に置き、棚の奥に手を這わせて仕掛けがないかどうかを丁寧に調べると、すぐに目立つ突起が指先に触れた。

「これは」

——二重底といったところだろうか。

突起を摘んで移動させると、奥の棚板自体が連動して平行移動し、その向こうに小さな小物入れ大の空間が現れた。

ちょっとした秘密の小物を隠しておくにはちょうどよい場所だ。

しかも、その小部屋には小さく折りたたんだ紙切れやら、重量感のある小さな皮袋やらが所狭しと詰め込まれていた。

「どうやら、こちらが探していた物が見つかったということか……」

明日見は、小部屋にあるものを一旦全て机の上の置き、まずは小さく折られた紙切れから一枚ずつ広げてみる。

これは、大半が手紙のようであった。

明日見はその中の数枚にざっと目を通してみるが、住職が明らかに奴隷商人と接触していたと証明するような記述はない。

その文面では、手紙の相手も何者なのか特定できそうもなかったが、もし奴隷商人が相手

だと仮定すれば、奴隷のやり取りに関する記述と疑えなくもない。

「確かに怪しい事この上ないのだけど、これでは確証とまではいえない。もっと明確な証拠があればいいのだけど」

その時、執務室の扉がいきなりスライドし、反射的に振り返った明日見の目には、先程堀の外から確認した住職と同じ顔が映っていた。

一瞬、何がどうなっているのか訳が分からず、呆気にとられていた住職は、明日見の手の中にある小さく折りたたまれた紙切れを見るなり、引き戸を思い切り閉めて駆け出した。

——やはり住職は奴隷商人と如何わしい取引をしていたんだ。

目が合った瞬間の住職のうろたえた表情に、明日見は全てを悟った。

明日見は住職を追って執務室を出ると、隣の拝殿に繋がる廊下をバタバタと足音を立てて逃げてゆく住職の後を追う。

あれ程ははっきりと目立つ足音を立てて逃げていては、自分から『見つけてください』と言って回るようなものだ。

しかも、たとえ女性とはいえ、並の男が及びもつかない程肉体を鍛え上げた明日見が相手では、どちらかという知能派である住職が対抗できる筈もなかった。

明日見は、拝殿から外へ駆け出そうとする住職をいとも簡単に捕らえると、うつ伏せに倒したまま腕を後ろ手にして捻り上げた。

「その慌てぶりからすると、私が何をしに来たか分かったみたいね。何もかも洗いざらい喋ってもらうから、覚悟しなさい」

住職は明日見の腕の下で、声にならない呻き声を上げて答えた。

＊

『やはり』というべきか、『幸いにも』というべきか、はたまた『残念ながら』というべきかはなんとも判断のしようがないが、荷車は些かの迷いもなく街道に入り、野平町でも人通りの多い中心街を突き抜けようとしていた。

とはいえ、まだ朝の早い時間帯だったから、街道を行き交う荷車や人の流れも疎らだったが、天井を含めた全面を木の板で覆われ、その表面には宙返りをする少年と、その傍らでおどけた表情を見せる道化師の顔が描かれている荷車は、その派手さの為にかなりの人目を惹いた。

しかし、そんな目立つ荷車が街道を通り抜けても、然程気にかかる人もいなかったし、時たま『奇術団だかなんだか知らないが、随分目立つ荷車だなあ』と振り返る人が居ても、そのまま目で見送った次の瞬間にはすっかり忘れてしまっている程、日々のありふれた光景の一つでしかなかった。

しかし、この荷車についてその他に一つだけ気になる点があるとすれば、以前からずっと人目を避けながら、街道沿いの建物の陰に身を隠しつつも、悠然と街道を直進する荷車を監視するように後をつける一つの人影だろうか。

「あ、もうすぐ治安部隊詰所か……。明日見は治安部隊に駆け込んでも大丈夫みたいな事を言っていたけど、本当に自分から行っても捕まんないのかなぁ」

荷車の御者からは完全に死角となる位置に隠れながら、荷車の後を追っていた基経は、これまでの一年弱に渡る盗人家業の影響から、治安部隊には始終追いかけていた為、明日見が言うように治安部隊が自分の言葉を簡単に信用するとは思えなかった。

問題の荷車が奴隷商人の物かも知れず、御者が奴隷商人の一味かもしれないならば、基経一人で荷車に直接接触するのは極めて危険かつ無謀な行為といわなければならない。

基経はどちらかという頭を使うよりは体を動かす方が好きでもあり、得意でもあると自他共に認めていたのだが、それでも前の住職から残虐非道な奴隷商人にまつわる話を聞いた事があったから、体力に多少自信があったとしても、一人で問題の荷車に対して行動を起こす気にはなれなかった。

その点、治安部隊の隊員は全員が武術を習得しているという話を聞いていたから、治安部隊に奴隷商人の対応を任せた方が安全だし確実だという事は、今更敢えて言うまでもない。

そういう意味からも、明日見が言い出した『治安部隊に荷車の件を伝えて調べてもらう』という発想は、本来ならば正しい判断なのだろう。

しかし、基経は明日見が思う程治安部隊を信用していなかったし、治安部隊も窃盗の常習犯である基経の話を素直に信用するとは思えなかった。

「あの治安部隊に幾ら『あの荷車は奴隷商人かもしれないから調べてくれ！』とか言っただって、俺の言うことをそう簡単に聞くとは思えないんだよなぁ……」

振り返ってみれば、基経の治安部隊に対する拭い難い不信感が芽生えたのは、基経を始めとした孤児達の大半が寺院から追い出された、約一年前に遡る。

まだ年端も行かぬうちに様々な悲惨な体験を積み重ねてきた孤児達にとって、寺院の住職は半ば親と同様の信頼できる庇護者であり、彼らにとって唯一の味方であった。

しかし、その頼りにしていた住職が突然の病に倒れ、その代わりにやって来たのがこれまでの住職とは全く正反対といいいい程、住職を務めるには相応しくない男だった。

案の定、新しい住職は着任早々孤児達を寺院から追放し、基経達が盗人家業で生計を立てなくてはならない状況に追い込んだのだ。

その時も、町役場や治安部隊は何もしてくれなかった。

新しい住職の非道を幾ら訴えても、全く聞く耳を持たなかったのだ。

その時の記憶が未だに鮮明に残っていたから、基経は治安部隊に対しても明日見が抱いているのと同じ様な信頼感を持てなかった。

——治安部隊が、様々な犯罪行為や危険な事態から地域住民を守っているなんて、そんなの嘘だ！

それが、基経の治安部隊に対する認識だった。

しかし、孤児達の中では多少行動的で目立っており、生まれつきの性格や自分のおかれた状況から、何となく孤児達のまとめ役になっていたとは言っても、まだまだ幼さの残る子供である事には違いない。

特に、奴隷商人が相手となれば、治安部隊に頼らざるを得ないだろう。

——しかし……。

基経が誰にも聞こえないような小声で、ブツブツと独り言を呟いている間にも、白亜の石積みの特徴的な建物が目前に迫っている。

「でも、今あの荷車を逃がしたら、あの住職と奴隷商人の怪しい関係を証明する好機も逃してしまうし、明日見が言うように、事情はどうあれ俺が悪事を犯した責めは負わなくちゃならないんだし……」

基経は、治安部隊詰所の石積みの建物の手前で一瞬躊躇したが、大きく一つ溜息をついて覚悟を決めると、半ば自棄気味に目前の白亜の建物に駆け込んだ。

「大変だ！ あの荷車は奴隷商人の荷車かもしれないんだから、早く調べてくれよ！」

「こいつ、基経じゃないか……今まで逃げ回って散々迷惑をかけおって、今日こそ容赦しないからな」

詰所にいたのは、この町の治安部隊の隊長一人きりだった。

通常ならもう一人いる筈の隊員は、今は朝の見回りの最中なのだろうか。

隊長はいきなり駆け込んできた基経の手首を呆気なく掴むと捻り上げ、基経は情けなく悲鳴交じりの声を上げた。

「いてて、腕が折れちゃうだろう！ さっさと離せよ！」

「今までちょろちょろと逃げ回って調子に乗りおって、じっくりお灸を据えてやるから、覚悟するんだな」

「だから、そんな事している場合じゃないんだって。さっさと捕まえないとあの荷車が逃げちゃうだろう！ あの荷車は奴隷商人の荷車かもしれないんだから、早く調べろよ！」

「何を言うかと思ったら、またそんな具にもつかない口から出任せを言いおって、今時奴隷商人なんかが出現する訳がないだろうに。幾ら苦し紛れに誤魔化そうとしたって、そんな見え透いた嘘に騙されるものか」

「だから、嘘なんかじゃないって。あの荷車に三人の子供が乗せられるのを、確かにこの目で見たんだから、そんなに信用が出来ないなら、自分の目で確かめてみればいいだろう？」

「あの荷車って、お前一体そんなものをどこで見たんだ？」

「……寺院だよ。住職と荷車の御者が親しげに話していたり、三人の子供が荷車に乗り込む所を見たんだ。もしそれが奴隷商人じゃないって言うなら、一体なんだって言うんだよ」

「まったく、幾らお前達がああ住職を嫌っていようが、相手は仮にも住職なんだから、そんな事をする訳がないだろうが。まあ、お前達が寺院を追い出された経緯については同情の余地もあるが、仮にも寺院の住職が、そんな人の道に外れた行為を……」

「だったら、あの荷車のいかにも中を見られたくないといった形とか、それを誤魔化す為に描かれた派手な絵の理由をどうやって説明するんだよ。普通の荷車は屋根なんてつけないし、せいぜい幌を被せるくらいなのに、あの荷車は絶対に『中を見せないぞ』といった風に全面板張りじゃないか。その上、わざとらしくあんな派手な絵でいかにも奇術団か何かみたいに誤魔化そうとして、いかにも怪し過ぎだろう」

「そうだったか？」

隊長は尚も基経の手首を掴んだまま、惚けた素振りで街道に出てみるが、既に荷車はその先の交差点で街道を曲がった後だったのか、全く姿が見えなくなっていた。

「なんだ。もう見えなくなったみたいだな。……まあ、そんな派手な絵で目立っているなら、本当に奇術団の荷車だったんだろうし、今時奴隷商人なんて、どうせつくならもっと信憑性のある嘘をつくんだな」

「ったく、どうしてくれるんだよ。あんたら治安部隊の癖に、住民の言う事も聞かずにトロトロしてるから、荷車を逃しちゃっただろ。もしかしたらまだ追いつくかもしれないから、さっさと後を追いかけてよ」

「煩い！ 奴隷商人なんて世迷言はもう終わりだ。お前が今までに繰り返してきた窃盗の被害の訴えは何十件と出ているんだから、これから一件ずつきっちりと取り調べるからな。覚悟しておけよ」

「ふざけんな！ せっかく奴隷商人の証拠を押さえられたかも知れないのに、治安部隊が余りに馬鹿過ぎるおかげで、あの三人だって奴隷としてどこかへ売られていくんだからな。お前らちゃんと責任取れよ！」

「いつまでそんな下らんことを言ってるつもりだ？ そんな誤魔化しは通用しないんだ。お前もいい加減に罪を認めて大人しくなったらどうだ」

「別に罪を認めないって言ってる訳じゃないだろ？ そんな事より先にやるべき事があるといってるだけだ。大体、俺に対する訴えって言ったって、みんな旅人なんだから、今どこにいるかも分からない癖に……」

「これまでに散々悪事を働いておきながら、よくもそこまで言えたものだ。もうすぐ見回りが戻ってくるから、それまでは留置室で大人しく頭を冷やしているんだな」

「いてて、何すんだよ！」

嫌がって抵抗する基経の腕をきつく掴んだまま、治安部隊の隊長と基経は相次いで詰所の奥に消えた。

治安部隊詰所の地下には、拘束した犯罪者を一時的に拘留する為の留置室が設置されている。

きっと、基経も犯罪者として留置室に閉じ込められてしまうに違いない。

ちょうど治安部隊詰所で今し方まで揉めていた治安部隊隊長と基経のやり取りを、街道を挟んだ向かい側の建物の隙間に身を隠しながら見守っていた日向は、思わず基経を救出する為に街道へ飛び出しそうになった所を、慌てて自制した。

昨日までと同様に、今朝も住職に関する情報収集に出かけようとした矢先に、天鵬と経巧が連れ立って日向の住処を訪れたのだった。

それによると、普段なら今頃は寺院の監視をしている筈の三蔵が突然天鵬の住処を訪れ、明日見からの指示として天鵬達を寺院に呼び寄せる様にという事と、そのうちの一人は治安部隊の詰所に向かった基経の支援に回るように、との伝言を受けたのだそうだ。

その伝言を受けて天鵬と経巧が日向の元を訪れ、天鵬と経巧が寺院に向かう事、日向が基

経の支援に回る事が決められたのだが、日向には『なぜ基経が治安部隊詰所に向かったのか？』が全く理解できなかった。

基経を筆頭とした、天鵬、経巧、日向の四人は、たとえ孤児達が生き抜く為とはいえ、野平町を行き交う旅人に対して度々盗人行為を働いていたのだから、常々治安部隊に目をつけられているのは基経が一番良く知っていた筈だ。

その基経が自ら治安部隊詰所に向かうなんて信じられない……そんな釈然としない思いを抱えたまま治安部隊の詰所へ向かった日向は、詰所の中で手首を掴まれたまま、何か問答を繰り返している基経の姿を目の当たりにしたのだった。

「ああ、基経が捕まってしまった。一体どうすればいいんだろう……私一人で治安部隊の詰所に行ったって、基経と同じ様に捕まるだけだし……。とにかく、寺院にいる筈の明日見さんやみんなに知らせないと」

日向はそのまま街道に交差する狭い路地に入ると、複雑に入り乱れた路地裏を町外れまで走った。

こうする事で多少時間はかかるかもしれないが、万一何者かに尾行されていた場合に、追っ手の追跡を交わす為だ。

そのまま町外れまで来たところで街道に戻ると、日向は息を切らせて寺院への道をひた走った。

——それにしても、なんで基経は治安部隊詰所なんかに行ったんだろう？

日向にはどうしてもそれが理解できなかった。

自分達がどんなに苦しい時も、治安部隊だって、町役場だって、何もしてくれなかったし、何の役にも立たなかった。

私達の事を分かってくれたのは、町の一部の人と、一部のお店と……それだけだった。

それ以外には、信じられる者なんて何もなかった。

たまに町の人達に助けてもらう以外には、殆ど全ての問題を自分達自身の力で解決するしかなかった。

治安部隊なんて、私達にとっては寺院の住職の仲間みたいなもので、全然信用できないのに、なぜ基経はわざわざ捕まるのを覚悟で治安部隊詰所なんかに行ったんだろう。

基経と一緒に寺院を監視していた筈の三蔵が、明日見さんの指示と言って私達の召集をかけたのだから、寺院で何かが起こった事は間違いない。

明日見さんもその現場にいて、何らかの事件に巻き込まれたのだろうか？

それで、幾らなんでも私達の手には負えそうもない大事件に巻き込まれてしまったので、基経は治安部隊に捕まるのも覚悟して明日見さんの救援を頼みに行ったのだろうか？

——でも。

日向は走りながら、延々と自問自答を繰り返していた。

とにかく、一刻も早く寺院に辿り着いて、明日見さんに基経が捕まった事を告げなくては、もしくは、もし明日見さんが何かの事件に巻き込まれていたとしても、天鵬や経巧にでも相談して、これからどうするべきかを決めなくてはならない。

基経は名実共に自分達の代表者として、これまで様々な意味で頼りにもしてきたし、支えられても来たのだから、その基経が突然治安部隊に捕まってしまっても、これからどうすればよいのか全く見当もつかない。

でも、何の根拠もないそんな妄想に囚われて、常軌を逸して取り乱してしまっても何の解決にもならないし、こういう時だからこそ私達がしっかりとしていなくては……。

日向は、次から次へと頭の中に浮かんで消えてゆく、悪しき妄想共を振り払うようにして、ただ一刻も早く寺院へ辿り着く事だけを考えて走った。

肺がはち切れんばかりに息苦しくなり、胸の奥が熱く灼熱の炎を上げ、耳の奥でバクバクと激しい動悸がこだましていた。

両足に水気を含んだ砂袋を括り付けられたように足取りは重く、気持ちばかりは『早く、早く！』と焦る反面、苛立たしいくらいに足の運びは重苦しく感じられた。

それでも、日向は休みなく全力疾走を続けて、遂には悲鳴を上げ始めた自分の体に鞭打つように、寺院への道をひたすら走り続けた。

ほんの一瞬でも早く寺院に辿り着いて、明日見やみんなに『基経が治安部隊に捕まってしまった』ことを告げれば、まだ何とかなるのではないか。

たった一瞬遅れただけでも、基経は二度と解放されることなく、永遠に治安部隊の薄暗くジメジメした不快な牢獄に繋がれてしまうのではないか。

『たった一瞬の遅れが基経の、そして自分達の今後全てをも決定してしまうのではないか』……そんな微かな予感があるからこそ、『一刻も早く寺院に辿り着かなくては』という思いが、日向の体力的な限界を超えた身体を支えていた。

汗が滴っておぼろげになった日向の視界に、寺院の門を飾る三丈（約五メートル十センチ）を超える二本の柱が捉えられたのは、それからすぐの事だった。

——ああ、もうすぐ寺院だ……。

日向は、既に限界まで絞りきっていた自らの体力を再度振り絞って、寺院の門に駆け込んだ。

＊

「明日見さん！ 基経が！ 基経が……」

突如拝殿に響き渡る日向の切迫した声に弾かれて、拝殿の屋根を支える支柱のうちの一本に、座ったままの姿勢で後ろ手に拘束された住職の傍らで、神妙な面持ちで声を潜めて話し合っていた明日見と天鵬と経巧の三人が振り返った。

額に玉の汗を滲ませつつ、肩で息をしながら三蔵に誘われてきた日向の声は、今し方まで自分の体力の限界を超える程全力疾走を続けてきた為か、半ば息を切らした掠れ声になっていた。

「日向さん！ 基経君は？」

「それが、私が詰所に駆け付けた時には、既に治安部隊に捕まってしまっていて……多分

そのまま地下の留置室に入れられてしまったんだと思います」

「捕まったって、荷車は？ 基経君はちゃんと荷車の事を治安部隊に説明したのでしょうか？」

「私にだって分かりません。三蔵からの伝言だって言われて、慌てて治安部隊の詰所に駆け付けたら、その時にはもう基経は治安部隊に腕を掴まれて激しく口論していて、咄嗟に『私も捕まるかも』って思ったら近づけなくて……」

「なぜ治安部隊が？ 幾ら基経君のこれまでの事があったとしても、非常事態なのだから……」

「……だから、さっき明日見に聞いた時から『ちょっとヤバいんじゃない？』とは思ってたんだけど、やっぱな。俺達、治安部隊には相当眼をつけられてるらしいし」

「そうだな。明日見は隣町の治安部隊には世話になったらしいから、この町の治安部隊は隣町とは違うって事が分からなかったんだらうね。でも、これではっきりしたと思うけど、この町の治安部隊は隣町程親切でも町民の味方でもないって事だ」

今、日向が寺院に辿り着く寸前まで、明日見達三人はちょうどその事を話している最中だったから、治安部隊にかけた明日見の淡い期待が呆気なく裏切られ、天鵬と経巧の指摘した『この町の治安部隊に対する不信と不安』が、残念ながら的中した事になる。

「それにしても、基経はなぜ治安部隊なんかに……」

今、寺院に辿り着いたばかりの日向には事態が飲み込めずに、『全く訳が分からない』といった風にぼそりと呟いた。

「だから、今ちょうど俺と経巧も明日見にそれを聞いていた所なんだけど、どうも明日見の指示らしい……」

「明日見さん！」

天鵬の言葉に、少し呼吸の落ち着いてきた日向が、眉根に深い皺を刻んで鋭い視線で明日見を睨み付ける。

「まあ、日向。明日見だって俺達と治安部隊の関係を詳しく知っていた訳ではないし、この町の治安部隊は隣町程優しくないって事だって知らなかったんだから、明日見を一方向的に責めたってしょうがないだらう？ それに、最終的に明日見の指示に従う選択をしたのは基経自身なんだから、基経にだって何か考えがあっての事かもしれない」

「でも、基経は経巧とは違って、どちらかといえば頭よりも身体が先に動く方なんだから、そんなに深い考えがある訳ないでしょう？ これまでの事があるから、明日見さんの言うことを鵜呑みにしてしまったのかもしれないし……」

「そりゃ、日向のいう事はあり得るかもしれないけど、そんな言葉を本人が訊いたら、幾ら基経だって怒るだらう。それに、こちらにはまだ切り札があるんだから……」

「切り札って？」

「それがさ、明日見が『住職と奴隷商人がつるんでいた証拠』を見つけたんだ。それに、住職もここに捕まえてあるから、この証拠と住職をまとめて治安部隊に引き渡せば、幾ら治安部隊といっても無視する訳にはいかないだらう？ そうなれば、住職だってすぐにここから追

い出せるし、俺達が『これまでに住職が犯してきた罪』を暴いたとなれば、俺達の罪を償う上でも有利に働くらしいんだ」

「ちょっと待って、天鵬。私達が犯してきた罪を償うって？」

「明日見は、俺達が寺院に戻れるようになって、それまでに犯してきた盗人家業の罪を償った方がいいって言うんだ。俺達だって生きる為には仕方なかったし、好きであんな事やってた訳じゃないけど、それでも悪い事してきたのは事実だから、その責任は取らないと……」

「でも……」

「どちらにしても、俺達が寺院へ戻る事になれば、治安部隊は必ず寺院へ俺達を捕まえに来るんだから、住職の悪事を暴いてみんなが寺院に戻れるこの機会に自分から出頭した方が、きっと俺達の処罰についても情状を考慮してくれるっていう、明日見の意見は正しいよ。きっと、基経にもそういう思いがあったんじゃないかな？ ただ、明日見が考えていた程、この町の治安部隊は甘くなかったけれど……」

「天鵬も、経巧もそう思うんだ……。でも、出頭するなんて初めて訊いたから」

「ああ、日向にはまだ話していなかったんだっけ……。実は、俺と基経や天鵬の間では、それとなく話してはいたんだ。やっぱり、また寺院に戻る為には、いつまでも治安部隊の眼を逃れて逃げ回っている訳には行かないし、子供達の為にも、そういう事はちゃんとけじめをつけておかないといけないだろうって。でも、治安部隊は俺達の盗人の現場を押さえた訳ではないし、今のところは『基経を中心とした数人』で活動しているらしい……。って所までしか知らない筈だ。だったら、いざとなれば俺達三人で治安部隊に出頭して、残された子供達の面倒を日向に見てもらおうって、考えていたんだ」

「そんな、経巧達だけで勝手に決めて……。私だって同罪なんだから」

「だからこそ、俺達に出来る事と、日向に出来る事があるだろう？ 幾ら今までやってきたといっても、本来なら俺は子供の世話なんて柄じゃないから。基経や経巧はどう思ってるのか知らないけどな」

「でも、そんな事言われたって……」

日向が、これまで自分の思いもよらなかった天鵬や経巧の話に言葉を失って、口籠って黙り込んでしまう様子を見て、これまで無言のまま三人の言葉に耳を傾けていた明日見が、少々重苦しい口調で唇を開く。

「ごめん。私にも色々思う所があったからそうしたんだけど、なかなか思う様にはいかなくて。でも、これを見せれば幾らなんでも治安部隊だって動かない訳にはいかない筈だから……」

「待って。まさか、明日見も治安部隊の詰所にいくって言うんじゃない……」

経巧の言葉に、明日見は無言のまま静かに俯いた。

そのまま背中の中の布袋から紙を取り出し、鉛筆で何事かを荒々しく殴り書きすると、明日見は経巧にその紙と、住職が隠し持っていたメモ紙の束の中から一部を取り出して手渡した。

「とりあえずあなた達には、住職の様子を見張っててもらわないとならないけど、いつ

誰がここを訪れても逃げられる様に、どこかに身を隠して見張っていてくれる？ それで、もし私が夕方になっても戻ってこなかったら、その紙を持って隣町の治安部隊に駆け込んで欲しいの。『公亮さん』という隊長と『源蔵さん』という隊員がいるから、私の名前を出してこの紙を見せてくれれば、きっと相談に乗ってくれる筈」

「明日見……」

三人は口々に呟いたが、何かを決意した様に正面を見つめる明日見の強い視線に、『例え誰がなんと言おうと、明日見の意志を揺るがせる事は出来ない』と悟ると、そのまま言い出しそうになった言葉を喉の奥に飲み込んだ。

「大丈夫、きっと戻ってくるから」

明日見はそう一言だけ言い残すと、そのまま二度と後ろを振り返らずに寺院の門を潜り、野平町へと続く旧街道を巡航速度で走り続けた。

そのまま四半刻（約十五分）も走り続けると、町の中心部……いわゆる市街地への入口に差し掛かる。

そこから治安部隊詰所までは歩いても然程の距離ではなかったが、普段明日見が肉体の鍛練の為と称して毎日一〜二里（約五〜十キロメートル）を走る時の巡航速度ではなく、ついつい心が逸ってしまうのか全力疾走になってしまう。

それから程なく治安部隊詰所の、遠目からでも目立つ特徴的な建物が視界に入り、そのまま息つく暇もなく白亜の石積みの建物に駆け込んだ。

「どうしました？」

詰所の机で何らかの事務作業をしていたらしい男が、慌てた雰囲気を引き摺って突如建物に駆け込んできた明日見の足音に気づき、明日見の方を向いて寝起きの少々眠たげな声を上げる。

「あの、この町の外れにある寺院の事でお伺いしたいのですが」

「はい、何か？」

日向の言葉によれば、つい先程基経が治安部隊に捕まり、その直前まで口論をしていたらしいのだから、今寺院がどのような状況にあるかという事くらい、簡単に想像できる筈だ。

しかし、目の前の男は治安部隊の隊員であるにもかかわらず、全くその様な事に興味もなく自分の業務の範囲外だといった表情に、明日見は微かな苛立ちと不安を感じ始めていた。

確かに、この町の治安部隊は隣町の公亮さん達とは全然違う……というのが、この町の治安部隊を訪れた明日見の第一印象だった。

明日見は思わず声を荒げてしまいそうになる自分の逸る心を抑えて、努めて冷静を装う事に神経を使って慎重に口を開いた。

「寺院の住職は奴隷売買に手を染めています。あなたも治安部隊に属しているのだから、奴隷売買が如何に重大な罪かという事は良く知っている筈です。今朝も住職は奴隷商人に子供達を引き渡していたのですから、新たな犠牲者が出る前に一刻も早く拘束して下さい。それから……」

「ちょ、ちょっと待って。いきなり駆け込んできたと思ったら、奴隷売買だとか、何を根拠

にそんな突拍子もない事を……。大体、君は何者だね。初めて見かける顔だが」

「私はただの旅行者です。そんな事よりも、早く住職を拘束して下さい。住職の奴隷売買の実態はこれを見れば明らかなので、早く」

明日見は反応の鈍い男に苛立ちが募り、しかし寺院の住職が奴隷売買に手を染めるという前代未聞の事態が、俄かには信じられないという男の気持ちも理解出来くはなかった。明日見は、出来る限り感情を抑え込もうと努めてはいたが、それでも言葉の端々に『眼前の鈍い男への苛立ち』が、強い語気となって現れてしまう。

そのまま、明日見がテーブルに乱暴に叩きつける様にして置いた紙切れの束を、男は『朝っぱらから面倒臭い』といった投げやりな表情を浮かべて掴み取るが、二枚、三枚と紙切れを読み進んでいくうちに、徐々に表情が陰しくなり、顔色が変わってくる。

「これは……こんな物を一体どこから……君は一体？」

「これは、住職が寺院に隠していた、奴隷売買に関わる書類やメモ書きの束です」

「隠していた……ね。うーむ、確かにこれが事実ならば大変な問題だが……」

「それから、少し前に怪しい荷車がここを通り過ぎた筈ですが、その事を知らせようと少年が訪れている筈です。少年と、荷車はどうなりましたか？ ちゃんと荷車を調べてくれたのですか？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。君は旅行者ではなかったのかね？」

「そうです。旅の途上で少年達と知り合ったのですが、それがどうしたのですか？」

「なるほど。つまり、君も『小僧』の一味という訳だな？」

「一味って、あなたがあの子達にどの様な感情を抱いているのかは知りませんが、今はそんな事を言っている場合ではないでしょう？ あの荷車には三人の子供が乗り込んだというのに、もしそのまま奴隷商人に売られてしまったとしたら、あなた達はこの街の治安を守る責任者としてどの様な責任を取るつもりですか？ 今からならばまだ間に合いますから、早く追いかけて」

「だから、盗人常習犯の悪ガキ共や、その一味のいう曖昧な戯言に付き合っている暇は、我々にはないのだよ」

「曖昧な戯言って、そういう言葉はちゃんと荷車の中身を確認してから言ったらどうですか？ もし調べた上で荷車に何の問題もなかったとしても、犯罪が行われた訳ではないと確認出来て、逆に安心出来るのではないのですか？ 治安部隊というのはそうやって常日頃から予め犯罪の芽を摘む事が本来の業務の筈なのに、あなた達は一体何の為に治安部隊を……」

「だから、そういった細々とした事に一々対応しては、我々の業務はこなし切れないのだよ」

「ああ、なんて物分りの悪い……治安部隊がこんな考え方だから、基経君達の様な子供がしなくてもいい苦勞を背負い込んでしまうというのに。もう結構です！ 荷車は私が追いかけますから」

そういい残して、一旦詰所を後にしようと振り返った明日見の手首を、治安部隊の鍛え上

げられた無骨な掌が掴み、強引に引き戻された。

早くしないと荷車を見失ってしまうというのに……明日見は男とのこれまでの会話で散々募らせてきた苛立ちに加えて、荷車を追いかける事さえ邪魔された怒りで、思わず握られた手首を振り払おうとしたが、さすがに明日見同様武術に心得のある治安部隊を敵に回すのは得策ではない……と、暴走寸前の自分の気持ちを何とか強引に押し留めた。

仮にここで治安部隊を振り切ろうとしても、明日見が目の前の男よりも武術の技量で上回る保証はなかったし、例えここで強引に治安部隊を振り切って荷車を追跡したとしても、必ず荷車に追いつけるという保証もない。

更には、ここで治安部隊と事を構えてしまえば、今後の慶太追跡に向けての重大な障害となりかねない。

こういってしまうと少々薄情かもしれないが、明日見にとってはあの荷車に乗せられた三人の子供達よりは、慶太を無事に救出する事の方が遥かに重要なのだ。

そもそも明日見が今ここにいるのも全て慶太を救い出す為だし、基経達についても慶太に対するものに近い感情が沸いてはいたが、あの三人の子供達についてはそれ程強い思い入れはない。

更に、明日見の脳裏には、東辺町の治安部隊隊長である公亮に忠告された言葉が思い出されていた。

——それから、明日見さん、武術を余り簡単に使い過ぎると、いつか暴行罪に問われてしまうかも知れませんが、勢い余って人を殺めてしまう可能性もありますから、充分慎重にされた方が良いでしょう。私も明日見さんを捕まえたくはありませんから。

確かあの時、公亮隊長はそう言った。

まさか、武術に心得のある治安部隊を相手に、思い余って殺めてしまう可能性は限りなく少ないだろうが、今後を考えれば出来る限り無用の騒動は控えたい。

「まだ、私に何か用ですか？」

明日見は一瞬眼を閉じて、落ち着くよう自分に言い聞かせて密かに短く深呼吸をしてから、今出来る限りの精一杯の平静を装いながら、辛うじて短い問いかけの言葉を返した。

「あの盗人の『小僧』の一味だというなら、放っておく訳にもいかないのですね。済まないが、後で少々話を聞かせてもらおうか」

「話って、一体何を？」

「つまり、君とあの『小僧』共との関係とか、君の素性とか、色々だな」

「関係といっても、旅の途上で八日程前にこの町を訪れた時に、たまたま彼らと出会って、彼らの境遇に同情を覚えたという事と、あんな子供達が盗人家業に身をやつすのは良くないと感じたから、彼らが再び元の様に寺院で生活出来る様に手を貸してあげただけです。大体、彼らが路頭を彷徨う羽目になった原因は、あなた達治安部隊や町役場が基経君達に何もしてあげなかったからでしょう？ あの子達が自ら生きていく為には盗人でもするしかなかった……行為そのものには問題があったとしても、その動機が誤っているとまでは思いませんけど。むしろ路頭を彷徨う羽目になった子供達を放置しておいて、後で幼いが

故の過ちだけを責め立てるのは、大人として余りにも無責任ではありませんか？」

「……何はともあれ、犯罪行為を行ったのはあの『小僧』共なのだし、法に基づいて犯罪は犯罪として適切に処理するのが治安部隊の任務なのだ」

「まあ、あなたに何を言っても無駄だとは思いますが、あなた達大人の対応の拙さが、基経君達を犯罪行為に追い込む原因になったと言う事を忘れないで置いて欲しいものですね。それから、私の素性がそんなに疑わしいのでしたら、東辺町の治安部隊に照会してもらえればすぐに分かる筈ですから、『代峰老師の所の明日見』と言って問い合わせれば、きっとすぐに分かるでしょう」

「むっ、『東辺町の代峰老師の所の明日見』だな。照会にしばらく時間がかかるが、その間は下の留置室で大人しくしてもらおうか。その間に『小僧』共との関係や、寺院に関する話も訊かなくてはならないのでな」

＊

「明日見……」

明日見が治安部隊に付き添われて薄暗い詰所の地下に下り、天井近くの壁際に僅かな明かり取りの窓から差す外光のみが、唯一室内をほんのりと照らすだけの、鉄格子で隔離された留置室に閉じ込められてから程なく、再び治安部隊が階上へ消えるのを心待ちにしていたといった様に、明日見と向かい合う留置室にやはり閉じ込められていた基経が、声を潜めて囁きかける。

「……なんで、明日見まで捕まっちゃったんだ？」

「まあ、ね。幾ら東辺町の治安部隊と違って顔見知りではないといっても、この町の治安部隊はこんなに対応が違うとは思わなかったから、ちょっと油断したかも」

「油断したって、そんなおどけてる場合じゃないだろ！ 明日見までこんな所に捕まっちゃったら、住職の件や残されたガキ共はどうしたらいいんだ？ 幾らこれまで一年近く代表者としてやってきた天鵬達にしたって、今回はちょっと荷が重過ぎる。俺もこんな所に捕まって『ヘマをした』って言えばそれまでだけど、でも、明日見がいてくれると思ったからこそ、こうやって捕まるのを覚悟してでも治安部隊に駆け込んだんだから……」

「ごめん。私も『治安部隊なんてどの町でもそう変わるものではない』と高を括っていた部分があるから、こんな所に入れられてしまったけれど、そうは言っても治安部隊には違いなのだから、必ずこれから動きがある筈」

「動きがある筈って、こんな所に閉じ込められたら、何にも……」

「でも、基経君を送り出した後、私は私で寺院に忍び込んで、住職が隠し持っていた『奴隷商人との怪しい取引の記録』を見つけて、治安部隊に提出した所だから、必ず何らかの動きがある筈。もし、それでも動きが見られなければ、残念ながら治安部隊そのものが住職や奴隷商人と結託して、悪質な奴隷売買を故意に見逃していた……という最悪の可能性も疑ってかからなくてはならないけれど、幾らなんでも治安部隊がそこまで腐敗しているとは思

いたくない」

「そうは言うけどさ、実際に俺が荷車の件で駆け込んだ時だって、奴ら俺の訴えや荷車には見向きもしなかったし、明日見だってこうして捕まっちゃったんだから、奴らならそういう可能性だって充分あり得ると思うぞ」

「まさか……だって、ここは中原地帯でも治安が良いと言われている東晶共和国だよ？それに、東辺町の治安部隊はそんな人達ではなかったから、治安部隊そのものの問題とは考えられない……でも、この町の治安部隊のみが、何らかの理由で住職の悪事に同調している可能性だけは、疑ってかからないといけないかもね。でも、そういったもしも時場合も考えて、ちゃんと切り札を残してきたから大丈夫」

「切り札？」

「そう。寺院の天鵬君達に、住職の奴隷売買の証拠の一部を預けてきたのだけれど、もし私が夕方までに戻らなければ、東辺町の治安部隊にその証拠を持って駆け込む様に指示してきたから、最悪でも明日には事態が動き出すと思う」

「そっか……。でも、東辺町までは近いって言っても子供の足では半日位はかかるかもしれないし、天鵬にしても経巧にしても、生まれて以来この町から出た事はない筈だから、何らかの事件に巻き込まれでもしたら……」

「そうか、天鵬君達はこの町から出た事がないんだ。でも、街道に沿って一本道を進むだけだから、多少時間はかかっても道に迷う心配はないし、街道沿いは治安もいいからね」

ふと、明日見が現在の状況には余りにも似つかわしくない、ちょっと意地悪な笑みを浮かべてクスクスと笑う。

基経にとっては、どう考えても今程最悪に深刻な状況はないというのに、鉄格子の向こうで笑みを浮かべる明日見を見て、ちょっと馬鹿にされた様な気分になって頬を膨らませる。

「なんだよ、こんな時に笑って……」

「いや、ごめん。基経君って、意外と心配性だったんだなって思ったら、何となく印象が食い違って、可笑しくなっちゃった」

「俺が天鵬達の心配しちゃ悪いのか？」

「悪いって言うのじゃないけど、らしくないなって思ったから」

「ただ、俺はさ、明日見は旅慣れているから気にならないのかもしれないけれど、生まれてこの方町から一歩も出ていない俺達にとっては、隣町に行くってだけでも大層な冒険なんだ。しかも、ただ遊びにいく訳じゃないんだから」

「そっか。でも、それはあくまでも最後の手段で、そういう事態になるとは思えないし、そうあって欲しくはないと信じたいのだけだね。それに、治安部隊は私の身元を隣町の治安部隊に照会するつもりらしいから、私の身元がはっきりすれば、治安部隊が私を拘束する理由もなくなるでしょう？ 元々治安部隊が私を拘束した理由だって、基経君の知り合いと言うだけで、盗人家業への関わりを疑われているだけみたいだから」

「そうかなあ。この町の治安部隊がそう簡単に釈放してくれるとは思えないけど」

「とにかく、治安部隊に私を拘束する正当な理由がないのだとしたら、そのまま拘束し続

ければ治安部隊そのものの罪を問われるし、いずれにしても明日までには東辺町の治安部隊が来てくれる。そこまで手配をしているのに、それでも全てが私達の思惑の裏目に出てしまったのだとしたら、それこそ私達人の手に余る大いなる力の為せる技だし、そういった天界の神々の領域の事情を嘆いて見ても仕方ないでしょう？」

「そんな事言たって……」

「いずれにしても、このままずっと薄暗い地下室に閉じ込められて一生を終える……なんて事はないから、変化が現れるのを待ちましょう」

「そんな悠長な……」

「今更シタバタしてもどうしようもないでしょう？」

「そりゃそうだけどさ」

基経は、『案の定』というか、『不覚にも』というか、これまで自分が半ば恐れていた『治安部隊に拘束される』という事態に陥っても、比較的平静を保っていたのは、『まだ外には明日見達がいるのだから、何らかの形で住職の罪を明らかにし、再び孤児達が寺院で暮らせるように計ってくれる筈だ』という根拠のない期待からだった。

しかし、基経の拘束から幾らも時間がたたないうちに、頼りにしていた明日見までが拘束されてしまったのは、基経の望みは半ば絶たれてしまったというにも等しい。

一方、明日見は基経とは対照的に、会話の端々で場違いな笑みをも浮かべてしまう程落ち着き払っていた。

それが基経にとっては不可解であり、またアタフタと浮き足立ってしまっている自分が悔しかった。

とはいえ、明日見が言うように、今ここで喚こうが恨み言を言おうが、何をどうしようもないのだから、静かに次の時期を待つしかない。

どんなに不本意でも、今の自分にはその位しかするべき事がないのだ。

半ば強引にそう自分に言い聞かせて、基経は苛立たしくも不安げな複雑な表情のまま、明日見は心を決めたとはばかりにむしろ余裕のある表情のまま、お互いに殆ど言葉も交わさずに薄暗い牢獄でのひと時を過ごしていた。

明日見の直感によれば、それから三刻（約三時間）程が経過した、そろそろ昼食時に差し加ろうかという頃になって、留置室を重苦しく覆っていた静寂が突如破られた。

久しぶりにコツコツと石造りの床を叩くリズムが耳元に響いたかと思うと、留置室の鉄格子の扉越しに治安部隊の男が再び現れた。

しかし、男の表情は先程と違って、どこか後ろめたい様なバツの悪さを押し隠そうとしている様に見えた。

「明日見さん、だったな。身元の確認が取れたから……」

そうって、鉄格子の鍵を開ける男の背後に、明日見にとっては懐かしい……という程久しぶりな訳ではないのに、何故かとても懐かしく感じる巨漢の姿が目に入った。

「よう！ 明日見。こんな洞窟の奥で何やってるんだ？」

「源蔵さん！」

巨漢の男は、東辺町の治安部隊隊員であり、明日見とも面識のある源蔵だった。

幾らこの町の治安部隊がその資質に問題があるとしても、東辺町の治安部隊に明日見の身元の照会くらいはするだろうと考えてはいたが、まさか源蔵がここを訪れるとは意外だったので、明日見は安堵と驚きと懐かしさから自然に零れた笑顔を源蔵に返した。

その向かい側では、依然として鉄格子に閉ざされたままの基経が『でっけえ……』と口をポカンと半開きのまま、源蔵の巨体を見て呆気にとられているようだった。

「ははっ、驚いたか？ 実は、ここの隊長さんが直々に『明日見の身元を確認したい』ってうちの詰所に来てな。まあ、こちらでも老師からお前と慶太の搜索願いが出てたもんだから、隊長が『様子を見て来い』って俺を派遣したって訳だ」

「そうなんだ。で、老師の具合はどうなの？」

「まあ、お前も知っての通り、老師も高齢だから、余り芳しいとはいえないのだろうが、取り敢えずは小康状態といった所だ。精三君が良く面倒を見ている様だから、今すぐ命に関わるという事はないと思うがな」

「そう、精三さんが……」

明日見の脳裏に、ふと老師の小屋が焼き討ちされた日の記憶が蘇った。

明日見はあの日、灰人達の手にかかった慶太を救出する為に、重傷を負った老師を精三に託して来たのだった。

あれからまだ然程時間はたっていないのだが、もう何ヶ月も過去の出来事のように感じてしまう。

しかし、明日見には過ぎ去った時間を懐かしんでいる暇などない。

慶太を無事に救い出して老師の元に送り届けるまでは、明日見には過去を振り返って思い出に浸る資格などはないのだ。

「済まないが、上で寺院と住職についての話をもう少し聞きたいのだが、よろしいかね？」

ふと、こちらの町の余り感じの良くない治安部隊の男が、少々口籠ってそう告げると、明日見の返事も聞かずに先に階上へと登っていく。

傍らでは源蔵が少々意地悪い笑みをニヤニヤと浮かべて、二人のやり取りに意味有り気な視線を投げかけていた。

「ねえ、どうしたの？ あの人」

「ああ、あいつらが明日見の事を怪しい盗人野郎と勘違いして疑っていたらしいから、俺がバシッと言ってやったのさ。『お前らそれでも治安部隊か！』ってな。ちと薬が効き過ぎたかもしれないが、どーしようもねえすっ呆けた野郎らしいから、これで少しはこの町の治安部隊もまともになるかもしれないな」

「それじゃあ、詳しい話は聞いているの？」

「いや。でも、寺院の住職が酷え悪徳だったらしいじゃねえか。俺も興味あるから、話を聞かせてもらうぜ」

そんな会話を交わしつつ、明日見と源蔵が連れ立って地下室を去ろうと振り返った時、基経の少々情けない声が明日見の背中に縋り付く。

「ちょ、ちょっと待ってよ。俺だけ置いてくつもりか？」

「ははん。お前が例の盗人のガキだな。まあ、お前は拘束される尤もな理由があるんだから、もう少しそこで大人しく反省しているんだな。ま、悪い様にはしねえからそこで待ってな」
振り返った源蔵は容赦がない。

その口ぶりからすると、基経についても何らかの話を聞いているのだろうが、幾ら相手が子供とは言っても盗人の常習犯では、さすがに源蔵といえども立場上基経をそう扱うのは致し方のない所なのだろうか。

「ごめん、基経君。もうちょっと待ってて。源蔵さんは信用出来る人だから、事を上手く運んでくれると思う」

待って……基経は尚も明日見を背後で引き止めた様な気がしたが、明日見は振り返らずに源蔵の後を追って階上へ出た。

明日見はそのまま、治安部隊詰所の書類が散らばった事務用机に腰掛け、この町の治安部隊二人を真向かいに、源蔵を傍らにして、今朝寺院で行われていた事の一部始終と、明日見が寺院から持ち帰った、住職の奴隷売買の証拠となるメモ紙の束について、また、逃走を図ったと思われる住職を現在寺院に拘束している事などを掻い摘んで説明した。

明日見の持ち帰った証拠品は、住職の奴隷売買の事実を証明するに十分な書類と見られだし、更に明日見の証言通り、寺院の蔵に子供達が閉じ込められていたとすれば、『住職が奴隷売買を行っていた』とする嫌疑は、ほぼ疑い様がなくなる。

「確かに住職が奴隷売買なんて前代未聞だが、寺院に踏み込めば分かる事だ。これから様子見に行ってみるか？」

源蔵のその一言が、その場の空気を決定付けた。

この町の治安部隊隊長と源蔵、明日見の三人は早速寺院の捜索に向かう。

治安部隊の詰所から町外れの寺院までは、歩いて四半刻（約十五分）程かかったが、一人黙々と先を行く隊長の背中を追って、明日見と源蔵は時折雑談を交わしながら歩いていた。

しかし、雑談とは言っても、彼らが現在置かれた状況を反映してか、軽く聞き流せたり笑い飛ばしたりといったものではなく、自然と表情も引き締まる深刻な内容へと傾いていく。

明日見は源蔵の問いに答えて、慶太救出の為に『鼠と子猫亭』に忍び込んだが、不覚にも灰人に捕まってしまった事、そのまま野平町に連れてこられた所を基経に救われた事、基経らの境遇に同情して、また明日見自身思う所があって、孤児達が再び寺院で暮らせる様に活動していた事などを掻い摘んで説明した。

「なるほどね。明日見の話を聞く限りでは、この町の町役場や治安部隊が余りにも屑だった為に、路頭を彷徨う羽目になった孤児達が、盗人に身を襲われてでもなくては生きられない状況に追い込まれたって訳か。東辺町じゃあ隊長や俺がいる限り、そんな事は絶対に許さねえがな。一番悪いのが住職って事には違いないが、そんなんじゃ町役場も治安部隊もガキ共と同罪だな。むしろガキ共は被害者と言ってもいい。まあ、治安部隊と町役場の処遇については、うちの隊長から本部に上げてもらって決着する事になるだろうが、その、孤児達が元通り寺院で暮らせる様にするって奴は、暫定的には町役場に何とかさせるしかないだろう

な」

「でも、今まで見て見ぬ振りを決め込んでいた町役場を、どうやって動かすの？」

「こう見えても、町役場も治安部隊も一種の役人だからな。役人にとって痛い所を突いてやればいいのさ。まあ見てなって、全て良い様に決着してやるから」

明日見には、源蔵の言う『役人の世界の内部事情』というものが良くわからなかったが、一見彼らとは全く毛色が違って見える源蔵も、実は同じ役人の世界の住人だと思い至ると、後は全て源蔵に任せて置けるという気分になった。

また、これまで明日見が源蔵に対して描いていたイメージと違って、知性という意味でもかなり信頼の置ける人物だという事を、多少の驚きを持って認識していた。

特に存在そのものが人を威圧して止まないという源蔵の巨漢に似合わず、実はかなり交渉能力に卓越した優秀な治安部隊隊員だという事を実感した。

尤も、外見から来る身体能力に卓越したイメージだけでは、治安部隊が勤まる筈がないのも、少し考えれば思い当たる事なのだが。

明日見達が寺院に到着すると、既に拘束してあった住職を早速治安部隊引き渡し、また、明日見や源蔵の捜索により、寺院奥の蔵らしき建物から三人の子供が無事救出された。

この事実を持って、『今朝方、怪しい荷車が三人の子供を乗せたまま町を立ち去った』という、基経や明日見の証言の正しさがまた一つ立証された事になるが、これから荷車を追跡するには少々遅過ぎたし、そちらに割く人員が確保出来ないという事情もあって、残念ながら荷車の追跡は断念するしかなかった。

また、寺院で天鵬、経巧、日向、三蔵と合流したが、天鵬と経巧は、基経と共に不特定多数の旅行者に対する窃盗容疑で治安部隊に一旦拘束され、正式な処置の決定を待つ事になる。

一方、一旦街中に戻った明日見と日向、三蔵は、この町の治安部隊隊長と源蔵を伴って町役場へ赴いた。

孤児達が再び寺院で暮らせる様に筋道をつける為の、当面の対応を協議する為だった。

町役場は突然の住職の逮捕を受けてうろたえ、また、これまでの孤児達の扱いに関する町役場の責任を認めようとはしなかったが、ここでもやはり源蔵が町役場の非を適切に追及したおかげで、明日から孤児達は寺院に戻れる様になる事が急遽決定した。

最終的な扱いは寺院の側に委ねるものの、当面は町役場から子供の生活を保障する為の人的、経済的な支援を行なう事と決められたのだ。

現段階では、最終目標である『再び寺院で暮らせる様にする』までには辿り着けなかったが、かなり大きな前進であるという事だけは言えた。

今日こそは小屋で待っている子供達にとっても大きなお土産がある……当面の打ち合わせを終えて、日向とも分かれて家路を急ぐ明日見達の足取りは、自然と早まっていた。

「まさか今日のうちにここまで話が進むとは思わなかったけど、みんな源蔵さんのおかげね」

「ははっ、俺は何にもしてねーからな。みんな明日見や、寺院に戻りたいっていうこいつらの強い気持ちが通じたって事だろうな」

「そうね。三蔵君だって、とっても頑張ったものね？」

「うん。でも、兄ちゃん達が治安部隊に捕まっちゃったのがな……」

「でも、盗人はやっぱりしてはいけない事だし、悪い事をした人はその罪を償わなくては
いけないの。それでも、今回住職の罪を暴く為にみんな頑張ったんだから、ちゃんとその良
い事の方も合わせて基経君達の扱いも決められるから、あんまり心配しないで」

「でもさ……」

「いいか、坊主。人間は誰でも、自分のした事に責任を取らなくちゃならない。お前の兄貴
達も、その責任を取ろうとしているんだ。だからこそ、こういう目に合いたくなかったら、悪
い事はやっちゃ駄目だって、わかるか？」

「うん」

「でも、源蔵さんはこんな所までついて来てもいいの？ 早く帰らないと公亮さんに怒ら
れてしまうのじゃない？」

「ははっ、うちの隊長はその程度で頭ごなしに叱りつける様なタマじゃねえからな。でも、
今日中には帰った方がいいだろうから、明日見の逗留先を確認したら帰るさ。町に駝を預け
てあるから、飛ばせば一刻（約一時間）もしないで帰れるし」

「ほら、あそこが俺達の小屋だよ」

三蔵が走り出した先に見える、丸木を積み重ねた少々古ぼけた小屋の窓は、普段なら明か
りが漏れていてもよい筈の時間になっても、真っ暗なままだった。

「明日見、確かまだ他にも子供達がいたんだったよな？」

「ええ、この時間なら、もう灯りが点いていてもいい頃合いだけど……」

やっと一つ懸案が片付いた……そう思って安堵したのもつかの間、明日見の心には早く
も微かな事件発生への不安が芽生えていた。

＊

『子供達は預かった。返して欲しければ、明日見が一人で町外れの廃墟に來い。お前がこの
前俺達の荷車から逃げ出した、あの廃墟だ。絶対にお前一人で來い。もし治安部隊なんか呼
びやがったら、子供は全員ぶち殺す。灰人』

辺りを薄闇が覆い隠して、そろそろ部屋の明かりを点けなくては視界を奪われてしまう
という時分になっても、屋外よりも一層深い闇が窓越しに漏れてくる丸太小屋の扉には、そ
の場の感情を叩きつけた様な、癖のある子供っぽい字の書かれた紙が無造作に貼り付けら
れていた。

窓越しに室内を覗き込んだだけでも、普段なら先を争って出迎える筈の子供達の気配が
ない事は分かる。

どうやら、紙に書かれた文章は、単なる悪質な嫌がらせといったレベルの代物ではないら
しい。

それにしても、その紙に書かれた知性の欠片も感じられない文字といい、お世辞にも文才

があるとはいえない稚拙な文章といい、たとえ悪党ではあっても頭の切れる灰人の直筆とは余りにもイメージがかけ離れている。

きっと曾頓か呆六辺りが灰人の名を勝手に借用したか、灰人の意を受けて代筆したのだろう。

「どうやら、下らん悪戯なんかじゃなさそうだな」

いち早く源蔵が紙切れを剥ぎ取り、改めて二度、三度と文面を目で追っている。

「全く、寺院の方がやっと一段落ついたと思ったら、今度は灰人達だなんて……」

「明日見、これってどういう事？」

源蔵や明日見の反応に不安を覚え、また、今し方自分自身が目にした紙の文面が俄かに信じられなくて、三蔵は明日見に問いかける。

しかし、三蔵にとって明日見の答えは自分が読み取った意味のままだったし、あってはならない最悪の展開といってよかった。

「ごめん。私をこの町まで拉致して来たならず者達に、『今私がここにいる』って感付かれたみたい」

「えっ！ そのならず者って、明日見をどこかへ売り飛ばそうとしていた悪い奴でしょ？」

「うん。でも、私が絶対に取り戻すから……」

「逢蘭姉ちゃんも、延尊も遥采も、悪い奴らに売り飛ばされちゃうの？」

「そんな事ねえぞ、坊主。俺が灰人達を一網打尽にしてやるから、安心しな」

不安げに明日見の顔を見上げる三蔵の頭を、源蔵の無骨な掌が撫でた。

「でも、源蔵さんは……」

「治安部隊だから、付いていったら不味い……ってか？ そんなベタな脅し文句を一々真に受けていられるかって。それに、灰人達には明日見や慶太を誘拐した容疑があるし、呆六にはそれに加えて老師の小屋を焼き討ちしたって証言もあるんだ。そういった幾つもの事件のケリを一気につける好機だと思わないか？」

「それはそうだけど、もしこの脅迫文が灰人の意向だったら、きっと子供を殺めるくらいは眉一つ動かさずに平然とやってのける奴だから。灰人という奴は……」

「えっ！ そうなの？」

「そんな、明日見が余り驚かすから、ガキがビビっちまってるだろ？ なに、大丈夫だって。俺は明日見の背後から姿を隠して付いて行って、逆に灰人らを混乱させてやるさ」

「でも、源蔵さんはそろそろ東辺町に戻らないと……」

「いいって事よ。その辺、うちの隊長は話の分かる人だからな。明日見だってその辺はよく分かってるだろう？」

「そうだね。だったら、源蔵さんには奴らに見つからないように私の後をついて来てもらって、出来たら灰人達を一網打尽にするって事で、いい？ ただし、あくまでも子供達の身の安全が第一だから、余り無理はしない」

「当然だ。本来ならば、こういった仕事は治安部隊が全面的に任されるべきなんだが、この町の治安部隊は……ちょっとな。その点、女だてらとはいえ武術をこなせるだけに、明日見

の方がまだ頼りになるってmondana」

「……私だって、その辺の治安部隊に武術で遅れをとる気はしないから、源蔵さんこそ足手まといにならないようにね」

「いってくれるな」

「それから、三蔵君はここに一人に残るよりも、面倒でも日向さんの所にでも行った方がよさそうね」

「ええ！ ヤダよ……僕も行く！」

「駄目よ。逢蘭ちゃん達が心配なのは良くわかるけど、一緒について来て三蔵君まで危険な目にあわせる訳にも行かないでしょう？」

「しかしな、俺達二人して灰人達の所に行って、坊主を一人にしておくってのも危なくねえか？ 灰人達の手下が今もどこからか俺達を見張ってて、俺達が坊主と別れた隙を狙われるって事も考えられる」

「それじゃあ、どうしたらいいの？」

「そうだな……とりあえず明日見は、その廃墟って奴に向かってもらうしかねえな。その間に俺は、坊主を一旦どこかに預けて、それから明日見の後を追いかけるってのはどうだ？」

「でも、この近くで三蔵君を預けられる場所なんて……」

「農家の婆ちゃんの所があるよ」

三蔵の声に、明日見ははたと気づいた。

基経達がこの小屋に住む様になって以来、風呂を借りたり、何かと細々とした面倒を見てくれる農家があったのだ。

明日見も基経の元に身を寄せて以降、二度程風呂を借りに訪れた事がある。

「源蔵さん、あそこに小さな明かりが見えるでしょう？ あの家は、三蔵君達が普段良く世話になっている農家なのだけど、あそこなら預かってくれると思う」

「分かった。で、その廃墟とやらはどこにあるんだ？」

「この道を半刻程歩いた所だけど。道はそれ程複雑ではないし、私もゆっくり歩くから、この道沿いに追いかけてくれればすぐに追いつくと思う」

「そうか。まあ、俺は素直にこの道を通ったりしないけど、背後からきっちり明日見を追いかけるから安心しろ。もし奴らがこの辺にまで見張りなんかを放っていやがったら、ついでに全部片付けておくから、明日見は廃墟に向かう事だけに意識を集中してろ」

そういい残して、源蔵は小さな三蔵の体を抱えあげると、そのまま夜に闇に姿を隠した。

薄闇に暮れる小屋の戸口に一人残された明日見は、小さく溜め息を漏らすと気持ちを再度引き締めて廃墟へと向かう。

源蔵が姿を隠したまま後を付けてくれるのなら、自分は出来るだけ目立って奴らの注意を惹き付けなければならない。

明日見は一応自分の背後にも気を配りつつも、振り返ったり周囲を気にしている素振りは一切感じさせない様に、常に細心の注意を払っていた。

もし、明日見の行動を灰人の手下が常に見張っていて、源蔵が密かに明日見の後を付けて

いる事を気取られてしまったら、もし灰人にその事を知られてしまったら、拉致されている子供達の命の保障はない。

しかし、逆に明日見が灰人の要求通りに大人しく出頭したとしても、灰人が子供達を解放するかどうかは分からない。

灰人とはそういう奴なのだ。

子供達を救出するのはもちろんだが、その代わりに再び明日見自身が灰人の手にかかってしまうという事態も、出来れば避けたかった。

その為には、明日見が囹となる事で源蔵に対する灰人達の注意を逸らし、その隙を狙って源蔵に子供達を救出してもらうしかない。

灰人達の待ち受ける廃墟に自ら赴いても、明日見自身の身を守るくらいならば何とか一人でこなせる自信はあったが、自分の身も守って子供達を救出して……というところまでを一人で対応し切れる自信はなかった。

曾頓程度のならず者が何人こようと、ものの一撃で退ける事は容易だったが、灰人の手管に反撃の機会を逸してしまう可能性は充分にあり得たからだ。

東辺町にある『鼠と子猫亭』で、明日見が灰人の手にかかってしまったのも、決して明日見が武術で敗れた為ではない。

灰人と言う奴が、まさかあのような卑劣な手段を、表情一つ変えずに用いて来るとは想像できなかったのだ。

むしろ武術で決着の付けられる相手であれば、明日見にとってはどれ程楽だっただろう。

灰人が子供達を盾に、明日見を意のままに扱うつもりなのは容易に想像が付いたし、子供達を盾にしている限りは明日見の武術を封じる事が出来る……そういった卑劣だがしたたかな計算の上で、敢えて灰人は子供達を誘拐させたのだろう。

「でも、そう簡単に灰人の意のままになるものか……私は早く慶太の救出行に戻らなくてはならないのだから……」

明日見が基経と出会うきっかけとなった廃墟を目の前にして、一度気合を入れ直す為に立ち止まり、一つだけ深く息を吸い込んだ。

基経の小屋からの僅か半刻（約三十分）の間に、周囲はとっくりと濃密な闇に覆われていたが、逆に廃墟の窓から漏れるランプの明かりが眩しい位に輝いて見える。

廃墟の入口付近に立って、周囲を警戒していたらしき灰人の手下二人が、早くも明日見の到来に気づいたのか、一人は廃墟の中に入り、もう一人は明日見を睨み付けたまま身構えている。

——どちらにしても、手下共が相手では話にならない。

明日見は手下の男を鋭く睨み付けながら、更に廃墟との間合いを詰めた。

「灰人！ 要求通りちゃんと小屋まで来たのだから、関係のない子供達は即座に解放しろ！ お前は私を拘束するのが目的なのだから、もう子供達には用はない筈だ！」

明日見が一足先に、廃墟に向かってそう叫んで自らの到来を告げると、古ぼけた廃墟の扉が開いて、中からワラワラと十人程の男達が相次いで飛び出てきた。

しかし、その中に灰人の姿はない。

「灰人はどうした！ 子供達はどこだ！ さっさと姿を現せ！ 灰人！」

「うるせー！ お前の相手は俺様がしてやる！」

そう喚いて明日見の前に進み出てきたのは曾頓だった。

「お前一人の相手くらい、本当ならわざわざ灰人さんが出て来るまでもなく、俺様一人で充分な筈なんだ。それをお前はいつでも人を馬鹿にしやがって、まともに戦おうとしやがらねえで逃げやがって……今日こそきっちり勝負を付けてやる！」

「曾頓……あなたまだ懲りないの？ こっちはあなたのお遊びに付き合っている暇はないのだから、さっさと灰人を連れて来なさい」

「うるせー！ そこまで俺をコケにしやがるとは、俺はもう完全にトサカに来たからな！」

吐き捨てる様に喚くなり、曾頓が拳を振上げて明日見に向かって突進してくる。

——全く、毎度似たような猪突猛進が私に通用すると思っているの？

明日見は内心、毎回余りに進歩がなく、力とその場の勢いと妙な勘違いだけを武器に、猪突猛進を繰り返すだけの曾頓を見て、自分自身と相手の力量を正確に見極められない愚かさ哀れさを感じていた。

曾頓にとっては毎日が真剣そのものなのだろうが、幼少時より半ば遊びの様に武術の鍛錬を積み重ねてきた明日見と、一般庶民より少々乱暴で力が強いというだけのゴロツキとでは、どう足掻いても曾頓に勝ち目はない。

しかし、曾頓にはそれがどうしても理解出来ず、納得出来ないらしい。

「うりゃあ！」

生理的嫌悪感を感じさせる唸り声と共に、曾頓は渾身の左拳を明日見の頬に叩き込んだ……筈だったが、またしても寸前で明日見は曾頓の拳を交わし、勢い余ってつんのめる曾頓の後頭部に回し蹴りを叩き込む。

「うがっ！」

曾頓の体はそのまま頭から地面に突っ込んだ。

途端に灰人の手下共の間からどよめきが起こる。

明日見とまともに手を合わせたのは、灰人の手下では曾頓と呆六だけだったから、これまで明日見に散々痛めつけられたという話を聞く度に曾頓を嘲っていた彼らも、余りに鮮やかかつ的確な明日見の身のこなしに、半ば呆氣に取られ、半ば恐れ戦いていると言った風だった。

「さあ、次に私の手にかかりたいのは誰？」

「クソ！」

「っざけやがって！」

「なめんな！」

明日見の挑発に呆氣なく乗せられた三人が、相次いでワラワラと明日見に殴りかかるが、明日見にとっては随分と隙のあるスローモーション映像にしか見えない。

彼らの繰り出す拳を呆氣なく交わすと、一人目は鳩尾に膝蹴りで蹲り、二人目は首筋に手

刀を打ち込み、三人目は懷に回し蹴りで悶絶と、瞬きする間もなく三人のならず者を料理する。

「さあ、お遊びはここまでにして、さっさと灰人を呼んできなさい。それとも、まだ私の拳を受けたいという奇人な人が居るのかしら？」

明日見は全く呼吸も乱さず、悠然と間合いを詰める。

しかし、さすがに三人が同時に襲い掛かっても呆気なく明日見に倒されてしまった様子を目の当たりにして、ならず者達の戦意は一気に喪失してしまっていた。

明日見が一步間合いを詰める度に、ならず者達は無意識のうちに一步後退する。

この際、人数の差は全く意味を成さなかった。

「さあ、さっさと灰人を呼んできて、関係のない子供達を解放しなさい。私は幾らでもあなた達の相手をするつもりで来たんだから、気が変わらないうちに急いだらどう？ それとも、全員私の拳でオネンネしたいのかしら？」

その時、廃墟の扉が突然開き、戸口の男が明日見に呼びかけた。

「明日見！ こっちには人質がいるんだからな。余り派手に暴れると人質がどうなっても知らないぞ」

「呆六！」

明日見は思わず戸口の男に叫び声を上げていた。

灰人も曾頓も、その他のならず者共も、一様に赦せない事に変わりはなかったが、老師の小屋を焼き討ちした呆六の卑劣な行状は更に輪をかけて赦し難かった。

「お前達が勝手に殴りかかってきた癖に、全て私に罪を擦り付けるとは、つくづくお前達の卑劣さに呆れ返る。特に呆六、お前は代峰老師の小屋に火を放って焼き討ちにしようとしたのではないか。お前は学校で『お年寄りはお助けしましょう』とは教わらなかったのか？ いずれにしても、老師を殺めようとした分も含めてきっちりケリをつけるから、今日こそ覚悟しなさい！」

明日見が廃墟に駆け寄ると、呆六は慌てて扉の奥に逃げおおせた。

廃墟を取り囲むならず者の中には、既に明日見に対して何らかの危害を加えようとする者はいない。

すっかり臆病風に全身を蝕まれてしまったのだ。

明日見は、自分の行く手を妨げない様に、音もなく廃墟から遠ざかって、遠巻きに事の成り行きを見つめるならず者共を無視して、荒っぽく廃墟の扉を開け放った。

「やあ、明日見くん。また君に会う事が出来て、ボクは嬉しいよ」

廃墟の部屋の向かい側に、灰人はいつぞやの時と同様、不敵な笑みを浮かべて椅子に腰掛けたまま、明日見を直視していた。

灰人の腕の中には、最も幼い遥采が身を震わせていた。

明日見の姿を確認出来た事で一瞬和らいだかに見えた表情も、灰人が掌の短刀をひけらかすと、再び怯えた様に硬直してしまった。

傍らにいる逢蘭と延尊も、やはり同様に灰人の手下にナイフをひけらかされて、無言のま

ま引き攣った表情で明日見に訴えかける。

「……汚い真似を」

「そうかねえ？ 私にとっては、明日見クン一人だけが武術の使い手だと言う事も『汚い真似をする』と思うのだが、どちらも似たようなものではないかね？」

「……私は、武術を自分の利己的な目的を成し遂げる為に、他人を脅したり意のままに従わせようとして用いた事はない。お前達と一緒にするな！」

「クククッ……そうかねえ？ まあ、その様な事はどちらでも構わないが、私の部下にも、明日見クンに散々痛めつけられた者がいるのでね」

灰人が言っているのは、多分曾頓の事なのだろう……明日見は瞬時に直感した。

しかし、明日見に言わせれば、そもそも曾頓が勝手に明日見に絡んできたのだし、曾頓の攻撃をかわさなければいい様に痛めつけられた可能性だって無くはない。

一瞬そんな思いが頭を掠めたが、明日見は慌てて打ち消した。

まさか、私が曾頓に痛めつけられるなんて、天界が下界に落ちて来る様な天変地異が起っても、絶対にあり得る筈が無い。

そもそも、私が単に身を守っている間に曾頓が勝手に自滅した……というのが事の真相だ。

その責任を私に押し付けるなんて、とんだ逆恨みも甚だしい。

明日見が視線を一層尖らせて灰人を睨めつけるが、当の灰人は相変わらず人を嘲る様な、鼻で嗤う様な笑みを唇に浮かべつつ、全く動じた気配が無い。

しかし、人の情けを完全に謝絶した酷薄な瞳は、冬の雪山に突き立つ氷柱の様に鋭く凍りつき、今にも明日見の心臓を刺し貫こうとしている。

「ともあれ、明日見クンにこうしてわざわざご足労願ったのだから、先に話すべき事を話してしまおうではないか」

「こちらにはお前と話し合わなければならない事など無い。関係の無い子供達は早く解放しろ！」

「おっと、明日見クンにはまだ今の事態がよく理解出来ていない様だ。最近私の手は少し敏感過ぎてね……ちょっとでも不穏な素振りを見せればもちろん、私を苛立たせる様な言動にも反射的に反応してしまうのだよ」

灰人はワザとらしく、意図的に嘲りの笑みで唇を歪めながら、腕の中の小さな遙采の首筋に短刀を押し付ける。

遙采は反射的に、声にならない小さな悲鳴を漏らし、全身を硬直させて小刻みに震えている。

「灰人……、その子達をちょっとでも傷つけたら、あなた達全員を許さないから……」

「明日見クン、まだ分からないのかね？ この場の主導権を握っているのはボク達だと言う事が」

「クッ……」

明日見は思わず息を詰まらせた。

確かに、灰人達が人質を抱えている間は、一方的に灰人に分がある。

「さて、ここまで言って、ようやく自分の立場が理解出来た様だね。ボクもこの子達を傷付ける事には抵抗があったから、今のうちに理解してくれて嬉しいよ」

——よくも心にもない事をいけしゃあしゃあと云ってのける。

明日見は眉根に皺を寄せて、奥歯をきつく噛み締めた。

「まあ、ボクも明日見クンに素直に従ってもらえれば、何も無差別にこんなに幼い子供の命まで奪おうとは思っちゃいない。全ては明日見クンの行動次第なのだよ」

「ふん。今更口先だけでそんな事を言っても信用出来ると思っているの？」

「それはお互い様だよ、明日見クン。ボク達だって、一度はまんまと明日見クンに逃げられたのだから、それなりに用心もすると言う事だ」

「何を言うかと思ったら……そもそも人を騙して薬を盛って、無理やり拘束しておいて、良くもそんな口を聞いたものだ」

「それを言うなら、曾頓クンには明日見クンに言うべき事が幾らでも見つかりそうだとにかく、この様な下らんやり取りで時間を無駄に潰すのは私の趣味ではないのでね、そろそろ具体的な交渉に入ってもよろしいかね？」

「交渉？」

「そう。明日見クンはこの子供達の無事解放を求めているのだろう？ ボクにとってもそれは望ましい……」

——自分から子供達を誘拐しておいて、何を今更善人ぶった言い回しを……。

「しかし、ボク達も明日見クンの身柄を手に入れたいのだよ。そこで、お互いの手に入れた者をどの様にして交換するのか……なのだが」

——自分達の身勝手な都合ばかりで、人を思いのままに操ろうとしたって……。

灰人は初対面の時から全く変わっていない。

人であるが故に持つ、精神的な影響を及ぼす弱点を巧みに突いてくる……人であるが故にその弱点を知り尽くしているのか、人が本来持ち合わせている豊かな感情表現が極端に欠落している灰人だからこそ、人の情けに付け込んだ陰惨で酷薄な仕打ちにも眉一つ動かさずに実行出来るのか、明日見には良くわからなかった。

＊

「こちらの手には三人の子供達がいる。明日見クンは『先に子供達を解放しろ』と要求するだろうが、それでは子供を解放した後に明日見クンにも逃げられてしまう可能性がある。何といっても明日見クンは武術の使い手なのだから、ボクの手下が束になって襲い掛かっても敵うかどうかは分からないのだからね。かといって、『先に明日見クンを拘束する』という提案を明日見クンが呑むとも思えない。明日見クンはボク達に不信感を抱いている様だからね」

ふと、灰人は腕の中に抱えていた遥采を一旦床に降ろして立たせ、自分も椅子から立ち上

がって遥采の背中を軽く叩いた。

「さぁ、ボク達には子供に危害を加えるつもりがないという意思表示だ。まずこの子を開放しよう」

「おねえちゃん！」

幼い遥采は、灰人に背中を叩かれて反射的にビクッと背筋を震わせたが、そのまま明日見に向かってぎこちなく駆け込んできた。

明日見は、向かい側の壁際に対峙したまま、尚も二人の子供を拘束し続けている灰人達に注意を払ったまま、一瞬膝を折って両腕を差し出し、駆け込んでくる遥采を出迎えて抱きしめた。

「おねえちゃん、怖かったよ……」

「大丈夫、もう大丈夫だよ」

遥采の表情はどこか強張っていた。

やっと悪人の手から開放されて明日見の元に戻されたとはいえ、まだ悪い奴らの手を完全に逃れた訳ではない。

それに、逢蘭お姉ちゃんも延尊も未だに捕まったままなのだ……そう思うと、幾ら幼い遥采とはいえ、そう簡単に安心し切ってしまえない事情は肌で感じていた。

明日見は再び立ち上がると、遥采の小さな手を握り締めたまま、尚も灰人に鋭い視線を叩きつける。

「一体どういうつもりだ？」

「だから、ボク達の事をもう少し信用してもらおうという、意思表示の現われだよ。これでもまだ不服というなら、もう一人そちらに引き渡そうか？」

灰人が傍らの男に視線を向けると、男は延尊の腕を放して『行け！』と短く言い放った。

「明日見！」

反射的に、弾き飛ばされる様にして延尊も駆け出し、今にも泣き出しそうなくらいに顔を歪めて飛び込んでくる。

明日見も、これまで灰人らの拘束に耐えた延尊を労う為に膝をつき、先程の遥采と同じ様に両手を差し出して出迎えた。

しかし、明日見は小刻みに震える延尊の体を抱きしめている間にも、灰人達が不穏な動きを見せてもすぐに反応出来る様に、視線だけは片時も背けずにいた。

「さぁ、これで二人の子供を返還したのだから、そろそろボクの事を少しは信用してくれてもいいだろう？」

「まだ、もう一人いるでしょう？ その子も早く開放しなさい」

「それは、これからの明日見クンの行動次第で決めさせてもらおう。まずボク達が明日見クンの要求に応じて、二人も子供を返還したのだから、今度は明日見クンがボク達の要求に応じる番だとは思わないかね？」

「そんな事をすれば、お前は前言を翻して再び子供達を拘束するかもしれないだろう？ この子供達を解放したといっても、未だに私自身がお前達に囲まれている状態なのだから」

「本当に疑り深い女だな……キミは。それではどうしたらよいのだね？　ここで交渉を打ち切って、その二人だけを連れ帰るかね？」

「そんな事は言われるまでもないだろう？」

明日見は言外に、『そもそもお前達の要求自体が常軌を逸しているのだから、私がそのような不条理な要求に従う道理はない。お前達のこれまでの罪は問わないで置いてやるから、さっさとその子も開放して立ち去ったらどうだ？』と告げたが、さすがにその言葉を声に出すまでの気持ちにはなれなかった。

灰人を本気で怒らせれば、本当に子供の一人くらいその場で造作もなく殺めてしまいかねないからだ。

だからといって、灰人の要求通りに自ら拘束されるなどあり得なかったし、逢蘭一人を置いてこの場を立ち去る訳にもいかなかった。

——そういえば、源蔵さんは何をしているんだろう……私一人では……。

一旦明日見と別れて、三蔵を近隣の農家に送り届けた筈の源蔵が、取って返して陰ながら明日見の後を追っている筈だった。

しかし、ここまで源蔵は姿を見せていない。

もしかしたら、今この瞬間にもこの廃墟に突入する時期を窺っているのかもしれないが、廃墟への道中で逸れてしまったのかもしれないし、何らかの別の事件に巻き込まれたのかもしれない。

仮に、今この瞬間にも廃墟の外に潜んでいたとしても、未だに廃墟を囲む様にして五～六人のならず者が残されている筈だから、そのならず者達に気付かれずに廃墟に近付くのは難しい。

源蔵はれっきとした治安部隊なのだから、どの様な不意打ちを食らったとしても、ただ料がっているだけのならず者に後れを取るとは思えないが、どうやっても廃墟に近付こうとすればならず者に見つかるし、そうすれば外が騒がしくなる筈だ。

灰人の意向はともかくとしても、一見難なく二人の子供を取り戻した明日見は、その為に返って余計な負担を背負う羽目に陥ってしまった。

明日見一人では目の前の灰人達をかわして逢蘭を救出し、更には延尊と遥采を守りつつ廃墟を離脱するのは不可能に思えた。

最低でも、子供達を守る役割と、ならず者達の相手をする役割を分担しなければ、逢蘭を取り戻す事も叶わず、再び延尊と遥采も灰人達に奪われかねない。

——何をやっているの……源蔵さん、早く来て……。

「まあ、そうだろうな。明日見クンならば、一人だけを見捨てる筈はないだろうからな。では、どうしたら信用してもらえるのかね？　その二人の子供を先に送り返したら、少しは聴く耳を持ってもらえるかね？」

「……そうね。私は、まずこの三人の子供が確実に開放されて、二度とあなた達の手にかかる危険が及ばない……それが確認出来れば良いのだから」

「ふむ、キミの言わんとする事は分かる。やっと少しはまともに話をする気になって来た

様だね」

明日見の曖昧な返答を灰人が勝手に勘違いしたらしく、一瞬チリチリと殺気立った室内の空気は、何とかつかの間の穏やかさを取り戻した。

明日見は、当面灰人の主導する交渉の流れにに応じている振りを装いつつ、もうしばらく時間を稼いで時期を窺う事にした。

ここで灰人の機嫌を損ねて交渉を打ち切ってしまうては、どう考えても逢蘭の身にまず危険が及ぶし、延尊と遥采の身も安全というには程遠い状態だ。

それに、灰人達が背中にしている壁の向こう側にはもう一つの小部屋がある様だったが、瞬間的に何となく気配の変化があった様にしたのだ。

——源蔵さん！

明日見はそう直感していたが、もしかしたらならず者達のうちの何者かがずっと壁の向こう側に潜んでいた……という場合も考えられた。

しかし、ここは灰人達の注意を出来る限り自分自身に惹き付けて、その間に源蔵さんが奴らの虚をついて千載一遇の好機を築いてくれる事に期待した方が、先の望みがあると明日見は判断していた。

明日見は一瞬だけ、偶然を装って視線をちらりと部屋の端に佇む闇に漂わせ、すぐに灰人の口元に視線を戻したが、常にぽっかりと口を開けた隣室の闇の奥に意識を集中させていた。

「まず、その二人については既に自由だ。ボクがそう命じれば手下共も手出しはしない。二人の姿が闇の奥に消えるのを明日見くんが実際にその目で確認する事も出来る。しかし、もう一人のこの子は別だ。こちらにも『明日見くんが確実にボク達の手の内に入る』という証明が必要だからね」

「でも、一度私を拘束したら、あなたがそれでも子供を解放するという保証はないでしょう？ 私が拘束されてしまえば、あなた達にとってはやりたい放題に出来るのだから」

「結局、折り合えない部分はそこなのだな。それでは、誰か信頼の置ける仲介人でも立てて、その仲介人に子供の扱いを託すかね？」

「そんな仲介人に相応しい人物が、一体どこにいるというの？」

「うむ……確かに……」

灰人がそう呟いて首を捻ったその時、使い込まれて歩く度に軋み音が響く床板が、メリメリと弾ける様に音を立てて盛り上がり、次の瞬間には床板に人の通り抜けられる程の大穴が空いていた。

そして、大穴の脇には、廃墟の天井に頭が擦れそうな程の巨漢が出現して、灰人達を頭一つ上から見下ろしていた。

「何なら、俺がその仲介人を引き受けてやろうか？」

「源蔵さん！」

「へへっ、明日見、待たせたな」

「くっ、何で東辺町の治安部隊がこんな所に……」

幾ら木の朽ちかけた廃墟とはいえ、床板を破って源蔵が現れるとは誰も想定していなかった為、その部屋にいる全ての者が一瞬目の前に起こった事態に呆気にとられてしまった。

しかし、源蔵が眼前のならず者に腕を掴まれたままの逢蘭に手をかけようとした瞬間、一足早く傍らの灰人が逢蘭の手首を掴んで自分の手元へ引き寄せ、すかさず短刀の刃を逢蘭の頬に当てる。

「おっと、そう簡単にこちらの大切な駒を手放す訳には行かないのでね。この子を傷付けられたいくれば下がってもらおうか、でかいの」

クッ……源蔵は一瞬遅れた自分の反応に小さく後悔の舌打ちを鳴らすと、灰人を鋭く睨みつけながら一歩、また一歩と退く。

そして、源蔵が壁際の明日見と同じ位置まで引き下がった事を確認すると、灰人は少々安堵したという風に眉根に刻んだ皺を解き、再び嘲る様な笑みを口元に浮かべていた。

「まさか、東辺町の治安部隊が隣町にまで出張とは、ご苦労な事だ。ボクとしても少々想定外だったがね。とんだ邪魔が入ってしまっただけで残念だが、この取引は次回まで持ち越しにしようじゃないか。どうかね、明日見くん？」

「持ち越しなんて、ふざけた事を……」

「幾ら自分の思い通りにならないからといって、そうあからさまに嫌な顔をする事もないだろう？ ボクは案内状に『治安部隊を連れてきていい』と書かせたつもりはないのだから、本来ならば明日見くんの協定違反で協議は即刻打ち切り、この子はこの場で首を刎ねられても文句を言われる筋合いではないのだから、もう一度機会を与えられたというだけでも喜んでもらいたいものだ」

「源蔵さんはたまたま私に勝手に付いてきただけで、連れてきた訳ではない。そんな事はお前も、部下の連中もその目でよく見ているだろう？」

「そういう下らん屁理屈はいい加減にしたらどうだね？ ボクの手はキミに裏切られた精神的な衝撃で、今すぐにでもこの子の顔をざっくりと切り刻んでしまいたい衝動に駆られているのだがね」

「うっ……」

灰人ならば今自分が口にした内容をすぐさま行動に移しかねない。

明日見は遥采と延尊の小さな手をそれぞれ握り締めている両方の掌を、二度と手放さぬ様によりきつく握り直し、ただ一人灰人に拘束されたままなす術もない逢蘭に対する、どうしようもない気持ちのやり場を失っていた。

「まあ、そんなに心配する必要もないだろう。ボクにとってはこの子は如何程の価値もないのだから、明日見くんが次回の交渉に応じる意思がある限りは、壊れ物を扱う慎重さでこの子に接すると誓おう」

「その言葉が信用に値するという根拠は？」

「私にとっては、明日見くんの方が何倍も価値があるのだよ。それに、交渉材料を自ら傷付けて交渉自体をぶち壊す様な愚行を、わざわざボクが犯すと思うかね？」

確かに、灰人の性格を考えれば、ここで逢蘭を亡き者にしても何の利点がある訳でもない。

逢蘭は生きて明日見との交渉材料にしてこそ、灰人なりの逢蘭の使い道が生まれるのだ。

それがいかに忌むべき犯罪行為であっても、人倫に悖る行為であっても、もとより善悪観念や倫理意識といった社会秩序を支える根本原理とは無縁の人生を歩んできたならず者集団に、そういった人として最低限守るべき規範を強要出来る筈もない。

「……そうね。そこまでして私を意のままにしたいなんて、随分と買い被られたものだけど、あなたの性格ならそうでしょうね」

「フフン。含みのある言い方で気にかかるが、とにかくボクの言葉を信じてもらえて嬉しいよ。では、とりあえずの休戦としよう。まずは、ボク達の為に入出口を開けてもらおうか」

灰人は、尚も唇をきつく真一文字に結んだまま、必死に何かに耐える様に硬直したままの逢蘭に、短刀の刃先をこれ見よがしにあてがっていた。

明日見と源蔵は、隙あらば灰人達に襲いかかろうと、じりじりと壁に沿いつつ移動しながら最後の機会を窺っていた。

しかし、灰人の性格と逢蘭の身の安全を考えれば、ここで無理をすれば返って逢蘭を危険な状況に晒す事になる。

明日見と源蔵はそのままジリジリと摺り足のまま部屋の反対側へ回り、一方の灰人達が廃墟の扉に辿り着いた。

「お前達、先に外に出て出立の準備をしておけ」

灰人が短く告げると、ならず者達は相次いで扉の外へ飛び出し、程なく多くの駝の鳴き声が漆黒の闇に響いた。

「さて、ではボク達は先に旅立つ事にするが、今度こそ余計な邪魔者に干渉されずにじっくりと話したいものだな」

「何を……」

「ボク達はそのまま州境の町『杵柄（きねづか）町』へ向かう。杵柄町にはしばらく滞在するつもりだから、明日見くんがこの子を取り戻したければ、杵柄町の歓楽街を訪ねる事だ。しかし、半月も杵柄町に留まるつもりはないから、追いかけて来るつもりならば急ぐ事だな。ボクも余り気が長い方ではないのでね」

「もし、逢蘭に傷一つでもつけたら……」

「ああ、わかっている。ただし、ボクがこの廃墟を出てから四半刻（約十五分）の間はこのまま留まってもらおう。もしそれが守られないとこちらが確認したら、まずこの子の指か耳を切り落とす事にしよう。そうすればこちらの本気度も明日見くんや、特にそっちのウドの巨漢クンに分かってもらえるだろうからね」

去り際に灰人が不敵な笑みを残すと、傍らの逢蘭を小脇に抱えて扉の外へ飛び出した。

「クッソウ！」

思わず灰人の後を追いかけてしようとした源蔵を、明日見が慌てて引き止める。

源蔵の方が灰人との付き合いは長いのかも知れないが、灰人の本当の恐ろしさは明日見の方が何倍も良く知っている。

灰人はどの様な残酷な仕打ちでも容赦なくやってのけるし、逢蘭に少しでも傷を付けら

れては、基経を始めとした孤児のみんなに申し訳が立たない。

「源蔵さん、駄目だって」

「しかし……。ったく、これじゃあ、幾らあの隊長にだって嫌味の一つも言われかねないし、報告書になんて書けばいいんだよ……」

「でも、逢蘭ちゃんの命には代えられないでしょう？ とにかく、当面の命の保障だけはされたみたいだから……」

「しかしなあ」

未だに緊張は持続していたとはいえ、源蔵が表情を緩めたのをきっかけに、遥采と延尊の二人が相次いで明日見の足にしがみついて泣き始めた。

「逢蘭姉ちゃんが連れてかれちゃったよ」

「明日見、姉ちゃん殺されちゃうの？」

「大丈夫、大丈夫だって。私が絶対に取り戻してくるから、安心して待ってなさい」

「本当に……？」

「当たり前でしょう？ 逢蘭お姉ちゃんは遥采ちゃんにとっても、延尊君にとっても大切なお姉ちゃんなんだから、絶対に取り戻すからね」

「でも、あいつら強そうだよ？」

「そうね。でも、あんな奴らよりも明日見お姉ちゃんの方が何倍も強いんだから、任せておきなさい」

「うん」

「それからね、明日からはまたみんなと一緒に寺院で暮らせる様になったんだよ」

「本当に！」

「だから、逢蘭お姉ちゃんの無事をみんなで祈っていて。絶対に救い出してくるから」

「俺、また『もっくぞっくの木』にお願いしに行くよ」

「遥采もお願いする」

「そうだね。みんなが強く願う気持ちが、お姉ちゃんを守る力になるんだよ」

「うん」

これまでは半ば母親代わりに、そして明日見が訪れてからも相変わらず姉として、常に二人と共にいた逢蘭が目の前で拉致されてしまった事で、延尊も遥采も動揺を隠せずにした。

その為か、普段よりも一層明日見にしがみつく様にしていたが、明日見も二人に対して複雑な思いを抱いていた為か、しばらくの間は二人のいい様に任せていた。

しかし、『いつまでもこの様な廃墟に留まっている訳には行かない』と頃合いを見計らって、とりあえず二人の小さな手を左右両手できっちりと握り締めて廃墟を後にした。

「しかし、灰人の後を追うって言ったって、明日見は本当に後を追うつもりか？」

「ええ、実は、この町の情報屋から仕入れたのだけど、杵柄町には奴隷商人の動向に詳しい情報屋がいるらしいの。慶太の行方を掴むには奴隷商人の動向を掴む必要があるから、いずれにしても杵柄町に行かなくてはならなかったの」

「だが、奴隷商人やらってのは、そもそも治安部隊の仕事なんだがな……」

「だったら、源蔵さんが私の代わりに慶太の行方を追ってくれる？」

「すまん……俺には東辺町の治安を守る仕事があるから。でも、隊長に頼んで杵柄町の治安部隊に灰人達の対応をさせる事は出来るぞ」

「ありがとう。でも、灰人の性格を考えればそれは返って危険だし、逢蘭ちゃんを無傷のまま連れ戻せなければ、幾ら灰人達を治安部隊が捕まえたとしても私にとっては余り意味がないの。逢蘭ちゃんを無事に連れ戻す事が第一、それだけは分かって」

「まあ、それはわかるが……」

「それに、治安部隊といっても源蔵さんや公亮さんの様な人ばかりではなくて、この町の治安部隊の様に信用に値しない人達もいるって事が分かったから、余り治安部隊に頼っても逆に危険かもしれないって……」

「おいおい、そりゃあんまりだ……といたい所だが、残念ながらそういう側面を否定出来ないのが悲しい所だ。幾ら本来の目的が社会正義に則った組織であっても、時を経るに従っていつしか本来の役割を忘れて、自己保全のみに囚われて組織として腐敗していく……そういった悪い一面があるのは事実だからな」

「別に治安部隊の全てを否定している訳ではないの。でも、頼り切るのは逆に危険だと思って……こんなご時勢だしね」

「すまんな、余力になれなくて」

「そんな事ないって。それに、源蔵さんには老師や、東辺町のみんなを守ってもらわなくてはならないでしょ？ とても当てにしているんだから」

「がはは、それは本来の職務なんだし、それくらいは頼りにしてもらわないとな」

そして、源蔵はその日のうちに駝を駆って東辺町へ戻り、明日見も一旦基経の小屋へ戻って、三蔵と延尊と遥采と最後の夜を過ごした。

明日は三人を寺院に送り届けた後、そのまま灰人の後を追うつもりだ。

——一刻も早く逢蘭を連れ戻さなくては……。

何よりも早く逢蘭を、しかも無事な姿で再び彼らの元に送り返す事、それが今の明日見にとって尤も気にかかる事だった。

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。